武蔵国分寺遺跡発掘調査概報

Ⅶ

佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査

1982年9月

武蔵国分寺遺跡調査会
国分寺市教育委員会

序

武蔵国分寺跡の発掘調査は、昭和49年11月の調査会発足より数えて9年目を迎えている。この間、東国有数の規模を誇る二寺の寺域および寺地の確認調査をはじめとして、個人住宅建設に伴う事前調査など150箇所にも及ぶ精力的な調査が行われ、僧・尼両寺を中核として周囲に広がる住居群によって形成された計画都市としての性格が次第に明らかになりつつある。

今回の調査地区は、まさにその周辺に展開する竪穴住居跡群の一部を捉えたものである。本調査の成果は僅かなものであるとしても、こうした資料の積み重ねによって、さらに国分寺跡の理解が深まってくるものと期待される。本報告が広く活用され、武蔵国分寺の解明に少しでも参考となれば幸である。ご叱正を乞う次第である。

最後に、調査にあたって、こころよくご協力をいただいた佐藤威彦氏をはじめ、本報告刊行に至るまでご指導・ご助言を賜った全関係者、並びに、日頃より文化財保護の実務にあたっておられる国分寺市教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

昭和57年9月30日

調査会長　星　野　亮　勝

例　　言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡に於いて昭和48年以来実施されている調査の内、佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査の成果をまとめたものである。調査に係る費用は[redacted]氏が負担した。
2. 調査は、昭和55年4月1日から10月31日まで行い、報告書作成作業は昭和57年9月30日まで武蔵国分寺遺跡調査会事務所で行った。

   なお、本調査は武蔵国分寺遺跡調査会の第107次調査として実施したものである。
3. 発掘調査は、福田信夫が現場を担当した。
4. 本書の執筆・編集は、滝口宏・永峯光一・大川清・坂詰秀一の監修のもとに、福田信夫・樋口喜重子（Ⅵ－2、Ⅶ）の各調査員が分担した。
5. 出土遺物の整理の内、実測・トレースは樋口喜重子・武田満江・山口啓子・小堺俊一、写真撮影は樋口喜重子・武田満江・山口啓子が主に分担した。遺物図面・図版、遺構図面・図版の作成、浄書は、下記に記す全員があたった。
6. 報告書作成の過程で次の方々の御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。（順不同、敬称略）

   広瀬昭弘・早川泉・岡崎完樹・斎藤孝正・守屋雅史・宮櫻雅彦・服部敬史・雪田孝・山口辰一・福田健司・実川順一・雪田隆子・達藤政孝・原田昌幸・新井和之・三上徹也・府中市遺跡調査会・日野市落川遺跡調査会・恋ケ窪遺跡調査会
7. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

   発掘

   小堺俊一・吉田博行・荒木尚司・本田秀生・小林信一・河原文武・馬場昌一・小出淳一・図　昭治・柴田　明・清水　誠・山田直樹・藤崎　努・海老原透・大石昌生・浅見豊彦・耳塚幸広・山内成哲・露木淳一・秋葉孝治・小林　祐・杉山　弘・芝野正己・土屋千年・北村泉・増坂浩一・馬場康郎・富長益男・飯塚幸雄（国際電信電話株式会社管理部）・挟間幹司（同社労務厚生部）・穴倉義昭（株式会社巴組鐵工所建築設計部）・吉上近吉（同社西関東支店）

   整理

   武田満江・山口啓子・小堺俊一・岡ミサオ・永沢昭子・川島真澄・小林幸江・斎藤さだ子・桑名俊子・川岸みつ子・神田礼子

凡　　例

本　文

1. 遺構は、各遺構毎にほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「SI228住居跡」・「SK546土坑」の様に記述した。

SA	柵跡・柱穴列	SE	井戸跡	SX	特殊遺構
SB	掘立柱建物跡・礎石建物跡	SI	住居跡・工房跡	P	ピット
SD	溝跡・溝状遺構	SK	土坑・瓦溜め		

2. 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」(1972『考古学雑誌』58巻2号所収)での名称によった。

3. 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置にした凹面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。

4. 文字瓦の銘記方法については、大川清氏の『武蔵国分寺古瓦塼文字考』(1958)と「瓦塼」(1970『新版考古学講座』7巻所収)での分類名称によった。

図面・図版

1. 遺構

①遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7°08′03″、磁北から0°38′03″ それぞれ西偏する。

②断面図表示の数字は水系レベルで、海抜高を示す。

③スクリーントーンの指示は次のとおりである。

Ⅲb層　Ⅲc層　Ⅳ・Ⅴ層　赤色焼土・焼け面　火熱受けた範囲　粘土　硬質面　〃

④住居跡平面図に於いて、一点鎖線・二点鎖線は床面が堅固な範囲を示す。

⑤遺物分布図に於ける記号は次のとおりである。▲(土師器坏・埦)、△(土師器甕他)、●(須恵器坏・埦)、○(須恵器甕他)、■(施釉陶器)、□(瓦塼類)、×(鉄・石製品他)なお、図中の数字は、遺物番号(次項③参照)を示す。

⑥縮尺は次のとおり統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図　1／200、住居跡・土坑他　1／50、カマド他　1／25

2. 遺物

①土器類に於けるスクリーントーンの指示は次のとおりである。

須恵器・土師器　内黒土師器(器内面に表示)　灰釉陶器　緑釉陶器　施釉範囲(中央に表示)

②墨書はベタで、朱墨書は網点で表わした。

③写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば、「11－2」とあれば、「図面11－2」のことを指す。

④縮尺は次のとおり統一した。

図面　鉄・石製品他1/2、土器類1/3、瓦1/4、縄文土器・石器1/3(石鏃1/2、大形土器1/6)、先土器石器1/2

図版　鉄・石製品、文字部分1/1、土器類1/2(甕類1/3)、瓦1/4、縄文土器・石器1/2(石鏃1/1、大形土器1/3)、先土器石器1/1、礫1/4

本 文 目 次

序

例　　言

凡　　例

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査地区の概観 …… 6

1.　調査地区の位置・立地 …… 6

2.　層序 …… 7

Ⅲ　発掘経過 …… 9

Ⅳ　発見遺構 …… 11

住居跡 …… 11

土坑 …… 18

道路状遺構 …… 19

ピット …… 19

Ⅴ　出土遺物 …… 21

Ⅵ　縄文時代 …… 35

1.　発見遺構 …… 35

2.　出土遺物 …… 36

Ⅶ　先土器時代 …… 39

Ⅷ　小結 …… 42

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置（1／25000）…… 4
第2図　調査地区の位置（1／5000）…… 5
第3図　標準層序…… 7
第4図　遺構配置図…… 12
第5図　縄文時代遺構配置図…… 34
第6図　先土器時代遺構配置図（概念図）…… 39
第7図　須恵器A坏の分類…… 43
第8図　須恵器B坏の分類…… 43
第9図　土師質土器坏の分類…… 44

表 目 次

第1表　調査工程表…… 10
第2表　土器群の組成…… 45
第3表　四中土器群との対比…… 48

図 面 目 次

図面1　SI 228 住居跡実測図
図面2　SI 229 住居跡実測図
図面3　SI 229 住居跡実測図
図面4　SI 229・230 住居跡実測図
図面5　SI 230・231 住居跡実測図
図面6　SI 231 住居跡実測図
図面7　SI 231・232 住居跡実測図
図面8　SI 232 住居跡実測図
図面9　SK 538・539・546 土坑実測図
図面10　SX 6 道路状遺構実測図
図面11　SI 228 住居跡出土遺物
図面12　SI 228・229 住居跡出土遺物
図面13　SI 229 住居跡出土遺物
図面14　SI 229 住居跡出土遺物
図面15　SI 230 住居跡出土遺物
図面16　SI 231 住居跡出土遺物
図面17　SI 231 住居跡出土遺物
図面18　SI 231 住居跡出土遺物

図面 19　ＳＩ 231 住居跡出土遺物
図面 20　ＳＩ 232 住居跡出土遺物
図面 21　ＳＩ 232 住居跡出土遺物
図面 22　ＳＩ 232 住居跡出土遺物
図面 23　ＳＫ 546 土坑出土遺物
図面 24　ＳＫ 538 ・ 539 土坑、Ｐ 29 ・ 197 、遺構外出土遺物
図面 25　ＳＫ 558 ・ 560 ・ 561 ・ 562 土坑実測図
図面 26　縄文土器・石器
図面 27　先土器時代ユニット１・礫群１実測図
図面 28　先土器時代石器

図 版 目 次

図版 1　調査地区遠景他
1. 調査地区遠景（西方市立４小屋上から）
2. 発掘前状況（東から）
3. 土層断面（ＧＥ 76 区南壁、上よりⅠb、Ⅱ、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc、Ⅳb 層）

図版 2　調査地区全景
1. 調査地区全景（南から）
2. 調査地区全景（東から）
3. 調査地区全景、中央部（北から）

図版 3　ＳＩ 228 住居跡
1. 全景（北から）
2. 構築時全景（北から）

図版 4　ＳＩ 228 住居跡
1. 遺物出土状態（東から）
2. カマド全景（西から）
3. 入口部全景（東から）

図版 5　ＳＩ 229 住居跡
1. 全景（南から）
2. 構築時全景（北から）

図版 6　ＳＩ 229 住居跡
1. 遺物出土状態（東から）
2. 東西土層断面（南から）
3. 南壁硬質面（北から）

図版 7　ＳＩ 229 住居跡
1. カマド全景（西から）
2. カマド全景（西から）
3. カマド構築時全景（西から）

図版 8　ＳＩ 230 住居跡
1. 全景（北から）
2. 構築時全景（東から）

図版 9　ＳＩ 230 住居跡
1. 遺物出土状態（北から）
2. カマド遺物出土状態（西から）

目　　次

3. カマド全景（西から）

図版 10　SI 231 住居跡
1. 全景（南カマド発掘前）（東から）
2. 全景（入口部除去後）（東から）
3. 全景（入口部北カマド除去後）（東から）

図版 11　SI 231 住居跡
1. 構築時全景（北から）
2. 遺物出土状態（西から）
3. 南北土層断面（東から）

図版 12　SI 231 住居跡
1. 北カマド脇遺物出土状態（北から）
2. 北カマド全景（南から）
3. 南カマド全景（北から）

図版 13　SI 231 住居跡
1. 南カマド断面（北から）
2. 入口部全景（東から）
3. 入口部断面（北から）

図版 14　SI 232 住居跡
1. 全景（東から）
2. 構築時全景（南から）

図版 15　SI 232 住居跡
1. 遺物出土状態（西から）
2. カマド瓦出土状態（東から）
3. カマド全景（南から）

図版 16　SK 538・539 土坑
1. SK 538 土坑全景（東から）
2. SK 538 土坑東西土層断面（南から）
3. SK 539 土坑全景（東から）

図版 17　SK 539・546 土坑
1. SK 539 土坑南北土層断面（西から）
2. SK 546 土坑遺物出土状態（北から）
3. SK 546 土坑遺物出土状態（東から）

図版 18　SK 546 土坑
1. 遺物出土状態（北から）
2. 全景（東から）
3. 南北土層断面（東から）

図版 19　SX 6 道路状遺構
1. 全景（東から）
2. 構築時全景（東から）

図版 20　SX 6 道路状遺構
1. 硬質土内遺物出土状態（東から）
2. 南北土層断面（東から）
3. 東西土層断面（北から）

図版 21　SI 228 住居跡出土遺物

図版 22　SI 229 住居跡出土遺物

図版 23　SI 229 住居跡出土遺物

図版 24　SI 229・230 住居跡出土遺物

目　　次

図版 25　ＳＩ 231 住居跡出土遺物

図版 26　ＳＩ 231 住居跡出土遺物

図版 27　ＳＩ 231 住居跡出土遺物

図版 28　ＳＩ 232 住居跡出土遺物

図版 29　ＳＩ 232 住居跡出土遺物

図版 30　ＳＫ 538・539・546 土坑、Ｐ 29・197、遺構外出土遺物

図版 31　縄文時代遺物出土状態
1. 調査区東端部（西から）
2. 調査区中半部（西から）
3. 調査区西半部（東から）

図版 32　ＳＫ 558・560・561・562 土坑
1. ＳＫ 558 土坑、Ｐ 473 全景（南から）
2. ＳＫ 560 土坑全景（南から）
3. ＳＫ 561・562 土坑近景（東から）

図版 33　ＳＫ 561 土坑
1. 全景（東から）
2. 全景（南から）
3. 南北土層断面（西から）

図版 34　ＳＫ 562 土坑
1. 全景（南から）
2. 全景（東から）
3. 東西土層断面（南から）

図版 35　縄文土器・石器

図版 36　縄文石器

図版 37　先土器時代調査区
1. Ａ・Ｂ地区全景（調査終了時、北から）
2. Ｂ地区全景（調査終了時、北から）
3. Ｂ地区南壁土層断面（北から）

図版 38　先土器時代Ａ地区ユニット 1
1. 全景（東から）
2. 全景（南から）
3. 拡張区全景（東から）

図版 39　先土器時代Ａ地区礫群 1
1. 全景（東から）
2. 全景（南から）
3. Ａ地区西壁土層断面（東から、最上層がⅣ層）

図版 40　先土器時代石器・礫

Ⅰ　調査に至る経過

[redacted]氏他3名より昭和54年4月3日付国教文収第95号にて、国分寺市西元町一丁目2448番地に共同住宅を建設したい旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛届出がなされた。

隣接地（第3次調査＝リオン厚生会館建設地：既報告[1]、第51次調査＝KDD社員寮建設地：未報告）における調査結果よりみて住居跡をはじめとする遺構の存在が予想された上、縄文時代、先土器時代の調査の必要があることから、事前に発掘調査をする方向で協議を進めることとなった。

調査計画書（面積約1270㎡、期間約15ヶ月、経費約2500万）を作成し、同年5月28日に協議を実施したが、調査費が多額で負担にたえられないとのことであった。

同年12月18日付国教文収第610号にて、建築計画を約半分に縮少した上、再度届出があった。そこで再度調査計画を作成し、昭和55年1月15日、2月18日の二回に亘り協議した結果、ほぼ計画案で合意するに至った。以下にその概要を示す。

(1)調査対象　建物本体・浄下槽・ポンプ室・受水タンク・浸込槽・給排水ガス埋設位置並びに影響範囲各々周囲1.5mの範囲とする。面積591.27㎡。但、調査範囲外にひろがる遺構の内、住居跡・土坑などまとまりのあるものについては拡張して遺構全体を調査するものとするが、経費・期間とも契約内におさめる。

(2)時代　先土器・縄文・奈良・平安の各時代について行う。先土器については、浄下槽・浸透槽位置のみとする。

(3)期間　現地110日間（約7ヶ月）、室内148日間（約8.2ヶ月）

(4)経費　届出人の負担とするが、器材その他調査会より提供出来るものはこれを使用する。総額13,798,000円。4回に分割して支払うものとする。

(5)体制　調査員1名、調査補助員1～2名、作業員10名前後、整理作業員6名前後。

(6)その他　表土排土は届出人にて行う。埋め戻しは行わない。

かくして、昭和55年3月1日付にて、[redacted]氏と武蔵国分寺遺跡調査会との間で発掘調査委託契約が締結された。期間は、昭和55年3月1日より昭和56年6月30日迄（内現地を同年3月17日より同年10月17日迄）とした。

諸般の事情により現地調査開始日が4月1日となった為、昭和55年5月8日付で、現地調査期間を同年4月1日より10月31日迄と変更した。

さらに、整理場所や体制などのことから整理が遅延する見込となり、昭和56年6月26日付にて、契約の終期を昭和57年9月30日迄とした。

註(1) 滝口宏　1979　『武蔵国分寺遺跡調査会年報1974 武蔵国分寺跡』

武蔵国分寺遺跡調査会組織

（昭和55年3月当時）

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
〃	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
〃	塩谷信雄	国分寺市長
〃	興津精二	国分寺教育委員会教育長
〃	飯沼壽夫	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議々長
〃	佐藤敏也	国分寺文化財保護審議会委員
〃	松井新一	〃
〃	吉田　格	〃
〃	藤間恭助	〃
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	青木一美	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財企画調査担当主査
事務局長	進藤文夫	国分寺市教育委員会次長
事務局長補佐	清　祥一郎	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
〃	山下　実	国分寺市教育委員会文化財課長（昭和56年2月12日物故）
事務局員	安田　暉	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
調査団長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
調査副団長	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
調査員	西脇俊郎	東京都教育庁社会教育部文化課学芸員
〃	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
〃	福田信夫	〃
〃	上村昌男	〃
〃	渡辺克彦	
〃	藤村由香里	
〃	平田貴正	

武蔵国分寺遺跡調査会組織

（昭和57年9月現在）

会長	星野冤勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
〃	大島外治	国分寺市教育委員会委員長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
〃	本多良雄	国分寺市長
〃	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
〃	山本　耿	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議々長
〃	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
〃	松井新一	〃
〃	吉田　格	〃
〃	藤間恭助	〃
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	斉藤龍司	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財企画調査担当主査
事務局長	関口雄基臣	国分寺市教育委員会教育次長
事務局長補佐	江崎昭彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
〃	安田　畔	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	小林文治	〃　文化財課庶務係長兼文化財保護係長
〃	鈴木　晃	〃　文化財庶務係員
調査団長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
調査副団長	永峯光一	〃
〃	大川　清	国士館大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
調査員	西脇俊郎	東京都教育庁文化課学芸員
〃	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
〃	福田信夫	〃
〃	上村昌男	〃
〃	高橋和恵	
〃	樋口高重子	

第1図　遺跡の位置

第72次
第3次
第51次
調査位置
北方建物
講堂
東僧房
金堂
中門
塔
僧寺寺域推定線
国分僧寺
国分尼寺
金堂
尼寺寺域推定線
寺地南限推定線
国分尼寺
0
100
200
300m

第2図　調査地区の位置

II　調査地区の概観

1.　調査地区の位置・立地

調査地区は国分寺市西元町一丁目2448番地に所在する。都道145号より台下の真姿の池へ通じる小径を50ｍほど南へ行ったところになる。中軸線より北へ368.0～208.5ｍ、東へ208.5～264.0の武蔵野段丘上に立地する。

武蔵国分寺跡は国分寺市西元町一～四丁目付近一帯に所在し、僧寺金堂を中心として、東西2.0㎞、南北1.5㎞ほどの範囲で遺物が採集される。僧尼寺の主要建物は低位の立川段丘上にあるが、その一部や僧寺々域を画する溝跡は段丘上まで延びている。従い、遺跡はその中央やや北寄りを東西に蛇行する比高12ｍほどの段丘崖（国分寺崖線＝通称ハケ）を境に両段丘にまたがり立地する。

崖線下には随所に湧水地点が認められ、集合して野川の一部となっている。その崖線を中心として、先土器より縄文時代の遺跡が所在する。とりわけ西元町二丁目付近の多喜窪遺跡は、重文の中期勝坂式土器を出土した集落跡として著名である。また、野川の開析した恋ケ窪谷は遺跡の東および北へ奥深く延びるが、その北側台地上に、中期加曽利Ｅ式連弧文土器を多く出土する恋ケ窪遺跡がある。また、遺跡の南約2.7㎞ほどにある大国魂神社一帯は武蔵国府の推定地である。

調査地区は僧寺金堂心より直線距離で約480ｍ、塔跡よりほぼ北へ約500ｍ、僧寺々域を画する溝跡の北東隅コーナーより北へ約100ｍほどの位置にあたる。現地表面は、ほぼ緩やかに西より東へ傾斜しており、標高は77.00ｍほどである。南の崖線までは約200ｍ、東の野川による開析谷までは約250ｍである。

調査地区の東は小径を挟んでリオン株式会社、南はＫＤＤ社員寮、西は郵政省職員住宅、北は都道を挟んで国鉄中央鉄道学園があり、好環境の土地である。

周辺における調査では、第3次調査（リオン厚生会館建設地）、第51次調査（ＫＤＤ社員寮建設地）、第72次調査（鉄道学園幹線実習館建設地：既報告[1]）などがある。

東方の第3次調査区では、縄文時代の土坑1、歴史時代の住居跡7、土坑4などを検出した。南に隣接する第51次調査区では、先土器時代のユニット3、縄文時代（早・中期主体）の住居跡1、配石跡1、集石10、土坑17などの他、歴史時代の掘立柱建物跡4、柱列跡(？)1、住居跡4、道路状遺構1、土坑16などを検出した。第72次調査地区は、本地区より西へ約300ｍの位置で都道を挟んで反対側にある。調査の結果、縄文時代の土坑4、歴史時代の住居跡7、

土坑19、溝跡2、掘立柱建物跡1、炉跡2などが確認された。

その他ガス・水道・下水管などの埋設工事の立会い調査結果をあわせると、武蔵国分寺関連遺構の分布はほぼ現在の都道145号の北側付近を北限とし、その北へ行くに従い分布が疎になり、減少することが予想されている。

2.　層　　序

調査地区は武蔵野段丘上の平坦地にあり、ほぼ単純な層序を示す。以下にその基本層序を略記する。図は、調査区東壁ほぼ中央付近の断面である。(GD 87 区東壁)

Ⅰa 層　盛土。ロームその他の客土。調査区西端付近にみられる。10～20㎝。

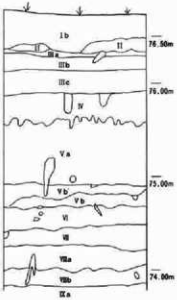
Ⅰb 層　表土。

Ⅱ 層　黒褐色土。粒子粗く、粘性に欠く。調査区全域において10～20㎝ほど堆積する。遺構内の堆積土に酷似する。

Ⅲa 層　黒褐色土。やや茶褐色味を帯びる。締まり、粘性あり。Ⅱ層の上部で、Ⅱ層に近い部分。Ⅱ層、Ⅲb層との境は漸移的。10㎝平均。調査区西・南半において顕著に認められる。縄文時代の遺物を出土する。

Ⅲb 層　暗茶褐色土。下部に行くに従い褐色味を帯びる。縄文時代の遺物を多く包含する。歴史時代遺構の大半は該層上面にて検出が容易となる。

Ⅲc 層　茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干出土する。縄文時代の遺構は本層上面にて検出がやや容易となる。



第3図　標準層序

Ⅳ 層　暗黄褐色ローム。ソフトローム。縄文時代遺構の大半は該層上面にて検出が容易となる。なお、調査による掘削深度は、先土器調査区を除き、全て該層上面までとした。

Ⅴa 層　黄褐色ローム。ハードローム。色調の相違によりⅤa、Ⅴb、Ⅴb′の3層に分けられる。

Ⅴb′層　黄褐色ローム。色調がⅤaとⅤbの中間。

Ⅴb 層　暗灰褐色ローム。色調がⅤb′とⅥの中間。

Ⅵ 層　暗褐色ローム。立川ローム第一黒色帯。

Ⅶ 層　黄褐色ローム。

Ⅶa 層　褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。

Ⅶb 層　暗褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。Ⅶa層よりさらに黒色味を増す。

Ⅸa 層　　黒褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。Ⅷb 層との境界線。より黒色味を増し、粒子細かく粘性あり。

Ⅸb 層　　暗灰褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。成分Ⅸa 層に同じ。Ⅸa 層より明るい。

Ⅹ　層　　黄褐色ローム。粒子極めて細かく、緻密で粘性あり。

Ⅱ層よりⅤ層において各々の上面における傾斜は、ほぼ現地形に近く、西からゆるやかに東へ下る（比高差約0.3～0.4ｍ）が、東半において、若干北東方向へも下っている。

註(1) 滝口宏　1980 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報 Ⅳ』

Ⅲ 発 掘 経 過

委託契約締結後、3月17日の現地着手へ向けて諸準備を進めた。発掘器材及び作業員については早速確保した上、届出人側の工事設計・施工業者と①表土排土（場外搬出）、②調査範囲の位置出し、③東側沿道掘削部分の山留め・保安柵設置、④現場事務所の設置などについて打ち合わせに入ったが、各々準備に手間どり、現場開始日を4月1日に延期することになった。

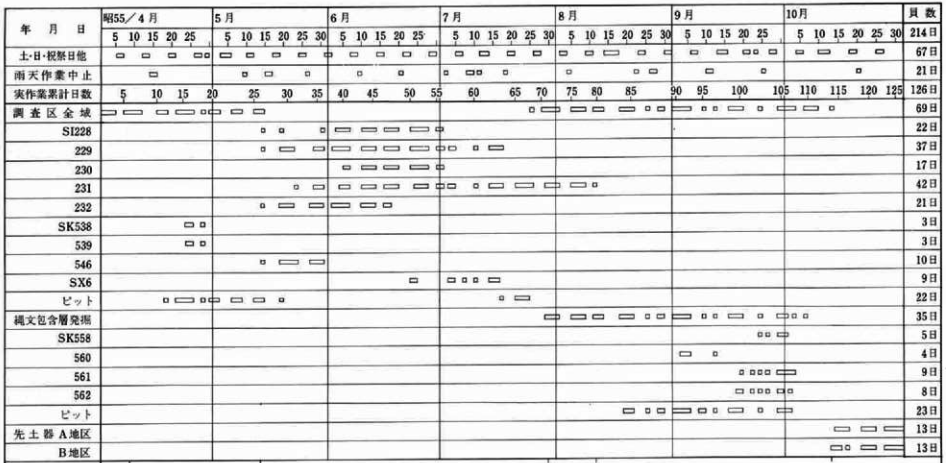
②及び④は現地着手前に届手人において行われた。①表土排土は、重機（ユンボ）を併用し、排土は場外へ搬出することとなった。（排土搬出に係る経費は委託費外）③は即ち、調査区東側の沿道延長約15ｍにおいて調査区内外の安全を確保するために山留めを行った上、保安柵を設置することになったもので、沿道掘削については市建設部管理課の許可を得、保安柵設置に伴う道路使用については警視庁小金井警察署の許可を得た他、同道路の一部が国際電信電話株式会社所有地（市に移管予定であった）であることから保安柵の設置について同社の承諾を得た。その他諸届出を済ませた上で、4月1日の現地着手に臨んだ。

4月1日・2日に亘って遺構面を確認し、同月3日より9日まで重機によりⅠ層とⅡ層中まで下げ、人力によってさらにⅢb層上面まで下げ遺構確認作業を併行して進めた。遺構確認終了後実測の為の杭打もを東側道路上のポイントを基準として行った。歴史時代の調査は、調査区の断面観察より始め、ピット、土坑、住居跡、道路状遺構の順で実施した。SI228、230住居跡については、各々西及び南へ拡張して全体を調査した。所要日数79日間、面積612.6㎡である。

歴史時代住居跡の調査と併行して、調査地区東側より縄文時代遺物包含層（Ⅲb、Ⅲc層）の発掘に着手した。遺物量は少なく、比較的スムースに遺構確認作業に入ることが出来た。遺構はピットと土坑4に限られた為、所要日数42日間にて調査を終了した。SK561土坑については南へ拡張して全体を調査した。面積612.6㎡。

先土器時代の調査は、調査区東側で、浄下槽埋設位置（A地区）と浸透槽埋設位置（B地区）の2ヶ所についてのみ実施した。共に、安全確保の為に深度約1ｍにつき50㎝ほど内側に調査範囲をせばめて行く階段状の発掘を行った。工事による掘削深度に合わせ、A地区でⅨa層上面まで、B地区でⅩ層上部迄にとどめた。A地区においてⅣ～Ⅴ層上部にかけてユニット1、礫群1が検出され、西へひろがるため、一部サブトレンチを入れてひろがりを確認した。所要日数は14日間。面積はA地区11.75㎡、B地区7.5㎡、合計19.25㎡である。

総所要日数126日間。面積612.6㎡。作業員延人数866人。各遺構の調査進行状況を次表にまとめた。なお、調査区北西隅部分（約6.5㎡）を建物位置変更に伴い昭和56年6月3日に立会い調査を実施し、遺構の無いことを確認した。（配置図では一点鎖線で示した。）


年 月 日
昭55／4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
員数
土・日・祝祭日他
雨天作業中止
実作業累計日数
調査区全域
SI228
229
230
231
232
SK538
539
546
SX6
ピット
縄文包含層発掘
SK558
560
561
562
ピット
先土器A地区
B地区
備考
重機による排土終了
調査開始
住居跡調査開始
（梅雨入り）
縄文調査開始
（梅雨明け）
住居跡調査終了
縄文調査終了
先土器調査開始
調査終了

第1表 調 査 工 程 表

Ⅳ 発 見 遺 構

本調査によって発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑3基、道路状遺構1条、ピット（小穴）136個で、調査区全面にわたっている。

SI228住居跡やSI232住居跡などが攪乱によって一部破壊されている外は、概して残存状況は良かった。即ち、Ⅰ層表土Ⅱ層黒褐色土がやや厚く、合わせて50㎝ほどであったことなどによるものと思われる。

遺構の大半は、検出が容易となるⅢb層上面で確認したが実際にはもう少し上層から掘り込まれているものと思われる。[1]

SI 228 住居跡（図面1、図版3～4）

僧寺中軸線の東220ｍ、北378ｍに位置し、ＳＸ６道路状遺構、ＳＫ546土坑に隣接する。南西隅を若干攪乱により破壊される。西半部は当初調査予定地外であったが、拡張して全体を調査した。

平面形は東西3.0ｍ、南北3.2ｍのほぼ方形で、北西及び南東隅コーナーはやや丸味を帯びる。東壁にカマド、南壁に入口部を設ける。住居の南北方位は僧寺中軸線より約19度東偏する。

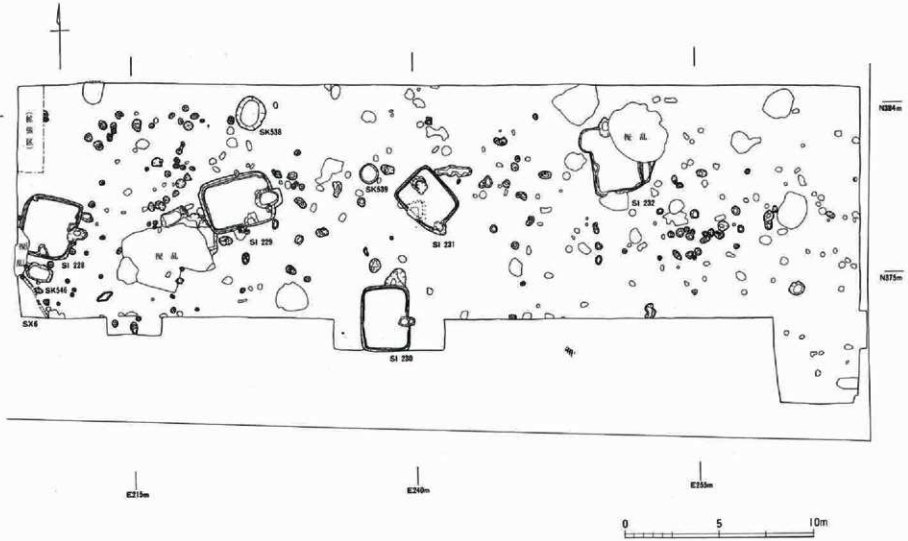
構築時には、Ⅲc層上部まで底面をほぼ水平に掘り込み、北壁際及び南壁際の巾約50㎝ほどの部分に2～3㎝厚の貼床をするのを除き、ほぼそのまま床面としている。壁高は、北壁で最大約20㎝である。

周溝はカマド脇から始まって全周する。但し、南東隅部分は、入口部構築後、その上面がやや硬く締まっていた。周溝の上面巾平均約20㎝、下面巾約5㎝、深さ約5㎝を測る。北東隅コーナーの周溝内に小ピット1個が検出された。

カマドは東壁ほぼ中央に設け東西110㎝、南北115㎝の規模で、残存状況悪く、粘土を主体にした両袖の基底部が若干残っていた。粘土はカマド前面の床面上にやや広範囲に散っていた。カマドの壁外への掘り込みは、平面形が「∩」字状、東西断面形が火成部付近が最も深い舟底形を呈し、東西60㎝、南北60㎝ほどである。火床部は壁よりやや外方に中心があり、東西35㎝、南北25㎝ほどで、地山のⅢc層をそのまま火床としている。中央は赤色焼土化しているが、さほど顕著ではない。

入口部は南壁ほぼ中央に硬質の黒褐色土を用いて構築される。東西巾60㎝、南北巾60㎝で、住居跡内部に向かって傾斜する。上面は極めて硬くなっていた。

床面は、カマド及び入口部付近にかけて堅固になっており、住居西半部は次第に軟弱になっ



第４図　遺構配置図（縮尺 1/200）

ていた。

構築時平面図の北西隅及び南西隅のピットは床面下に検出したものである。前者は、東西 60 ㎝、南北 50 ㎝、深さ 20 ㎝、後者は、東西 50 ㎝、南北 50 ㎝、深さ 20 ㎝でほぼ同じ規模、形状を有する。また、柱穴と思われるピットは確認されなかった。

堆積土は黒褐色土を主体にし、周溝内やカマド付近を除き、大きな相違はみられなかった。

遺物は全体にわたって出土しているが、接合資料はカマド付近に集中する。11－6、11－7 は完形の須恵器坏で、共にカマドの火床部上より出土した。

SI 229 住居跡（図面 2～4、図版 5～7）

僧寺中軸線の東 231 m、北 379 m に位置し、SI 228 住居跡と SI 231 住居跡の中間にある。

平面形は東西 3.8 m、南北 2.8 m の長方形で、東壁にカマド、南壁に入口部と思われる施設を設ける。住居の南北方位は僧寺中軸線より約 13 度西偏する。

構築時には V 層ハードロームまで底面をほぼ水平に掘り込み、中央部付近で 3～5 m ほど貼床をするのを除き、ほぼそのまま床面としている。壁高は西壁で最大 50 ㎝である。

周溝は、カマド部分を除き全周する。カマド脇から南壁硬質面までは、硬質面及び床面を除去した段階で検出された。上面巾約 15 ㎝、下面巾 5～10 ㎝、深さ 5 ㎝前後で、全体にしっかりしている。

カマドは東壁のやや南寄りに設ける。東西、南北とも 140 ㎝と比較的大規模である。残存状況悪く、袖部から奥壁にかけてのロームや粘土粒を少量含む黒褐色土・茶褐色土からなる構築土の基底部が残存していたにすぎない。カマドより多くの瓦片が出土しているが、構築材として再使用されたものと思われる。壁外への掘り込みは、2 段になっており、各々平面形を異にする。即ち、火床面においては、東西 45 ㎝、南北 80 ㎝の平面「∩」字形であるが、火床面より 45 ㎝ほど上の側壁から奥壁にかけてさらにひとまわり外へ掘り込んでいる。規模は、壁外へ東西 60 ㎝、南北 80～95 ㎝で、ほぼ方形を呈す。大規模な天井部を支える為の構造と思われる。火床部はほぼ壁下にあり、東西 45 ㎝、南北 50 ㎝の規模で、中央部はやや厚く赤色焼土化している。構築時のハードローム面をそのまま火床としている。南北断面では丸底を呈し、東西断面ではほぼ平坦である。両側壁の一部も火熱を受けていた。

カマドの火床部上に、東西・南北とも 60 ㎝、厚み 10 ㎝ほどの焼土塊が浮いた状態で出土した。また、カマド前面には、東西 35 ㎝、南北 50 ㎝の範囲で上面硬質の黒褐色土が検出されたが、付近の住居内堆積土に近似しており、ブロック状のものと考えられる。

南壁下、中央やや東寄りにも上面硬く側面もやや硬い黒褐色土が検出された。東西 70 ㎝、南北 60 ㎝で、床面及び周溝の上にあり、壁との間は 3～4 ㎝隙がある。床面より高さ 5 ㎝前後

あり、上面はほぼ平坦である。

南壁中央やや西寄りの壁から壁外にかけてピット群が検出された。まとまりがあり、全体として壁外へ「∩」字状に張り出す。その規模は東西70㎝、南北60㎝ほどである。周溝内にかかるほぼ中央に位置するピットが最も深く、床面より30㎝ほどである。堆積土は黒褐色土及び暗黄褐色土で、黒褐色土は住居内堆積土に近似し、若干黒色味に欠く点が相違するのみである。

上述の硬質面とピット群とは、状況よりみて関連があり、入口部状の施設の一部を成しているのではないかと考えられる。

床面は西壁及び北壁下の一部を除き堅固になっていた。

床面上より検出されたピットが8個、床面下よりは5個あったが、柱穴と思われるものはない。

住居跡堆積土は、カマド及び周溝部分を除き、上下大きく二つに分けられた。即ち、1・2層は細かいローム粒を多く含み、黒色味にやや欠き、下層の3・4・7層はローム粒少なく、黒色味強く、締まりより強くなる。

遺物の出土状態、接合状況をみると、覆土の上下層で特に区別はみられなかった。遺物ははぼ全体にわたり（ややカマド付近が多いが）出土している。接合資料も同様に全体にわたっている。

SI 230 住居跡（図面4～5、図版8～9）

僧寺中軸線の東239ｍ、北373ｍに位置し、SI 231住居跡の南にある。当初南半部は調査予定地外であったが、拡張して全体を調査した。

平面形は東西2.6ｍ、南北3.5ｍの南北に長い長方形である。長辺である東壁にカマドを有する東壁はカマド境にして段が付く。住居の南北方位は僧寺中軸線より約0.5度西偏する。

構築時にはⅣ層もしくはⅤ層中まで底面をほぼ水平に掘り込み（周溝部分は巾広く、若干掘り下げる）、全体に2～4㎝貼床をして床面としている。壁高は西壁で最大40㎝である。

周溝はカマド部分並びに北西隅の一部を除き全周する。上面巾10～15㎝、下面巾5㎝前後、深さは1～5㎝と深い、不明瞭でしっかりしていない。

カマドは東壁やや南寄りに設ける。東西90㎝、南北70㎝と規模が小さい。残存状況極めて悪く、その上部の堆積土中においても10層に焼土粒を若干含む程度で、構築材として使用された瓦片も、15－8の字瓦片2点のみにすぎない。壁外への掘り込みは東西最大35㎝、南北最大45㎝で、平面は「∩」字形を呈する。底面は床面と同レベルで、奥壁まではぼ水平である。南北断面は「∪」字状を示す。南側壁下には袖の基底部がロームを掘り残して作出されていた。

火床部は壁よりやや内側にあり、やや凹む。5㎝前後、黒褐色土と暗褐色土を埋めて火床面としている。その中央は若干焼け赤色焼土化している。

床面はカマド前面より西壁に向って細長い範囲で竪固になっていたにすぎなかった。

住居に伴うピットなどの落ち込みは検出されなかった。

住居跡堆積土は、ローム粒少なく締まり、粘性弱い1層黒褐色土と、締まり、粘性やや強く、ローム粒やロームブロックを含むその他の層に大別される。

遺物は少なく、ほぼ全体に亘って出土している。接合資料も少なく、特に集中する箇所もない。

SI 231 住居跡（図面5～7、図版10～13）

僧寺中軸線の東241 m、北379 mに位置し、SI 229住居跡とSI 232住居跡の中間にある。

住居の長軸方位が僧寺中軸線より約41.5度西偏する。本報告では、長軸方向を南北方向として記述する。平面形は北壁東西2.4 m、南壁東西2.2 m、南北3.0 mでほぼ長方形を呈する。

南壁西隅（南カマドとする）と北壁下住居内（北カマドとする）の2ケ所にカマドを設ける。前者を廃棄して後者を新設したものである。西壁に入口部を有する。

構築時には、北カマド前面の住居東半部を除き、床面よりさらに10～15㎝ほど掘り込む。数箇所ではさらに10㎝ほど掘り下げピット状の落ち込みとなる。ロームやロームブロックを多く含む暗黄褐色土を主体として埋め土を行う。掘り込みはⅣ層もしくはⅤ層中に及ぶ。住居東半部ではそのまま床面としている。さらに、住居西半部においては、黒色土を主体にした貼床土が検出され、2次床を形成する。即ち住居東半部においては1次・2次とも共通の床面である。2次床下の1次床面は東半部に比べ5㎝前後低く、これを埋める様に2次貼床が残されており、2次床面はほぼ水平である。住居の壁高は西壁で最大約40㎝である。

周溝は南カマド前面を除き全周する。上面巾10～15㎝、下面巾5㎝前後、深さは10～15㎝を測る。全体にしっかりしている。

南カマドを南壁西隅に設ける。主軸方向は、住居の南北方向に平行せず、若干住居中央寄りに傾く。東西85㎝、南北85㎝の規模で、残存状況やや良く、両袖部と天井部の基底部や陥没した天井部構築土が認められた。壁外への掘り込みは東西80㎝、南北50㎝の規模で、平面舟先形に掘り込んだ上、天井部の両側基底部をさらに外方に張り出して若干掘り下げる。為に結果として、全体の平面形はやや丸味を持つ三角形となる。奥壁はほぼ直線的に立ち上がる。両袖部及び天井部基底部は粘土を主体に黒色土などを用いて構築する。南側袖内には女瓦片を立て、芯材としていた。火床面は、壁下やや住居跡内に中心があり、東西30㎝、南北25㎝ほどで、若干凹む程度でほぼ水平である。火床面は火熱を受けているが赤色化していない。側壁の一部

が赤色焼土化及び火熱を受けており、奥壁の一部も火熱を受けていた。

北カマドは、北壁やや東寄りの壁下住居内に設ける。北側に周溝が通る。残存状況悪く、基部のみ残り、覆土上層発掘時には検出出来なかった。その規模は東西75㎝、南北100㎝を測る。床面を5㎝前後掘り下げ、大きな河原石や瓦片を芯材とし、ローム多い暗黄褐色土を主体に、平面を馬蹄形に構築する。残存高は奥壁で最大20㎝弱で、両袖部は5㎝前後であった。その中央部に火床面を有する。東西45㎝、南北35㎝で、その中央径15㎝の範囲が赤色焼土化していたが顕著ではなかった。火床部が最も深く、床面より10㎝ほど掘り込む。

入口部は西壁のほぼ中央に設ける。発掘時にミスで一部掘り過ぎた為、全体形は把握出来なかった。現存東西巾55㎝、南北50㎝。中央部上面が若干壁外へ張り出す。この部分が最も硬質になっている。また、この部分より住居中央に向ってなだらかなスロープを成している。構築土は黒褐色土を主体としており、2次床上に構築する。住居中央近くの構築土内に大きな河原石を置く。

1次及び2次の床面は共に壁よりを除き全体に堅固であり、相違点といえば、西半部において2次床がより北側まで堅固になっていることである。

両カマドと床面との関係は明確にし得ないが、床の堅固な範囲や周辺の堆積土などの状況よりみて、1次床は南カマドに、2次床は北カマドに各々伴うものと思われる。

北西隅のピットは2次床面より掘り込まれており、東西40㎝、南北50㎝の不整円形で、深さ約20㎝である。

住居堆積土は、カマド付近と周溝部を除き上下2層に大別される。即ち、ローム粒少量含む黒褐色土（1・2層）の上層とローム粒やや多く、黒色味増し、粘性強くなる下層黒褐色土（3層以下）である。

遺物は北カマド付近を中心としてほぼ全体に出土する。住居南東部が少ない。上下においてもほぼ全体に出土しているが、接合資料は下層のものが圧倒的に多く、堆積土の相違にほぼ一致しているものと思われる。なお、北カマドの東脇の床面近くにおいて、16－3の土師器甕や16－8須恵器坏、16－9須恵器坏（完形）などが集中して出土している。

SI 232 住居跡（図面7～8、図版14～15）

僧寺中軸線の東251ｍ、北381ｍに位置する。攪乱により北東部を大きく破壊されカマドの一部も欠されている。南東部の攪乱によっても一部破壊される。

平面形は住居主体部において、東西2.7ｍ、南北最大3.6ｍのほぼ長方形を呈する。北西部に張り出し部を有する。南東部には拡張部もしくは張り出し部と思われる部分がある。北壁にカマドを設ける。住居の南北方位は僧寺中軸線より約8度西偏する。

構築時においては、Ⅳ層ソフトローム上部までほぼ水平に掘り込み、部分的にロームブロックを含む黒褐色土などをもって貼床し1次床としている。さらに2～10cm前後、黒褐色土を主体にした貼床を行い2次床としている。壁高は1次床時において西壁で最大30cmである。

周溝はカマド部分を除き全周するものと思われる。上面巾20cm、下面巾5～10cm、深さ5cm前後であるが、南東部分の周溝は不明瞭である。

住居北西部に張り出し部を有する。やや隅丸の長方形で、東西60cm、南北は東側で130cm、西側で80cm前後を測る。1次貼床土をもって床面を構築し、2次床の堅固な範囲がカマド付近より周溝を覆って張り出し部の中ほどまで延びていた。中央部に東西30cm、南北40cmの平面長方形を呈し、深さ5cm前後と浅いピットが検出された。

住居南東部においても張り出し部が認められた。北側を攪乱により破壊されている。東西巾約40cm、南北現存約100cmで、1次床面より10cmほど浅く掘り込んだ上、この段差を2次貼床土が覆い、床面が延びる。壁高15cmである。住居北東隅付近にあたる攪乱内に、張り出し部東壁の延長と思われる痕跡があり、これを採用するならば、張り出し部という性格でなく、東側への拡張ということになるが、その可能性を指摘し得るにすぎない。

なお、この張り出し部の東側に連続してさらに浅い落ち込みが認められたが、堆積土よりみて住居に関連あるものと思われるがその性格は不明である。現存で東西40cm、南北30cmを測り底面は住居内へ向ってやや下る。

カマドを北壁のやや西寄りに設ける。東側を攪乱により破壊される。東西80cm以上、南北100cmの規模で、残存状態は悪い。壁外への掘り込みは現存東西55cm、南北50cmで、舟先形を呈する。西側の北壁に、立てかける様に女瓦片2点が被えられていた。袖部の芯材と思われる。また側壁から火床部上にかけて瓦片16点（男瓦1、女瓦15）が出土したが、これらは全て、天井部や側壁などの芯材に使用されたものであろう。瓦片と共に黒褐色土を主体にした構築土が崩壊していた。火床面は東西現存35cm、南北50cmとカマドの規模に比して広く、その中央径25cmほどは赤色焼土化していた。火床面は地山のローム層そのままであり、それが2cm前後の厚みで赤色焼土化し、さらに周囲7cm前後は火熱の影響を受け、ややボロボロになっていた。

1次床面はほぼ水平で、カマド付近の住居北西部分が堅固になっていた。2次床面は、南東隅張り出し部から住居南半にかけてがやや高くカマド方向へ下る。堅固な範囲は1次にほぼ重なり、さらに北西隅張り出し部及び西壁際中央部へ延びていた。

住居堆積土は、床面上に堆積する厚さ5cm前後の締まり粘性ある黒褐色土（6・16層など）と、上層の粘性弱い黒褐色土（2・5層など）に大別される。

遺物はカマド付近と住居中央部にほぼ集中する。カマドにおいては、芯材として用いられた

瓦片が大部分を占めている。住居中央部においては、上層から下層にかけて分布するも、接合資料は上層のものが多い。

SK 538 土坑（図面9、図版16）

僧寺中軸線の東231ｍ、北384ｍに位置し、SI 229住居跡の北にあたる。

上面巾東西1.5ｍ、南北1.7ｍ、底面巾東西0.8ｍ、南北1.0ｍで南北に長い楕円形を呈する。断面は舟底形を示し、深さ最大20㎝を測る。底面はⅢc層上部に及ぶ。

堆積土は上層（1層黒褐色土）とより締まり粘性強い下層（2層黒褐色土）である。

遺物は全体的に、やや下層付近に集中して出土している。

SK 539 土坑（図面9、図版16～17）

僧寺中軸線の東238ｍ、北381ｍに位置し、SI 231住居跡の北壁に隣接する。

上面径1.0ｍ、底面径0.8ｍの円形を呈する。底面はほぼ平坦である。深さ15㎝。底面はⅢc層上部に及ぶ。

堆積土は上層（1層黒褐色土）とローム粒やや多い下層（2層黒褐色土）で、SK538土坑に同じく少量の焼土粒を含む。

遺物はやや北側の上層付近に多く出土した。

SK 546 土坑（図面9、図版17～18）

僧寺中軸線の東220ｍ、北376ｍに位置し、SX 6道路状遺構の東、SI 228住居跡の南にあたる。

上面巾東西1.4ｍ、南北0.9ｍ、底面巾東西1.1ｍ、南北0.6ｍで隅丸長方形を呈する。南北方位は僧寺中軸線より約19度東偏する。深さは最大55㎝を測る。底面はⅤ層ハードローム上部まで掘り込み、ほぼ平坦である。

堆積土は、上層の焼土粒を含む黒褐色土（1～8層）と下層の締まり粘性ある黒色土もしくは暗黄褐色土（ローム＋黒色土）（9～11層）に大別される。上層の中位にある4層中には多量の焼土粒を含み暗赤褐色を呈する。また4層中には炭化物を若干含む。全体に住居跡堆積土によく似る。

遺物は土師器坏・甕をはじめ須恵器坏、瓦などが、破片のものから完形品のものまで多量に出土する。平面的には全体に亘っているが、垂直分布をみると、まとまりがみられる。即ち、上層下部の8層と下層上部の9層には極端に少なく、底面近くの11層と上部の1～7層に多い。接合資料は上層のものに多い。23－6の土師器甕は同一個体片が上下に出土している。

SX 6 道路状遺構（図面10、図版19～20）

調査区の南西隅に検出された。僧寺中軸線の東219ｍ、北373～376ｍに位置する。第51次調査地区にて検出されたSX6道路状遺構の延長で、さらに北へ延びるものと思われる。

第51次調査では、僧寺中軸線の東234.5ｍ、北324ｍの位置から東222.5ｍ、北360.5ｍの位置まで延長約39ｍ検出され、さらに南北とも調査地区外へ延びていた。南北方位は僧寺中軸線より約18度西偏する。ほぼ直線的に南北へ延びる遺構である。硬質面の巾約1.2～2.0ｍで、中央部は住居の床面と同様に硬く、周辺はやや固く締まる程度である。検出面より最大15㎝ほど掘り込み（中央が最も深い）、硬質の黒褐色土を埋め込む。上面はほぼ平坦か、やや中央が凹む。東西両側と埋め土下に多数のピットが集中しており、何らかの関連があるものと思われる。以上により道路状遺構としている。

さて本調査区では、全巾は検出されず、東半部が調査区をかすめた形となる。東西1.2ｍ、南北2.7ｍで、Ⅱ層を30㎝前後掘り込み（中央部が最も深い）、硬質の黒褐色土を主に埋め込む。上面は極めて堅固である。巾1.0ｍ以上で、上面はゆるやかに凹む。周辺はやや固く締まる程度である。硬質面上には、黒色味ある黒褐色土が覆土する。また、Ⅱ層黒褐色土がその上に堆積する。但し、他でみられるⅡ層と異なり、ややⅠ層が混じる（この周辺が現代の転圧を受けており、その為か）。調査区南西隅部分においては、掘り込み面のⅢc層が極めて堅固になっている。その範囲は東西30㎝以上の巾で、本遺構の方向に合致して南北へ延びており（現存80㎝を測る）、遺構の中心付近にあたる。第51次調査では検出されていない。本遺構周辺にはピットが集中して検出されることもなく、この点第51次調査区と様相が異なる。

ピット（第4図）

調査地の全体において大小多数のピット（小穴）が検出された。SI 228住居跡とSI 229住居跡の周辺及びSI 232住居跡の周辺にやや多い。その規模は、径20～50㎝前後、深さ10～60㎝前後である。

これらのピットを主に堆積土の相違により次の通り分類した。

Ⅰa ローム粒少量含む黒褐色土の単一層で、壁及び底面と明瞭に区別できる。黒色味、締まりあり。おおむね深い。

Ⅰb Ⅰaより黒色味、締まりをやや欠く黒褐色土の単一層。その他はⅠaに同じ。

Ⅱ 上層（Ⅰaより締まり、粘性ある黒褐色土）と下層（茶褐色土もしくはローム含む暗茶褐色土・暗黄褐色土）より成る。おおむね浅く、底面が広い。

Ⅲa 粒子粗く、締まり弱い、ぼそぼその黒褐色土でおおむねやや深い。

Ⅲb ローム粒、ロームブロックを含む黒褐色土。暗黄褐色土。締まり弱くぼそぼそでおおむね浅い。

これらの内、Ⅲa、Ⅲbは木の根等による攪乱と思われ、Ⅰa、Ⅰb、Ⅱとは明瞭に識別出来る。ⅠaとⅠbの中間的なもの、あるいはⅠa、ⅠbとⅡの中間的なものもある。Ⅱの内、下層の部分が少ないものはⅠa、Ⅰbと区別し難い。

確認され登録したピットの総数は296であり、その内訳は、Ⅰa 41、Ⅰb 42、Ⅱ53、Ⅲa 40、Ⅲb 48、その他攪乱等72である。Ⅰa、Ⅰb、Ⅱの合計は136、Ⅲa、Ⅲb、その他の合計は160となる。第4図においては前者は底面を図化し、後者は図化しないことで示した。分布においてタイプ毎のまとまりや相違はない。南に隣接する第51次調査区では、SX6道路状遺構とSD57溝跡の周辺に集中し検出されたが、本地区では、その延長上のSX6道路状遺構の周辺に集中する傾向はみられなかった。また、これらピットの内、掘立柱建物や柵列の柱穴となるものも検出されていない。

註(1) 全てⅢa層上面より掘り込まれていることは確実である。問題はⅡ層との関係で、遺構内堆積土とⅡ層が酷似しているため、その関係は極めて識別しにくい。一部ピットなどではⅡ層上面より掘り込まれているものと不明瞭ながらも把めるものもある。また、S1228、230住居跡においては共にその上にⅡ層が堆積しているものと観察されたが、遺構の無い場所のⅡ層と異なって、若干黒色味あり（住居跡覆土はさらに黒色味増す）、同じⅡ層であるのか判断が難かしい。また、Ⅱ層については、既に本調査会年報Ⅰ（1974）において新期テフラの可能性が指摘されているが（西脇1979）、これらとも合わせ、今後の検討課題である。

西脇俊郎　1979　「Ⅲ、3、層序」『武蔵国分寺遺跡調査会年報 1974　武蔵国分寺跡』

V 出 土 遺 物

本調査により出土した歴史時代の遺物には、土器・瓦・石製品・土製品・金属製品などがある。総量はコンテナ40箱ほどであり、その多くは住居跡・土坑などから出土している。

遺物の記述は全て一覧表によったが、表記の方法について以下に補足説明をする。

(1) 各遺物共通

イ．遺物番号は、図面番号と対照にした。例えば「15－1」とあれば「図面15－1」を示す。

ロ．出土位置の内、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「カマド内」はカマド構築土内出土。「床直」は床面直上。

ハ．計測値　記号なしは完数値、《　》は復原数値、（　）は残存数値、――は計測不可を表わす。単位は㎝。

(2) 土器類

イ．種別　土：土師器、須：須恵器、灰：灰釉陶器、緑釉陶器

ただし、須恵器坏・椀は還元焔焼成のものを須A、酸化焔焼成のものを須Bとした。

ロ．施釉陶器については、斎藤孝正氏（名古屋大学）、守屋雅史氏（同）に実見していただき、その所見を備考欄の〔　　〕内に記した。

(3) 瓦

鎧瓦（本報告にないので省略）

宇瓦

イ．内区文様　G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：偏行唐草文、H：ヘラ書き文、T：竹管文、K：格子文（ヘラ書きは除く）、J：縄文、O：その他

ロ．外区、脇区文様　a：素文、b：珠文、c：長円珠文、d：圏線文、e：鋸歯文、f：凸線文、g：その他

ハ．顎の形態　以下の組み合わせにより記入

E　直線顎

a　凸面を整形するもの

b　瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c　不整形のもの

F　段顎

F_1　瓦当凸面と凹面が平行するもの

F_2 F_1 以外のもの

a 瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの

b 瓦当凸面のみ整形するもの

c 瓦当裏面のみ整形するもの

d 不整形のもの

G 曲線顎

G_1 瓦当凸面が内彎しながら女瓦凸面に移行するもの

G_2 瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

G_3 いわゆる瞻顎形式

a 瓦当凸面を整形するもの

b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c 不整形のもの

男瓦・女瓦

イ．布目本数　3㎝四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす。

ロ．縄叩き目本数　3㎝四方内での縄数を表わす。

ハ．縄の捻り　L：縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの

R：縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの

ニ．粘土板合せ目　佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる。

ホ．布合せ目　粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる。

ヘ．叩き締めの円弧　A：叩き締めの円弧が一方向のもの

B：叩き締めの円弧が「ハ」字状をなすもの

ＳＩ 228 住居跡　　土 器 一 覧

図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
11－1	土－杯	覆土上層	《11.7》 (3.1)	体部から口縁にかけ内彎し、口唇は細くすぼまる。体部器壁は厚い。	口縁部外面は横ナデ。体部外面は強い指頭調整。体部下端は横ヘラ削り。内面は全体にヘラミガキ。	1/5残存。白色砂粒と赤色スコリア状物質含む。
11－2 図版21	土－塊	覆土	《15.4》 6.1 7.3 1.1	底部から口縁にかけて，内彎し、立ち上がる。外に張り出した先端の丸い高台を有する。	外側面は横ナデ。体部下端は指ナデがなされる。高台部分は丁寧な横ナデ。内面は口縁から体部にかけて横、体／部から底部にかけて斜めのヘラミガキ。	1/3残存。内面黒色処理。ＳＩ230と接合。
11－3 図版21	土－塊	覆土	―― (2.9) 8.4 1.1	やや高く外へ強くはり出す高台を有する。	高台部は回転によりナデられている。底部（回転）糸切り後、付け高台。	1/6残存。内面黒色処理（二次的火熱を受け、とんでいる部分が広い）。
11－4	土	覆土	―― 3.1 《12.7》	器壁が均一に厚い。口縁部でやや内彎。	内外面下半は指頭による調整。上半はヘラ削り（横）外面台端より内面にかけて横ナデ。	1/8残存。器形不明。台部と思われる。
11－5	土－甕	覆土、カマド	《23.2》 (28.5) 《8.7》	口縁は「く」の字状に外反する。胴部は張りが弱く、最大径は胴中部にあり口径とは同じである。	頸部から底部にかけて斜め方向のヘラ削り、口縁は横ナデ。内面も口縁部は横ナデだが胴部から底部にかけては工具／ナデによる斜め方向のナデ。	口縁1/4、体部1/4残存。接合せず。
11－6 図版21	土師質－坏	カマド	11.3 4.0 5.4	台状の底部から、体部下半にかけて内彎し、体部上半から口縁にかけて直線的に立ち上がる。口唇は外反する。底／部は厚く体部との境が鋭角。	右回転糸切り。内外面はロクロ調整。	完形。口縁内外面に巾広くタール状物質付着。灯火器として使用。赤色スコリア状物質含む。
11－7 図版21	須Ｂ－坏	カマド	12.6 3.8 5.0	底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚する。上げ底。	右回転糸切り。内外面ロクロ調整。	完形。半還元。赤褐色～黒灰色。赤色スコリア状物質含む。
11－8 図版21	土師質－坏	カマド 袖内、床直	《11.5》 5.2 5.3	底部から口縁にかけては径直線的に立ち上がる。体部中央にロクロ目の屈曲が著しい。	内外面ロクロ調整。底部回転糸切り。	2/3残存。器表面が斑状に剥落する。赤色スコリア状物質含む。赤褐色。
11－9 図版21	土師質－坏	覆土	12.0 4.6 5.4	底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。体部でロクロ目の屈曲がやや顕著。底部に／向かって器厚増す。底部厚／く、体部との境がやや鋭角をなす。	ロクロ調整。底部回転糸切り。	1/3残存。器表面が斑状に剥落する。赤色スコリア状物質含む。赤褐色。
11－10 図版21	須Ｂ－塊	床直、カマド	13.9 5.7 6.5 0.5	底部から口縁にかけては径直線的に立ち上がる。断面が長方形の高台を有する。歪みがあり安定性に欠ける。	内外面ロクロ調整。高台部及び接合部やや丁寧にナデ。	ほぼ完形。土師質？
11－11	灰－塊	覆土	《16.2》 (3.4)	体部は内彎し、口唇部で若干外反する。	内外面ロクロ調整。体部上半内外面にかけて施釉（つけ掛け）。	1/8残存。素地は暗灰色、釉は灰緑色。
11－12 図版21	灰－塊	覆土	―― (2.2) 《6.8》 0.5	やや張り出した感じの高台が付く。	高台は丁寧にナデられている。内面底部に釉がわずかに散っている。	1/8残存。〔東濃、大原２？〕
11－13	緑－塊	覆土	《15.0》 (4.3) ――	体部は丸味を持ち、口縁はやや外反し、内面に弱い稜線がみられる。	素地は内外面ロクロ調整。器面全体に緑釉を施す。	1/8残存。口縁片と体部片接合しない。復原実測。〔尾北窯〕

ＳＩ 228 住居跡　　男 瓦 一 覧

図版	出土位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴							備考
			凹面			凸面			端面	
			素材	布目	特徴	叩き	特徴		特徴	
12－1 図版21	覆土	—— (15.5) (24.7) 1.27	粘土積紐	24×28	左側端縁へラ削り。広端へラ削り。		縄目叩き後、板状工具（左）回転ナデ。広端、左側端へラ削り。		広端、左側端へラ削り。	広端小さく隅切り。 凹面に朱書き（判読不明）。

ＳＩ228 住居跡　　鉄製品一覧

図版	種別	出土位置	寸法	備考
12－2 図版21	鉄滓	覆土	長さ 3.0 幅 1.8 厚み 1.5	重量7.5ｇ。ほぼ米粒形を呈する。
12－3 図版21	鉄滓？	覆土	長さ 5.0 幅 2.8 厚み 1.9	重量45ｇ。青色味を帯び、光沢を有する部分あり。

ＳＩ229 住居跡　　土器一覧

図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
12－4 図版22	土一甕	カマド、 覆土	《20.0》 (6.1)	口縁は肥厚しており「く」字状に外反する。最大径は胴部にあるが欠損のため不明。	口縁から頸部にかけて内外面横ナデ。胴部外面は、横方向のへラ削り。胴部内面は横のへラナデ。	口縁片1/4残存。
12－5 図版22	須Ａ一坏	覆土	13.5 3.65 6.8	やや外に張り出した底部から、体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。やや上げ底。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。口縁部横ナデ。	完形。内面口縁端に、スス状付着物が若干みられる。（灯火器として使用と思われる）。
12－6 図版22	須Ａ一坏	覆土	《14.3》 5.1 5.5	底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反、肥厚する。歪みが顕著。上げ底。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。口縁部横ナデ。	3/5残存。 暗赤褐色。焼成不良。 ＳＩ232覆土と接合。
12－7 図版22	須Ａ一坏	カマド	《12.6》 3.9 《5.5》	台状の底部から体部にかけてやや内湾し、口縁部は外反。ロクロ目による器面の胴曲が顕著。	内外面ロクロ調整。回転糸切り。	1/5残存。
12－8 図版22	須Ａ一坏	カマド	《13.7》 4.8 5.15	やや台状の底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反肥厚する。上げ底。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	2/5残存。 砂粒を多く含む。 底部外面に撚り紐（？）圧痕。
12－9 図版22	須Ａ一坏	覆土	《13.0》 (4.7) 5.4	やや台状の底部から体部にかけて内湾し、口縁部で外反肥厚する。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	2/3残存。 口縁片と体部片接合せず。 復原実測。
12－10 図版22	須Ｂ一坏	カマド	《11.9》 4.7 《5.5》	底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。口唇部でやや外反する。	内外面ロクロ調整。底部回転糸切り。	1/3残存。 赤褐色～暗褐色。焼成不良。赤色スコリア状物質を少し含む。
12－11	須Ｂ一坏	カマド、 覆土	《15.6》 (3.8)	体部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。	厚みが一定ではなく凹凸が見られる。	1/5残存。底部欠損。 褐色。焼成不良。

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
12－12 図版22	須A－坏	覆土、 カマド	14.9 5.8 6.2	大形の坏。底部から体部にかけて内彎し、口縁部は外反する。口縁部の歪みが著しい。	内外面ヨコナデ調整。底部右回転糸切り。口縁下部に輪積みもしくは巻き上げ痕。	3/4残存。 胎土緻密。暗赤色スコリア状物質含む。

S I 229 住居跡　　男瓦一覧

図面 図版	出土 位置	法端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴							備考
			凹面			凸面		端面		
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
13－1 図版22	覆土下層	—— —— (13.6) 1.2	粘土横紐	35×38	側端ヘラ削り。	縄目	縄目叩き後横方向ナデ。	左側端ヘラ削り。		S I 232覆土出土片と接合。凹面に朱書き。

S I 229 住居跡　　女瓦一覧

図面 図版	出土 位置	法端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴							備考
			凹面			凸面		端面		
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
13－2 図版22	カマド	(8.3) (11.5) (26.0) 1.65		18×15		縄目L 8本	側端に対し、やや強い弧を描く叩き。	残存3端面ナデ。		赤褐色を呈す。酸化焼成。赤色スコリア状物質含む。
13－3 図版23	カマド	(22.6) (26.2) (38.75) 2.3		19×19	両側端、広、狭端をヘラ削り。	格子目	狭端右端をほぼ中心とする放射状の叩き。	全端面ヘラ削り。		青灰色。
14－1 図版23	貼床土内	24.0 (26.4) 39.1 2.4	粘土板	18×17	両側端、広、狭端をヘラ削り。	縄目L 10本	側端縁へラ削り、右側端縁は幅広い。	全端面ヘラ削り。		凸面広端に棒状圧痕2条（3条か）赤色スコリア状物質含む。

S I 229 住居跡　　石製品一覧

図面 図版	種別	出土 位置	寸法	備考
14－2 図版24	砥石	覆土下層	長さ　(8.6) 幅　2.3～5.1 厚み 1.5～2.4	全面磨滅し、上下両端を欠く、石質凝灰岩？ 重量 97.5 g。

S I 229 住居跡　　金属製品一覧

図面 図版	種別	出土 位置	寸法	備考
14－3 図版24	不明鉄製品	覆土下層	長さ　(12.3) 幅　0.7 ねじれ部幅 0.75 厚み　0.4	中央部にねじり、図上部断面方形で尖り、図下部は断面長方形で先端尖る。図下先端部若干欠損。 用途不明。
14－4 図版24	鉄製刀子	覆土上層	長さ　(6.8) (茎部 5.0 完存) (刃部 1.8 現存)	刃部先細形（砥ぎ減り）。銹化著しい。茎部に木質僅かに残存。 幅　(刃部)　最大 0.8　(茎部) 最大 0.8 厚み (峰部)　最大 0.2　〃　最大 0.3
14－5 図版24	不明金属製品	覆土上層	現存高　4.3 幅　3.6 奥行き　2.1	不明金属製品。内外面にスス状付着物がみられる。緑青が部分的にみられる。 重量約 20 g。

ＳＩ 230 住居跡　　土 器 一 覧

図版	種別	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
15－1 図版24	須Ｂ一坏	床直、覆土	13.6 4.5 4.7	底部から口縁にかけてほぼ直線的に立ち上り、口縁部は外反、やや肥厚する。内面底部見込み部分凹状。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	3/4 残存。 大小の砂粒子若干を含む。 灰色～暗灰褐色部分的に橙褐色、半還元。
15－2 図版24	須Ａ一坏	覆土	《13.0》 5.2 《5.3》	底部よりやや内彎しながら、立ち上る。	内外面ロクロ調整。回転糸切り。	1/5 残存。 焼成良好、灰色、石英粒を碍に含む。
15－3 図版24	須Ｂ一坏	貼床土内、覆土	《13.0》 3.6 《4.6》	底部から体部にかけて内彎し、口縁で外反する。	内外面ロクロ調整。	2/5 残存。 半還元、淡黒褐色砂粒子を含む。
15－4 図版24	須Ａ一埦	床直、カマド	—— （ 3.7） 6.7 0.65	底部から体部にかけて直線的に立ち上る。台端巾広く、外へ張り出す。高台を有する。	底部右回転糸切り後、付高台。高台部及び接合部をていねいにナデ。	2/5 残存。 焼成良好、灰色、砂粒子を含む。
15－5 図版24	土師質一坏	カマド	《12.4》 4.7 5.8	底部から体部にかけて内彎し、口縁部でやや外反する。底部やや厚く、体部との境が、やや鋭角をなす。上げ底。	外面ロクロ調整、内面ロクロ調整後ナデ、右回転糸切り。	2/7 残存。焼成やや不良。橙褐色～暗灰褐色の胎土緻密。赤色スコリア状物質多く含む。
15－6	須Ｂ一坏	覆土、カマド	《14.7》 （ 3.7） ——	体部は直線的に立ち上り、口縁部は外反肥厚する。	内外面ロクロ調整。口縁部横ナデ。	1/5 残存。 焼成やや不良。暗赤褐色。砂粒、石英粒を含む。
15－7	瓶一埦	覆土	《17.6》 （ 3.3） —— ——	体部はやや内彎ぎみ、口縁部は角ばった感じである。	ロクロ整形後内外面に施釉。施釉法不明。	底部欠損。1/5 残存。焼成良好、胎土堅緻。素地一白灰色。釉一淡緑灰色 〔東裏、光ケ丘１？〕

ＳＩ 230 住居跡　　宇 瓦 一 覧

図版	出土位置	上弦弧幅 下弦弧幅 弧 深 厚 さ	内区		外区				脇区		文様深さ	全長	備考
			厚さ	文様	上		下		幅	文様			
					厚さ	文様	厚さ	文様					
15－8 図版24	カマド	(16.0) (15.5) —— 7.2	3.1	KK	1.9	a	2.2	a	5.2	a	0.2	(9.9)	第Ｇ３－ｂ。凹面広端、側端ヘラ削り。凸面横目叩き。右側端面ヘラ削り。 砂粒を含む。色調青灰色。

ＳＩ 230 住居跡　　鉄 製 品 一 覧

図版	種別	出土位置	寸法	備考
15－9 図版24	不明	床面やや上	長さ　(5.9) 幅　0.4 厚み　0.35	不明鉄製品、図で上部大きく欠損、下部先端若干欠損。断面方形。

ＳＩ 231 住居跡　　土 器 一 覧

図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
16－1	土－坏	2次床直	(12.3) (4.0) (4.4)	底部から口縁にかけて、内彎気味に立ち上がる。口唇部がやや細くすぼまる。	底部は不定方向のヘラ削り、体部下半は横もしくは斜めのヘラ削りと。口縁外面は横ナデ。	1/5残存。 口縁片と体部片接合せず。 復元実測。
16－2 図版25	土－塊	覆土、1・2次床直	(14.3) 6.8 6.3 0.8	底部から体部にかけて内彎し口縁は外反する。端部丸味をもち外方へ張り出す高台を有する。歪みが著しい。	体部外面は細かい斜位のヘラ削り。外面口縁～内面口縁はヨコ、内面底部にかけてはナデナメのヘラミガキ。内面全体に	4/5残存。
16－3 図版25	土－甕	覆土、北カマド東脇	20.6 23.8 2.1	胴部上半に最大径あり(22.8)器厚は3～4㎜と薄い。口縁は強い「く」の字状の屈曲。底部は小さく安定性に欠ける。	口縁内外面横ナデ。胴外面上半は横もしくは斜めのヘラ削り。胴部外面下半から底部にかけては縦もしくは斜めの↗	7/8残存。ススがほぼ全面的につく。↗ヘラ削り。 胴部内部は痕跡不明瞭であるが全体にヘラナデ。
16－4 図版25	土－甕	覆土	(12.6) (11.8) 7.2	口縁「く」の字でロ縁と胴部に最大径をもつ、器高の低い小形のカメ、器壁は胴部中央が最もうすい。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面タテヘラ削り。胴部内面横ヘラナデ。底部外面を手持ちヘラ削り。	1/2残存。
16－5 図版25	土－甕	覆土、南カマド1次貼床土内	(12.4) (15.8) 7	胴部に最大径あり(14.6) ロ縁部は浅い「コ」の字状。台状の厚い底部を有する。	口縁から頸部を内外面横ナデ。胴部上半は横のヘラ削り。下半は器肌荒く不明。胴部から底部内面は横ヘラナデ。	3/5残存。
16－6 図版25	須A－坏	2次床直、1・2次床直	12.2 4.3 4.6	底部から直線的に立ち上がり口縁は外反、肥厚する。体部上半にロクロ目による屈曲が見られる。	内外面ロクロ調整、回転糸切り。	完形。 灰色～橙褐色。焼成不良。
16－7 図版25	須A－坏	覆土	—— (4.0) (5.4)	底部から体部にかけて内彎し立ち上がる。	内外面ロクロ調整。	1/10残存。 内面墨書（文字不明）
16－8 図版25	須A－坏	覆土、北カマド東脇	(14.4) 5.0 (5.4)	底部から口縁にかけて直線的に立ち上がり、口唇はわずかに肥厚する。上げ底。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	3/4残存。 灰色～灰褐色。焼成不良。
16－9 図版25	須A－坏	覆土、北カマド東脇	11.8 4.4 4.1	やや台状気味の厚い底部から体部にかけて内彎し、口縁部は外反する。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。口縁下部内外面に輪積みもしくは巻き上げ痕。	完形。 淡灰褐色。焼成やや不良。
16－10 図版25	須A－坏	南カマド	13.8 5.4 4.8	台状気味の低部から体部にかけて内彎し、口縁部は強く外反する。	底部右回転糸切り。口縁部内外面横ナデ。	3/5残存。 灰色～暗灰色。焼成やや不良。
16－11	須B－坏	2次貼床土内、南カマド	(12.2) 4.2 (4.2)	底部から、口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。口唇部は肥厚。	内外面ロクロ調整。内外面ともロクロ目、目立たず平滑に仕上げられている。	1/8残存。 胎土緻密。赤色スコリア状物質含む。橙褐色。
16－12 図版25	土師質－坏	1・2次床直	(11.4) 4.4 4.8	やや彎曲しながら底部より立ち上り、口縁はゆるやかに外反、肥厚する。底部はかなり厚い（1.0）。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	1/3残存。 内面、黒い付着物跡有り。
16－13 図版25	須B－坏	1・2次床直	(13.5) (4.4) (5.8)	底部から体部にかけて内彎し口縁は外反肥厚する。器壁は口縁に行くに従い薄くなる。	底部回転糸切り。ロクロ目は目立たず、平滑に仕上げられている。	1/4残存。外面に墨書（文字不明）。胎土緻密。赤色スコリア状物質含む。 橙褐色。16－11に似る。
16－14 図版26	須A－塊	北カマド	13.6 6.1 6.0 0.7	底部から体部にかけて内彎し口縁部は外反肥厚する。低く丸く肥厚する高台を有する。	内外面ロクロ調整。底部回転糸切り後、付け高台。高台部は丁寧な横ナデ。口縁下に輪積みもしくは巻き上げ痕あり。	7/8残存。

ＳＩ 231 住居跡　　男 瓦 一 覧

図版	出土位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
17－1 図版26	北カマド。2次、1・2次床直	—— 18.8 (33.2) 1.0	——	17×17	不整形。	縄目R	縄目叩き後横ナデ、狭端へラ削り。	広端未調整。左右側端へラ削り。	胎土緻密。赤色スコリア状物質含む。橙褐色。
17－2 図版26	1・2次、2次床直	(9.8) (14.4) (38.2) 1.4	粘土横紐	25×24	縄目叩き後横ナデ。	縄目	縄目叩き後、板状工具による回転ナデ。	側端へラ削り。	凹面に朱書き（文字不明）。
18－1 図版26	P－1、2次貼床土内	—— 19.1 (17.9) (11.2)	——	17×18	不整形。	縄目L 10本	縄目叩き後横ナデ。	広端未調整。左右側端へラ削り。ＳＩ 230 覆土出土片と接合。	広端面に巾0.5深さ0.1～0.2の植物茎？圧痕付く。赤色スコリア含む。
18－2 図版26	P－1 入口部内、1・2次床直	—— (18.2) (27.6) 0.7	——	21×23	不整形。	縄目L	叩き後横ナデ。	広端未調整。左右側端へラ削り。ＳＩ 230 覆土出土片と接合。	赤色スコリア含む。胎土緻密18－1に似る。灰色～橙灰色。

ＳＩ 231 住居跡　　女 瓦 一 覧

図版	出土位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
18－3 図版26	南カマド袖内	—— (14.2) (26.6) 1.6	——	24×24	不整形。	縄目L 10本	側端にやや平行弧を描く叩き。	広端未調整。左側端ナデ。	凸面広端に側端と平行する深い擦状圧痕1条あり。
18－4 図版27	覆土	—— (14.5) (24.6) 1.5	——	21×23	不整形。	縄目L 10本	側端に平行する丁寧な叩き。	右側端ナデ。	赤色スコリア状物質含む。灰色～橙灰色。
19－1 図版27	北カマド内、2次貼床土内	—— (18.2) (23.0) 2.1	——	32×30	広端へラ削り。	縄目L 11本	側端にやや平行弧を描く叩き。	広端へラ削り。右側端ナデ後へラ削り。	凹面「上」の逆字の模骨飾刻文字。凸面広端に浅い擦状圧痕1条あり。
19－2 図版27	1・2次床直	(10.0) —— (21.5) 1.9	——	18×16	不整形。	縄目L 8本	側端に対しやや強い弧を描く叩き。	狭端不整形。左側端ナデ。	赤色スコリア状物質を含む。暗赤褐色。
19－3 図版27	1・2次床直	—— —— (14.0) 2.8	粘土板	15×20	端縁（左）へラ削り。	縄目L 8本	粗雑な叩き。	右側端へラ削り。	凹面に押印陰刻「荏」。
19－4 図版27	覆土	(14.7) —— (12.9) 3.0	粘土横紐	21×27	狭端・左側端とも端縁へラ削り。	縄目L 14本	側端に対しやや平行弧を描く叩き。	狭端へラ削り。左側端へラ削り。	

ＳＩ 231 住居跡　　土 製 品 一 覧

図版	種別	出土位置	寸法	備考
19－5 図版27	土錘	覆土	長さ　(2.9) 径　1.0中央	両端欠損。胴中央に最大径有する。両端ややすぼまる。 孔はほぼ円形、径0.3。 重量約2.5ｇ

図面 図版	種別	出土 位置	寸法	備考
19－6 図版27	土錘	南カマド内	長さ　(1.4) 径　1.0	上部若干欠く、下半部欠損。 孔は楕円形、0.25×0.35。 重量約1.6ｇ。

ＳＩ231 住居跡　　石製品一覧

19－7 図版27	砥石	覆土	長さ　(5.9) 幅　2.0 厚み 0.9～1.4	全面磨滅（側端の方は殆ど残存せず）図で上部を欠く。側端部に溝状の切込みあり。石質泥岩？ 重量約15ｇ。
19－8 図版27	砥石	覆土	長さ　(4.5) 幅　2.1～2.8 厚み 1.2～1.5	全面磨滅、図で上部を欠損する。 石質凝灰石（?） 重量約23ｇ。

ＳＩ231 住居跡　　鉄製品一覧

19－9 図版27	不明	北カマド	長さ　(2.4) 幅　0.4 厚み　0.4	断面方形。頭部折っている。図で下にいくに従いやや細くなる。釘の頭部片か。
19－10 図版27	不明	覆土	長さ　(9.2) 幅　0.6 (ねじれ部　0.5) 厚み(先端寄 0.2)	用途不明。両端欠損、中央に両方向からねじりが加えられている。断面はねじり近くでは方形、先端に向い次第に平たくなる。銹化著しい。

ＳＩ232 住居跡　　土器一覧

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
20－1 図版28	須A－坏	覆土	(12.5) 4.5 (6.0)	体部内彎する。口縁部は強く外反し、肥厚する。器壁は体部下端厚くしだいに薄くなり、口縁下でもっとも薄い。	内外面ロクロ調整。回転糸切り。	2/6残存。
20－2	須A－坏	覆上	(14.2) (5.1) 5.8	体部下半内彎する。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。	3/6残存。 体部片と底部片は接合しないが同一個体（復原実測）。
20－3	須B－坏	覆上	(14.9) 5.0 (7.6)	体部下半がやや内彎する。	内外面ロクロ調整。口縁内外面横ナデ。口縁下部に輪積みもしくは巻き上げ痕あり。	1/5残存。 灰色～橙灰色。半還元。
20－4 図版28	須A－塊	覆上	―― (2.9) 0.6	器高ある体部でやや内彎する。断面三角形に近く、低い高台を付ける。	底部回転糸切り後、付け高台。器部を丁寧に横ナデ。内外面ロクロ調整。	1/2残存。 底部～体部。 青灰色。焼成良好。
20－5	須A－坏	覆上	(13.9) (13.8)	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は肥厚外反する。器壁全体的に厚い。	内外面ロクロ調整。	1/5残存。
20－6 図版28	土師質－坏	覆上	(12.4) 4.4 6.5	底部より直線的に立ち上がる。器壁は底部に向って厚みを増す。	内外面ロクロ調整。回転糸切り。口縁下に巻き上げ痕あり。 230・231覆土出土片と接合。	3/5残存。胎土緻密、赤色スコリア含む。褐色～橙褐色。焼成不良。Ｓ1

ＳＩ 232 住居跡　　男 瓦 一 覧

図版	出土位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
20－7 図版28	2次床直、覆土	9.0 (21.8) (40.0) 1.45	粘土横紐	17×12	不整形。	縄目	縄目叩き後、板状工具による回転ナデ。	狭端、広端不整形、左側端、右側端ナデ。	凹面に朱書き（文字不明）。
21－1 図版28	カマド	14.9 —— (26.9) 0.8	粘土横紐	(32×27)	不整形。	縄目L	縄目叩き後横ナデ。	狭端ナデ、左右側端ヘラ削り。	凹面に朱書き（文字不明）。

ＳＩ 232 住居跡　　女 瓦 一 覧

図版	出土位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
21－2 図版28	覆土	(6.7) —— (9.2) 2.0	粘土横紐	18×14	不整形。	縄目L 7本	不整形。	狭端、右側端ヘラ削り。	狭端隅切り。
21－3 図版28	カマド	(15.6) —— (9.6) 2.85	——	14×15	端縁ヘラ削り。	縄目L 7本	不整形。	狭端、右側端ヘラ削り。	凸面狭端に棒状圧痕1条（側端に平行）広・狭端不詳。一応図上を狭端とする。
21－4 図版28	カマド	(23.8) —— (19.9) 1.9	——	14×17	側端、側端縁、狭端ヘラ削り。	縄目L 8本	叩きしめの円弧B。不整形。	狭端不整形、左右側端ヘラ削り。	狭端面に布目痕。
21－5 図版28	カマド	(14.2) —— (18.25) 2.6	——	22×23	端縁ヘラ削り。	縄目L 9本	側端に対しやや弧を描く叩き。不整形。	狭端ヘラ削り。左側端ヘラ削り後ナデ。	凹面に横骨陰刻文字「山万」。
21－6 図版29	カマド	14.0 20.5 2.6 ——	粘土横紐	32×29	端縁ヘラ削り。	縄目L 14本	狭端、右側端縁共ヘラ削り。	狭端、右側端ヘラ削り。	凹面に朱書き（文字不明）。
22－1 図版29	カマド	(10.0) —— (22.8) 1.4	粘土板	24×21	広端縁、左側端縁ヘラ削り。	縄目L 7本	不整形。	狭端、右側端ヘラ削り。	
22－2 図版29	カマド 内左袖	—— (13.7) (22.0) 1.4	粘土横紐	26×34	端縁ヘラ削り。	縄目L 8本	側端に対し傾きを持つ叩き。	広端ヘラ削り。右側端ナデ後ヘラ削り。	凸面広端にやや深い側端に平行する棒状圧痕1条。
22－3 図版29	カマド 覆土	(11.5) —— 24.0 2.8	——	20×18	端縁巾広くヘラ削り。	格子目	側端に対しほぼ斜向する叩き。	狭端、広端ヘラ削り。	ＳＩ 229 覆土出土片と接合。
22－4 図版29	カマド	—— (14.3) (13.8) 1.8	——	20×25	不整形。	縄目L 9本	不整形。	広端ヘラ削り。左側端ナデ。	
22－5 図版29	カマド 内左袖	(7.2) —— (18.5) 1.8	——	19×20	広端縁ヘラ削り。	縄目L 10本	不整形。	狭端ヘラ削り。	凹面にヘラ書き（文字不明）。

S I 232 住居跡　　鉄製品一覧

図面 図版	種別	出土位置	寸法	備考
22－6 図版29	不明	覆土下層	長さ　(5.0) 幅（最大）0.5 厚み（最大)0.4	釘先か。頭部欠損、先端部若干欠損。先端細くなる。断面はほ方形。

S K 538 土坑　　土器一覧

図面 図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
24－1 図版30	須B－壺	覆土	—— （2.6） 6.4 0.5	断面台形の低い高台を有する。	底部回転糸切り後、付け高台。	口縁～体部欠損。 焼成不良。土師質。赤色スコリア状物質含む。

S K 539 土坑　　土器一覧

24－2	須A－坏	覆土	(15.2) 4.8 ——	体部は直線的で口縁部は外反する。	内外面ロクロ調整。	1/5残存。底部欠損。 焼成良好。暗灰色。

S K 539 土坑　　鉄製品一覧

図面 図版	種別	出土位置	寸法	備考
24－3 図版30	不明	覆土	長さ　(6.0) 幅（最大）0.7 厚み（最大)0.6	釘の頭部か。図下部を欠損。頭部若干欠損。断面はほ方形。

S K 546 土坑　　土器一覧

図面 図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
23－1	土－坏	覆土	(11.9) （3.7） ——	体部から口縁にかけて内彎する。	体部外面は指頭調整。体部下端は横ヘラ削り。口縁部は横ナデ。体部内面はヘラナデ後ナデ。	1/5残存。 粗い砂粒子を含む。褐色。
23－2 図版30	土－坏	覆土	—— （1.6） 4.6	底部から体部にかけて直線的に開く。	体部下端外面は横方向ヘラ削り。底部ヘラ削り後ナデ、内面は不定方向のヘラミガキ。	1/4残存（底部）。 内面黒色処理。 焼成普通、外面灰褐色。 砂粒子を含む。
23－3 図版30	土－坏	覆土	（1.7） 4.6 ——	底部から体部にかけて直線的に開く。	底部はヘラ削り後ナデ、体部下端外面は横ヘラ削り。上部は指頭調整。内面はヘラナデ後ナデ。	1/4残存（底部）。 焼成普通。 細砂粒を多量に含む。

図版	種別 器形	出土位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
23－4 図版30	須B－椀	覆土	《16.2》 《5.8》 6.8 0.9	底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。有端出広く、低い高台を有する。歪みが著しく安定性に欠ける。	内外面ロクロ調整後、付高台。高台部横ナデ。	1/2 残存。酸化焔焼成不良。土師質。砂粒子を多量に石英粒、小石を若干含む。赤褐色。
23－5	土－甕	覆土	《21.0》 《19.7》 ——	口縁「く」の字状。胴部上半に最大径を有す。《22.7》	外面は全面横位に指頭調整を施す、口縁には輪積み痕が波状に部分的に残る。内面の頸部から胴部にかけては横ナデ。	1/4 残存。焼成不良。砂粒子を多量に含む。淡赤褐色。
23－6 図版30	土－甕	底面直上、覆土	《15.5》 《8.6》 7.3	高台状の器肉の厚い底部から体部にかけて内彎し、口縁部は直線的に立ち上がる。	底部回転糸切り。胴部外面は指頭調整。下端はヘラ削り、口縁は内面にかけて横ナデ。内面体部下半はヘラナデ。	口縁部片1/3、底部片残存。焼成普通。赤色スコリア状物質、白色砂粒を含む。赤褐色～暗赤褐色。
23－7	土－甕	覆土	《15.8》 《7.5》 ——	口縁ずれた「コ」の字状。胴部張る。胴部に最大径を有す。《18.1》	口辺内外面横ナデ。外面胴部上半指頭調整痕残す。下半は無雑な横方向のヘラ削り。	口縁部片1/4 残存。焼成普通。粗い砂粒子と石英粒を含む。赤褐色。
23－8	土－甕	覆土	《20.9》 《7.3》 ——	口縁から頸部にかけてはゆるやかな「く」の字状の屈曲をなす。口縁の歪が著しい。	口縁から頸部にかけては内外面横ナデ、胴部は縦のヘラ削り。胴部内面は斜めのヘラナデ。	口縁部片1/4 残存。細かな砂粒子と白色砂粒子を含む。暗赤褐色。
23－9 図版30	土師質－杯	覆土	《11.8》 4.05 4.8	高台状の底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部厚く、台端縦角をなす。	内外面ロクロ調整。内面底部中心よりせん状に調整。右回転糸切り。	1/3 残存。酸化焔焼成不良。砂粒と石英粒を多量に含む。橙褐色。内面底部中心部に粘(？)圧痕。
23－10 図版30	土師質－杯	覆土	11.9 4.15 4.3	やや張り出した台状の底部から口縁にかけて内彎気味に立ち上がる。底部厚く、体部との境がやや鋭角をなす。	内外面ロクロ調整。口縁下外面に輪積みもしくは巻き上げ痕あり。底部回転糸切り。	2/3 残存。酸化焔焼成不良。砂粒や赤色スコリア状物質を含む。淡褐色～灰色。
23－11 図版30	土師質－杯	覆土	12.05 3.95 5.6	底部から体部にかけて内彎し、口縁部はやや外反する。底部厚い。歪みが著しい。	内外面ロクロ調整。底部右回転糸切り。体部外面輪積みもしくは巻き上げ痕あり。内面底部中心よりせん状に調整。	完形。酸化焔焼成不良。砂粒、赤色スコリア状物質、黒母粒を多量に含む。暗橙褐色。
23－12 図版30	須B－杯	底面直上	11.8 4.5 5.2	底部から体部にかけて、やや内彎し、口縁部は外反する。底部は歪みが著しく、安定性に欠ける。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り、口縁下部に輪積みもしくは巻き上げ痕あり。	完形。酸化焔焼成不良。砂粒、白色砂粒子、石英粒を多量に含み若干の小石を含む。褐色～橙褐色。
23－13 図版30	須B－杯	覆土	《13.5》 5.1 5.0	高台状のきわめて厚い底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口唇部で外反する。ロクロ目が顕著。	内外面ロクロ調整。右回転糸切り。体部口縁下に輪積みもしくは巻き上げ痕あり。	3/4 残存。酸化焔焼成普通。土師質。砂粒、赤色スコリア状物質含む。底部外面に撚り紐(？)圧痕。
23－14 図版30	土師質－高台付杯	覆土	《15.9》 《8.2》 《11.0》 3.35	底部から体部にかけてやや外反し、口縁部で強く外反する。高い高台はやや外反気味に開く。	内外面ロクロ調整。口縁部は横ナデ、台部下端は横ナデ。	2/3 残存（口縁1/4、台部1/2 復原実測）。焼成不良。胎土緻密。赤色スコリア を含む。暗橙褐色。
23－15	土師質－高台付杯	覆土	《17.0》 《7.4》 《10.2》 《2.6》	体部は直線的にラッパ状に開き、口縁部は外反する。高くやや外に張り出す高台が付く。	磨滅が著しく、不明瞭であるが、内外面ロクロ調整。	口縁～体部片 1/2、高台部 1/4 残存。焼成不良。胎土緻密。赤色スコリア状物質多く含む。淡灰褐色。

P 29

宇瓦一覧

図版	出土位置	上弦弧幅 下弦弧幅 弧深 厚さ	内区 厚さ	内区 文様	外区 上 厚さ	外区 上 文様	外区 下 厚さ	外区 下 文様	脇区 幅	脇区 文様	文様深さ	全長	備考
24－4 図版30	覆土	(5.8) 9.7 —— 5.7	3.6	0	0.8	a	1.4	a	——	——	0.15	(6.7)	第G3－b。凹面広端ヘラ削り。凸面縄目叩き。淡灰褐色。図左側端部磨耗。瓦当部縄目叩き痕残る。外区ヘラ削り。

P 197

土器一覧

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
24－5 図版30	灰釉－椀	覆土	—— （1.4） 7.5 0.5	低く外へ張り出し、外面丸味持つ高台を有す。	付け高台。高台部及び接合部をていねいにナデ。	底部片。胎土黒緻。灰色。〔猿投。0－53〕

遺構外

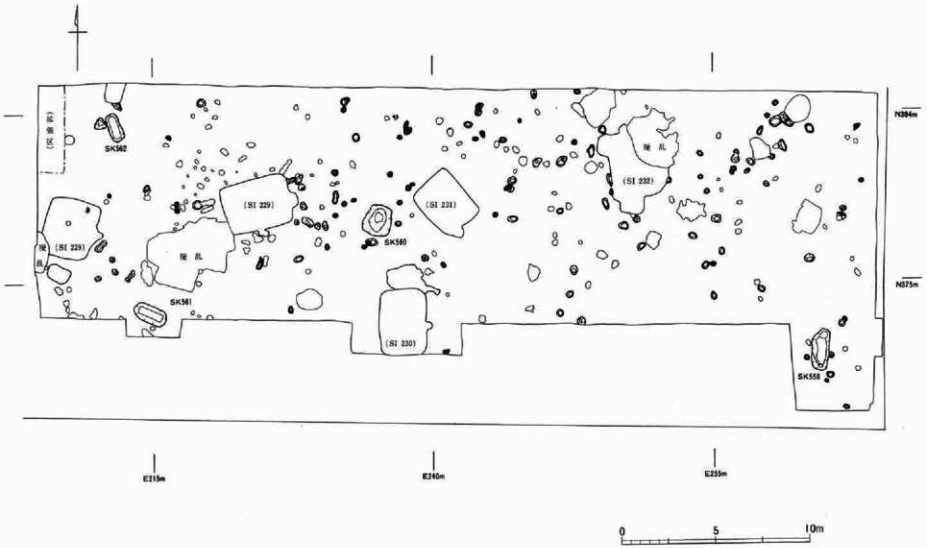
土器一覧

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
24－6 図版30	土師質－坏	GH74 区Ⅱ層	《11.8》 4.4 《5.8》	体部内湾し口縁部外反する。上げ底で底部と体部の境が鋭角的。	内外面ロクロ調整。回転糸切り。	1/2残存。 焼成不良。橙褐色。胎土緻密。赤色スコリア状物質含む。
24－7	須A－坏	GH73 区Ⅱ層	《13.3》 （4.7） 《5.0》	底部から体部にかけて、やや強く内湾し、口縁部はやや外反する。	内外面ロクロ調整。	1/8残存。 粗い砂粒を多く含む。灰褐色。
24－8 図版30	灰釉－高台付皿	GE73 区Ia層	12.9 2.7 7.2 0.5	体部内湾する。外面丸味を持ち、ほぼ直立する低い高台を付ける。	底部回転糸切り。高台部、接合部ていねいなナデ。体部内外面に漬掛施釉。底部内面周囲に重ね焼き痕残る。	2/3残存。 素地灰色。釉は灰緑色。〔猿投。0－53〕

遺構外

石製品一覧

図面 図版	種別	出土 位置	寸法	備考
24－9 図版30	砥石	GE80 区Ⅰ層	長さ　（10.6） 幅　3.6 厚み 2.0～3.5	3面磨滅、上部を欠く。 石質泥岩？ 重量約150g。



第5図　縄文時代遺構配置図（縮尺1/200）

Ⅵ 縄 文 時 代

縄文時代の調査は調査区全域において行った。該期の遺構はⅢc層上部において明瞭となる[1]上に、Ⅲc層上部まで遺物を多く包含するので、Ⅲc層の中位まで掘り下げ遺構検出作業を行った。遺構調査後、Ⅲc層下部を掘り、Ⅳ層上面にて発掘を終了した。

1. 発 見 遺 構

本調査によって発見された縄文時代の遺構は、土坑4基とピット111個である。検出面並びに堆積土により縄文時代のものと判断した。

SK 558 土坑（図面25、図版32）

調査区の南西隅にあり、P473と重複している。P473より新しい。

東西0.8m、南北約1.0mの不整円形を呈し、深さは最大55cmを測る。堆積土はSK 561・562土坑のそれに近似する。出土遺物はない。

SK 560 土坑（図面25、図版32）

調査区の中央付近に位置する。東西1.5m、南北1.6mの不整円形を呈し、深さは最大60cmを測る。堆積土はピットのタイプⅠbもしくはⅡbに近似する。出土遺物はない。

SK 561 土坑（図面25、図版32～33）

調査区の西半、南壁際で検出され、南へ拡張して全体を調査した。

上面巾東西1.9m、南北0.9m、底面巾東西1.3m、南北0.4mの規模で、長方形を呈す。壁は上部はやや開くが、下部は、堆積土下層に対応し、垂直もしくはオーバーハングし、箱形となる。底面はほぼ平坦で、ピット等はない。長軸方位は北で約65度西偏する。

堆積土は3層に大別される。上層（1～5層）はⅢb・Ⅲc層に近似した暗褐色土。中層（6～12層）は、6層などの黒色土を中央に、その周囲より下部に11・12層などのハードローム多い暗茶褐色土となる。締まり増し、粘性弱まる。下層（13～15層）は、ローム含む暗褐色土などで、締まり増し、粘性弱まる。これらの内、中層と下層の境は明瞭に識別出来る。調査時においては、下層上面を一時底面と見誤まったほどである。その成因に相違があるものと思われる。

出土遺物はない。

SK 562 土坑（図面25、図版32・34）

調査区の北西隅に位置する。SK561と同形態の土坑である。

上面巾東西0.7ｍ、南北1.5ｍ、底面巾東西0.4ｍ、南北1.2ｍの規模で、長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立上る。底面はほぼ平坦で、ピット等はない。長軸方位は、北で約20度西偏する。

堆積土及び堆積状態はSK561土坑に似る。同じく、3層に大別される。上層（1～9層）はⅢb・Ⅲc層に似る暗褐色土を主体とする。中層（10～16層）は黒色土を主体とする。下層は、ローム含む暗褐色～暗黄褐色土（18～20層）で、その上部にハードローム多い暗黄褐色土（17層）をブロック状に含む。

出土遺物はない。

ピット（第5図）

調査地の全体において大小多数のピット（小穴）が検出された。特に集中する部分はない。これらのピットを主に堆積土の相違により次の通り分類した。

Ⅰa 締まり粘性ある黒色土で、壁・底面の検出が容易。Ⅲb層上面で検出可となる。

Ⅰb 暗褐色土。締まり粘性あり。ⅠaとⅡの中間。壁・底面の検出やや容易。

Ⅱa 暗褐色土。Ⅲb層とタイプⅠとの中間。単一層で壁・底面の検出やや容易。Ⅲb層中位で検出可となる。

Ⅱb・Ⅱaにほぼ同じで、単一層でなく、壁・底面際に茶褐色～暗黄褐色土層が入るもの。

Ⅲa 褐色土～暗黄褐色土。Ⅲc層よりやや暗い。Ⅲc層上面で検出可となる。

Ⅲb 黒色土ブロック＋やや多いロームブロック。締まり弱い。

これらの内、Ⅲa・Ⅲbは自然の営為によるものと思われ、Ⅰa・Ⅰbとは明瞭に識別出来る。Ⅰa・Ⅰbは、SK561・562土坑堆積土などに近似することなどから人為的所産と思われる。Ⅱa・Ⅱbはその中間的なもので何れとも決し難い。確認され登録したピットの総数は174個で、タイプ別の内訳は、Ⅰa 2、Ⅰb 11、Ⅰa～Ⅰb 1、Ⅱa 39、Ⅱb 58、Ⅲa 43、Ⅲb 16、Ⅲaもしくは Ⅲb 1、その他3である。Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱbの合計は111、Ⅲa・Ⅲbの合計は63である。第5図で、前者は底面を図化し、後者は図化しないことで示した。分布においてタイプ毎のまとまりや相違はない。出土遺物は、タイプⅡbより4群土器片1点があるのみ。

2. 出　土　遺　物

調査区全体において、土器・石器・剥片・礫などが多く出土した。垂直分布はⅢa層よりⅢc層上部まで途切れることない。Ⅲc層下部においては極めて少ない。その平面分布は、西に少

なく、東部に多い。また、北へ行くに従いやや多くなる。Ⅲ層の傾斜は、東へゆるやかに下り、東半部においてはやや北へも下っている。遺物の分布はほぼ旧地形に合致して、低い方に多くなっている。礫は土器などと混在しており、総数800点余りで、円礫や破礫で、火熱を受けているものもある。調査区中央北壁際と調査区南東隅にやや集中する部分がみられた。なお、若干量あるⅠ層、Ⅱ層及び歴史時代遺構出土のもの等も一括して以下に記す。　（福田　信夫）

土　器（図面26、図版35）

出土した土器は、復原可能な2個体の他、総数331点の小破片である。時期的にも散慢であり早期撚糸文系・条痕文系・押型文系土器、五領ヶ台式・勝坂式・阿玉台式・加曽利E式・堀之内式・加曽利B式等の土器片があるが、特に主体をなすものはない。接合資料も上記2個体など、僅かである。総片数中57％が無文の小破片で時期不明瞭である。時期確認可能な小破片を6群に分類した。3は歴史時代遺構、7は排土、12・13はⅠ・Ⅱ層、他はⅢ層出土。

1群土器（1～5）　撚糸文系土器を一括する。出土総数36点で、全体の11％を示す。1は縦位の撚糸文が施され、施文後器面が研磨されている。この種の破片が1群中最も多い。2は条間隔が狭く、節の細かな撚糸文を施す。3は口縁部破片で、口唇部がやや肥厚する。条間隔が広く、節の太い撚糸文を施す。4は絡条体を押しつけて縦に引いた絡条体圧痕文であり、2点出土している。5は口縁部破片で、粗い器面調整の無文土器片である。

2群土器（6）　条痕文系土器を一括する。出土総数は13点で、全体の4％を示す。6は不定方向の条痕文が明瞭に認められる。

3群土器（7）　押型文系土器片で、細かな楕円形文を施す。1点のみの出土である。

4群土器（8～9）　縄文時代中期前半の五領ヶ台式から勝坂式にかけて、阿玉台式を一括する。出土総数85点で、全体の26％を示す。8は口縁部破片で、縦位の隆帯を口唇上より垂下し、隆線の裾部に結節沈線を施す。9は口縁部破片で、口縁部は内彎し、内側に腰線が認められる。波状の口縁を呈す。隆帯によって区画されたモチーフの裾部に結節沈線を施す。その他胴部破片で地文の縄文に沈線を施す土器片も多数出土している。

5群土器（10）　縄文時代中期後半の加曽利E式を一括する。出土総数4点である。10は磨消の懸垂沈線を有し、地文はRLの単節縄文である。

6群土器（11～12）　縄文時代後期を一括する。出土総数3点である。11は口縁部破片で器面内外面は粗い調整がなされ、外面は沈線が施され、口唇部内面は一条の段がつく。12は底部破片で推定径15㎝の中央に径約2㎝の穿孔を有す。底部から内側にカーブを描いてから胴上上部に立ち上がるという堀之内式の特徴を呈している。底面は網代痕があり、縦線は平たい竹状のものを使用し、紐状の条を経線として編み込む。13は胴部破片で外面は研磨され、3条

の沈線がめぐらされ、沈線間に刻目を施す。

上記の他、復原可能な土器に14・15がある。14は小形の深鉢である。底部から胴部にかけてやや外反気味に立ち上がり、口縁で内彎し、口唇断面三角形を呈す。胎土は赤褐色で砂粒子を含む。文様は地文に粗雑で不定方向に転がした単節縄文RLの縄文を持つのみである。縄文の施文後に胴下半部及び底部にヘラミガキの整形がなされている。15は深鉢土器である。底部から内側にややカーブして立ち上がり、胴部下半でややふくらみ、頸部から口縁にかけてやや開き気味である。口唇断面は細くなっている。胎土は赤褐色で石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。文様は口唇上に工具による圧痕文の刻みが施され、胴部上半は半截竹管による横位の2条の平行沈線が三帯めぐらされ、帯間を右下りの斜位の平行沈線でうめている。器面は粗い整形がなされている。以上の点より諸磯b式に比定されると思われる。[2] また、14の小形深鉢は、内外面のヘラケズリ及びヘラミガキによる調整に諸磯b式の要素が見受けられることから、[3] 15と同一時期のものと思われる。

石　器（図面26、図版35～36）

石器・石器片は53点で、その内訳は石鏃7点、打製石斧6点、スタンプ状石器3点、凹石1点、敲石1点、特殊磨石1点で、その他は小破片のため器種不明確である。

石鏃（16～20）は形態・大きさについては共通性は認められず、五角形無茎鏃（16）、凹基無茎鏃（17～19）、平基無茎鏃（20）がある。石材はチャート（16～18）と黒曜石（19・20）。

スタンプ状石器（21・22）は底面平坦になっており、側縁は打面調整による抉りを呈し、磨滅痕が観察される。砂岩製である。なお21については、スタンプ状石器に併用して凹石・敲石としての機能も認められる赤褐色の色調をした砂岩製の石器である。

打製石斧（23）は短冊型を呈し、片面に自然面を残し、側縁に粗雑な調整をする。変成岩製。その他撥型石斧1点が出土している。ほとんどは破損が著しく形態不明瞭である。

特殊磨石（24）は断面五角形を呈し、図中の矢印の示す3面に磨滅痕が見られる。砂岩製。

16・22・24はⅡ層、他はⅢ層出土。　　（稲口喜重子）

註 (1) ピットの内、黒色土のタイプⅠaなどは、Ⅲb層上面にて検出が可となる。SK561土坑は南壁にかかったので、詳しく観察したが、Ⅲb層中位より掘り込まれているものと、やや不明瞭ながら把えたが、堆積土上層はⅢb層よりやや明るい点が相違しているのみで、極めて識別し難かった。

(2) 新井和之・原田昌幸両氏よりご教示いただいた。

(3) 藤の台遺跡調査団　1980　『藤の台遺跡』Ⅲ

Ⅶ 先土器時代

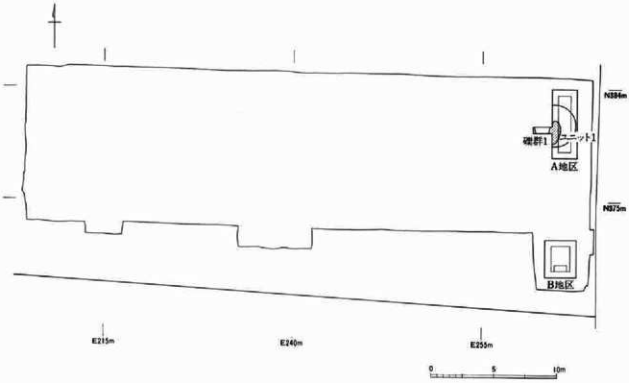
先土器時代の調査は、調査地区の東端部において、浄下槽埋設位置（A地区）と浸透槽埋設位置（B地区）の2ケ所を対象とした。発掘深度は工事による掘削深度までとし、A地区においては、Ⅳa層上面まで、B地区ではⅩ層上部までとなった。

今回の調査において、上記2ケ所を先土器時代の調査の対象としたのは、南に隣接する第51次調査地区にてユニット[1]3箇所が検出された結果によっている。即ち、B地区のほぼ南へ15m近辺にて、Ⅳ層（暗黄褐色ソフトローム）中、Ⅴb層（黄褐色ハードローム）下部、及びⅨ層（黒褐色ローム、第二黒色帯）に各々、石器、フレイク等が集中して分布する地点があった。

今回の調査では、B地区においては何ら検出されなかった。A地区において、ユニット1箇所と礫群1箇所を検出した。以下に記述する。

なお、第51次調査地区と今次調査地区は、共に、国分寺崖線より北へ200m、野川の開析谷より西へ250mと台地のやや内側へ入っており、このようにまとまって検出されることは予想されなかったことである。旧地形の復原とも併せ、先土器時代におけるあり方を検討する必要がある。

（福田　信夫）



第6図　先土器時代遺構配置図（概念図）（縮尺1/300）

ユニット1（図面27・28、図版38・40）

第Va層中層より上層において、2ｍ内外の範囲に集中し、2つの母岩に分類される資料（1～11）とナイフ形石器1点（12）が出土している。

A母岩資料（1～7）　石核1点、折断剥片1点、打面調整剥片2点、不明石器1点、その他剥片、砕片74点からなる。凝灰岩製。1は石核（残核）で一面に自然面を残し、剥離方向の不規則な調整剥離面を残している。形状は角柱状を呈する。2は石核に接合する砕片で、他の剥片剥離後、間接的に剥落したものである。3は不明石器で縦長剥片を素材に下端部に調整剥離が認められ、断面は薄い。4は折断剥片で打面、末端とも欠損する。5は剥片である。6・7は打面調整剥片と思われ、石核を輪切りにするような横長の剥片を作出する。1の残核との接合は不可能である。

B母岩資料（8～11）　石核1点、ナイフ形石器1点、折断剥片1点、その他剥片・砕片27点からなる。粘板岩製。この資料において、石核（残核）にナイフ形石器と折断剥片との接合が認められた。8は石核（残核）で上位に打面があり、複数剥離により平坦な面を作出している。背面に自然面を残し、側面に節理面を有す。上端から下端に達する縦長の剥離面が3面認められる。形状は円錐形である。その縦長剥片により製作・作出されたのが9のナイフ形石器であり、10の折断剥片である。9は全長2.5㎝、最大幅1.5㎝である。腹面に石核から剥離する際にできた打瘤痕を残したままで折断技法により先端部と基部と一側縁に急斜な調整剥離を施し、一側縁を刃部としている。10は全長2㎝、最大幅1.5㎝である。腹面に石核から剥離する際の打瘤痕を残し、素材の長さの3分の1のものである。折断面は加撃点を持たず、リングが背面に集中している。

12はナイフ形石器である。全長3.8㎝、最大幅1.3㎝で柳葉形を呈す。縦長剥片を素材とし、折断手法により二側縁の一部分に調整剥離を施す。頁岩製。

以上ユニット1に認められる石器・剥片の特徴は「砂川型刃器技法」[2]としてとらえられ、加工された石器はいわゆる目的的剥片を素材としているか、或いはその過程で生じた調整剥片を素材としたものである。砂川型刃器技法による石器・剥片が出土している類例遺跡には、武蔵野台地では、先土器時代第Ⅱb期[3]に相当する砂川遺跡や前原遺跡第Ⅳ中層[4]に認められ、また相模野台地では寺尾遺跡第Ⅳ文化層[5]や栗原丸山遺跡第Ⅴ文化層[6]に認められる。しかし本調査区では出土石器にバラエティーはなく、砂川型刃器技法によるナイフ型石器に伴う、槍先形尖頭器、彫器、掻器は認められない。

13はナイフ形石器である。全長3.2㎝、最大幅1.5㎝。石刃あるいは縦長剥片を素材とし、一側縁と基部は急斜な調整剥離を残す。玉髓製。ただし、13は出土地点が先土器時代調査区外（N 375 m、E 240 m付近）で、Ⅲ層上面から出土している。

礫群1（図面27、図版39・40）

規模については、小形の礫群と思われ、範囲径は2m内外において分布し、中心部に集中する。その垂直分布はVa層中層に集中し、ユニット1の資料が礫と水平、及び礫上部に広がる。

礫群構成礫は57点ある。全て焼礫で、赤色化56点、灰色化1点である。またススが付着物質の付着が13点認められる。このうち、破損礫が圧倒的に多く56点で、完形礫は1点のみである。また礫の重量では、破損礫の平均値は61g、接合によりほぼ完形になるもの2点、2分の1になるもの5点の計7点があり、総量は3500g、平均値500gである。いずれも拳大か、それより若干大きい。また接合面にも焼けた面やスス状物質が付着した面が認められる。

（樋口喜重子）

註(1) 石器類が集中的に分布する地点を便宜上「ユニット」という名称で扱う。

(2) 戸沢充則　1974『砂川先土器時代遺跡　―埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査―』

(3) 小田静夫　1975『日本先土器時代の編年』I. C. U Occasional Papers Number 2

(4) 小田静夫他　1976『前原遺跡』

(5) 鈴木次郎・白石浩之　1980『寺尾遺跡』（神奈川県埋蔵文化財調査報告18）

(6) 鈴木次郎他　1982「座間市栗原中丸遺跡の調査」『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

Ⅷ　小　　結

(1) はじめに

本調査地区より出土した歴史時代の土器は、検出された5軒の住居跡出土土器を主体としており、土師器、土師質土器、須恵器[1]の他、灰釉陶器、緑釉陶器などが伴出している。これら住居跡出土土器群の変遷や時期について検討し小結とする。

南関東における歴史時代土器の編年については、小出義治氏らの主催した"東日本における奈良時代土器の研究"[2]を契機として研究が深化していったとされる。[3]以降今日に至るまで、生産地並びに消費地における編年の確立を目指して多くの作業が行われ公にされている。[4]これらの編年基準は、須恵器坏に中心がおかれ、その底部切離し技法や再調整の有無、及び法量比などによっている。その成果をみても、年代観に多少の相違があるものの、編年序列についてはおおむね変わるところがない。とりわけ、近年における服部敬史・福田健司の両氏による南多摩窯址群における須恵器編年[5]は、より精緻さを増しており、南武蔵における土器編年の指標になってきている。

南多摩窯址群の編年に拠れば、平安時代のものに限ると、G37(御殿山地区37号)窯式→G59窯式→G25窯式→G5窯式→G14窯式と変遷し、酸化焔焼成須恵器を主体とするG14窯式をもって終焉をむかえる。そしてこれらの年代観は、G59窯式と、845年を上限とする武蔵国分寺七重塔の再建瓦と併焼された北武蔵新久A地点窯・E地点窯出土[6]の須恵器坏とをほぼ同時期とし、年代の定点としている。そこで、G37窯式が9世紀前半、G59窯式は9世紀後半、G25窯式10世紀前半、G5窯式は10世紀中葉から後半にかけて、G14窯式は10世紀末葉から11世紀初頭頃と、各々年代が想定されている。[7]

南多摩窯址群における須恵器生産の最終段階であるG14窯式については、窯址も未確認であり、未だ実態が不分明である。以降、平安時代末期の土器編年については、坏・塊類において須恵器にかわって主体的位置を占めてくる土師質土器や共伴する土師器、施釉陶器などをもって序列を考えざるを得ないが、南武蔵における該期の資料は、国府・国分寺周辺における近年の調査によりやや増加しつつあるものの、纏まった資料は僅少であり、編年序列についても未だ試行錯誤の段階といってよい。[8]

さて、本稿では、上述の諸成果にもとづき、最も多く出土した須恵器坏と土師質土器坏を中心にその法量・形態などから分類を行い、土師器などをも併せてその共伴関係を検討し、その変遷を考えようと思う。その他の器種については補助として用いる。

(2) 須恵器坏の分類

須恵器坏は全て回転糸切りのままで、再調整されたものはない。また、還元焔焼成のもの(以下"須恵器A坏"と呼ぶ)と酸化焔焼成のもの(以下"須恵器B坏"と呼ぶ)に大きく分

類され、前者は4類に、後者は3類に細分される。なお、それぞれ、南多摩窯址群編年や武蔵国分寺遺跡市立四中建設に伴う第1次調査報告の分類[9]（以下"四中分類"と略す。後出する土器群の分類については"四中土器群分類"とし区別する。）に対比させて作業を進めた。

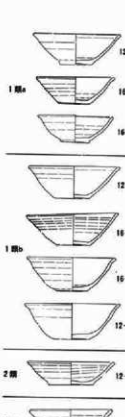
須恵器A坏（第7図）

1類　比較的法量の大きな坏で、四中分類Ⅴ類、南多摩窯址群G5窯式にほぼ比定できよう。口径12～15㎝前後、底径4～6㎝前後で、口径と底径の法量比が1/2.5～1/3を示す。2つに細分でき、aは器高やや高く小ぶりの坏で、体部やや直線的に開く図面12－8、図面16－6と、体部内彎する図面16－9などがある。bは、器高、口・底径ともに大きい坏で、aに同じく、体部ほぼ直線的に開く図面12－6、図面16－8や、体部内彎する図面16－10、図面12－12など。

2類　器高低く、口径と底径の法量比が1/2を示す。体部内彎する。底部やや高台状に突出する。図面12－5の1点のみ。

3類　全体に2類に似る。器高やや高く小ぶりである。図面12－7の1点のみ。

4類　器高やや高く、口径と底径の法量比が1/2に近い。体部内彎する。図面20－1の1点。



第7図　須恵器A坏の分類

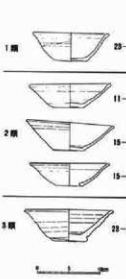
以上の還元焔焼成の坏の多くは、灰色～淡橙灰色の色調を有しており、いわゆる青灰色を呈するものは図面12－8など僅かである。また、図面12－12の様に軟質緻密なものも含まれている。塊においても同様に灰色～淡い淡橙灰色を呈するものが多い。

須恵器B坏（第8図）

1類　須恵器A坏1類aに類似する。四中分類Ⅱ類に比定される。図面23－12。

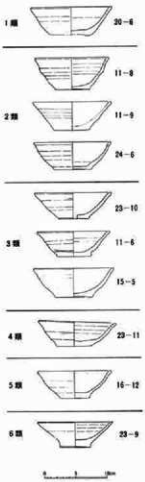
2類　小ぶりで底径小さく、口径と底径の法量比が1/2.5～1/3を示す。四中分類Ⅳ・Ⅴ類に相当し、南多摩窯址群G14窯式にほぼ比定され得るものと考える。図面11－7、図面15－1、図面15－3。

3類　器壁厚い、大ぶりの坏で、底部はきわめて厚く、やや高台状に突出する。図面23－13。



第8図　須恵器B坏の分類

以上の酸化焔焼成の坏の多くは、図面11－7や図面15－1の様に灰色～暗赤褐色を呈しており、酸化焔焼成というより、いわば"半還



第9図　土師質土器坏の分類

元焼成”とすることができる。

(3) 土師質土器坏の分類（第9図）

1類　底径大きく、体部直線的に立上る。図面20－6。

2類　体部ほぼ直線的に立上る。図面11－8・9、図面24－6。

3類　体部やや内彎する点を除き2類に似る。図面11－6、図面15－5、図面23－10。

4類　器高やや低く、体部内彎する。図面23－11。

5類　径の小さい底部が厚く高台状に突出する。体部は内彎する。図面16－12。

6類　底部は5類に似る。体部やや外へ開く。図面23－9。

法量、形態などから6類に分類された土師質土器坏は、下記の特徴・共通性を有している。[9]

① 法量の上では、口径11～12.5㎝前後、底径4.5～6㎝前後、器高4～5㎝前後で、口径と底径の法量比1/2～1/2.5、径高指数（器高／口径×100）35～40の間にほぼまとまる。

② 器形の特徴として、底部が厚く高台状に突出する点があげられる。2類などにおいては底部端（体部下端）が鋭く変換する。体部器壁も概してやや厚い。

③ また、体部内面はゆるやかに彎曲しており、底部内面の平坦面は少ない。4・6類の2点においては、底部内面中央より始まる巾0.5～0.7㎝の渦巻き状の器面調整痕がみられる。

④ 2類などにおいては、体部外面に3～5条のロクロ目が顕著である。

⑤ 胎土はきわめて軟質緻密で、夾雑物少なく、”赤色スコリア状物質”が目立つ。2類の3点は典型的で、内外面ともその表面が斑点状に剝落し、接着材による接合も困難である。但、3類の図面11－6や6類の図面23－9などはやや硬質である。また、5類（図面16－12）はやや趣を異にし、酸化焔焼成須恵器に近く、硬質である。[10]

⑥ 色調は、1類の淡橙灰色、2・5・6類の橙褐色、その中間の3・4類と様々で、焼成についても1類が半還元焔焼成と考えられ、2・5・6類が酸化焔焼成、その中間の3・4類とすることができる。

四中土器群における土師質土器について記す。四中報告（西脇1981註(4)i）ではこれを須恵器B（酸化焔焼成）もしくはロクロ土師器として分類している。即ち、四中土器群分類第3群SI4住居跡の坏〔四中報告（以下略す）第25図1〕、同第4群SI3住居跡の坏〔第23図3〕、同群SI7住居跡の高台付埦〔第30図5〕、同第4群と第5群の中間とされるSK8土坑の坏〔第80図6・7・8〕などは須恵器B坏・埦としている。第5群にはない。第6群では、SI

13住居跡の小形坏〔第54図2・3〕はロクロ土師器坏、SK9土坑の小形坏もしくは皿形土器〔第81図1・2・3〕は須恵器Bとされ、共にいわゆる「カワラケ」であるとしている。

これらは大きく2つに分けることができる。第3群、第4群、SK8土坑の一群と、第6群にみられるものとにである。前者においては、SI4住居跡の坏〔第25図1〕とSK8土坑の坏〔第80図7〕が本報告の2類に比定される他は相当するものはない。概して法量やや大きく、バラエティーがあり、土器群毎の纏まりや相違は看取できない。資料が僅少であることにも起因しているのであろうか。後者の一群は小形の坏形土器や皿形土器で、武蔵国府高木ビル地区SI55出土資料もしくは武蔵国分寺府中公共水道地区SI119住居跡出土資料に相当する。前者より後者へ変遷するとともに、次第に主体的位置を占めるようになるものと思われる。[92]

そこで、本報告の土師質土器坏は、おおむね前者の一群（即ち四中土器群第3群、第4群、SK8土坑）に相当するものとすることができよう。

なお、図面23－14・15は、いわゆる"足高高台付"[93]の坏であるが、前述の諸特徴を有する土師質土器である。四中土器群においても第4群SI7住居跡に高台付坏〔第30図5〕があるも、本報告の2点に比べ台部が低い点など形態を異にしている。[94]

（4）土器群の分類

各住居跡出土土器並びに住居跡ではないが比較的纏まった資料といえるSK546土坑出土土器[95]について、前項で分類した須恵器坏、土師質土器を中心にその他の器種の共伴関係を検討したところ、大きく3群に分類することができる。（第2表）

群＼器種		須恵器A 坏 1類	須恵器A 坏 2類	須恵器A 坏 3類	須恵器A 坏 4類	須恵器A 高台付椀	甕	須恵器B 坏 1類	須恵器B 坏 2類	須恵器B 坏 3類	須恵器B 高台付椀	土師質土器 坏 1類	土師質土器 坏 2類	土師質土器 坏 3類	土師質土器 坏 4類	土師質土器 坏 5類	土師質土器 坏 6類	土師質土器 高台付坏	土師器 坏	土師器 高台付椀	土師器 小形甕	土師器 大形甕	羽釜	灰釉陶器椀	緑釉陶器椀	備考
1群	SI229	④	①	①			□	①△				□										①				
2群	SI232	①△			①	①	□	□				①								□		□				
	SI231	④△				①		①	①							①			①	①	②	①		□		
	SI230	①				①		△	②					①								□		①		灰釉〔東濃光ケ丘1か〕
3群	SI226	□					□		①		①		②	①					①	②		①		②	①	灰釉〔東濃大原2か〕
	SK546	□						①		①	①			①	①		①	②	③		②	②		□		

第2表　土器群の組成

〔○は図示資料、数字は個体数を示す。△は小破片資料(図示、未分類)で、数字は個体数を示す（坏においては各々1類欄に表示)。□は若干量の小破片資料(図示せず、未分類)の存在を示す(坏においては各々1類欄に表示)。〕

第1群

ＳＩ229住居跡出土土器。須恵器Ａ坏を主体に、須恵器Ｂ坏を混じえ、土師質土器坏は小片が若干量出土するのみである。土師器は大型甕（図面12－4）１点がある。

須恵器Ａ坏は１類（図面12－6・8・9・12）、２類（図面12－5）、３類（図面12－7）、須恵器Ｂ坏は１類（図面12－10）などである。

第2群

ＳＩ230・231・232住居跡出土土器。須恵器Ａ坏並びに同Ｂ坏を主体に、土師質土器坏を若干混じえる。また、土師器小形坏、埦がみられる。

ＳＩ230住居跡には、須恵器Ａ坏１類（図面15－2）、同Ｂ坏２類（図面15－1・3）、土師質土器坏３類（図面15－5）などがあり、ＳＩ232に同じく、土師器坏・埦・甕類が小片のみしか出土していない。[94] また、東遺光ケ丘１かと思われる灰釉陶器埦（図面15－7）が伴出している。

ＳＩ231住居跡には、須恵器Ａ坏１類（図面16－6・8・9・10）、同Ｂ坏（図面16－13、図面16－11）、土師質土器坏５類（図面16－12）などの他に土師器がある。坏（図面16－1）は粗雑なつくりで、外面口縁を指頭調整、下端に横位のヘラケズリを施し、粘土紐巻き上げもしくは輪積み痕が明瞭に残されている。図面11－1、図面23－1に共通する。埦は高台付で、内面から口縁にかけてを黒色処理し、ヘラミガキを施すもので、体部外面下半には横位もしくは斜位の細かなヘラケズリがなされる。甕は、小形で部厚なもの（図面16－4・5）と大形で薄手のもの（図面16－3）がある。

ＳＩ232住居跡においては、須恵器Ａ坏１類（図面20－2）、同４類（図面20－1）の外、土師質土器１類（図面20－6）などがあり、須恵器Ｂおよび土師器を欠いている。

第3群

ＳＩ228住居跡、ＳＫ546土坑出土土器。須恵器Ａ坏・埦を含まず、須恵器Ｂ坏・高台付埦、土師質土器坏を主体に、土師器坏・埦などを伴出する。

ＳＩ228住居跡では、須恵器Ｂ坏２類（図面11－7）、同高台付埦（図面11－10）、土師質土器坏２類（図面11－8・9）、３類（図面11－6）、土師器小形坏（図面11－1）、内面を黒色処理しヘラミガキを施す高台付埦（図面11－2・3）、大形の甕（図面11－5）の外、東遺大原２かと考えられる灰釉陶器埦が伴出している。

ＳＫ546土坑においては、須恵器Ｂ坏１類（図面23－12）、同３類（図面23－13）、同高台付埦（図面23－4）、土師質土器坏３類（図面23－10）、４類（図面23－11）、６類（図面23－9）、土師質土器高台付坏（図面23－14・15）の外、土師器小形坏（図面23－1）、内面黒色処理し、ヘラミガキを施した坏（図面23－2）、技法・形態など図面23－2に似るも黒色処理せずヘラミガキを施さない坏（図面23－3）、部厚な小形甕（図面23－6・7）、大形、部厚で体部外面に指頭調整痕を明瞭に残す甕（図面23－5）などがある。

なお、図面23－6の小形甕の底部には糸切り痕を残す。

(5) 土器群の変遷と時期

次に土器群の変遷について検討する。遺構の重複関係はないので、各器種の変遷や共伴関係などから推測せざるを得ない。

まづ、須恵器A坏をみると、ほぼG5窯式に対比され得るものを主体として1・2群に多く存在し、3群に若干量あるのみなので、その消長より1・2群→3群と変遷すると思われる。次に須恵器Bをみると、坏は1～3群にみられるが、3群において高台付埦がみられる。高台付埦は四中土器群分類第4群にみられ、同群中のSI 17住居跡出土資料に近似している。即ち、断面方形の部厚く短い高台を有し、体部はほぼ直線的に開く器形である。従い須恵器Bの消長より1・2群→3群の推測が成り立つ。次に土師器坏・埦をみると、小形で粗雑な坏や内面黒色処理した高台付埦などが2・3群に存在しており、これらは四中土器群分類第5群に出現する。このことより1群→2・3群と推測される。さらに、土師器甕においては、2群・3群に小形で部厚なタイプが存在しており、同種のものは四中土器群分類の第4群にみられ、それ以前にはみられないことから、1群→2・3群とすることができよう。なお、土師質土器坏については今回報告資料においてその変遷を明確にし得ない。ただし、その出土量をみると、小片が若干量出土する第1群から第2群、第3群と順に漸増しており、第3群ではその占める位置がやや主体的になる。全体量が僅少なので俄かに断定できないが、上述した土師質土器の消長よりみて、そのあり方は土器群の変遷にほぼ対応するものと思われる。

以上を綜合すると、各土器群は、1群→2群→3群の順に変遷するものと考えられる。勿論その内容からみて、相互に密接な関連を有していることが推察される。

これを検証するに、灰釉陶器の共伴関係と住居跡間における接合資料があるので触れておく。

灰釉陶器は破片資料であるが、第2群SI 230住居跡より東濃光ケ丘1かと思われる埦が1点、第3群SI 228住居跡より東濃大原2かと思われる埦が1点出土しており、灰釉陶器の編年序列[07]と矛盾しない。

住居跡間において、出土遺物に次の10例の接合資料が得られた。〔土師器埦　SI 228住居跡覆土（図面11－2）とSI 230覆土〕、〔女瓦　SI 229住居跡覆土とSI 232住居跡カマド他（図面22－3）〕、〔男瓦　SI 229住居跡覆土下層（図面13－1）SI 232住居跡覆土〕、〔須恵器A坏　SI 229住居跡覆土（図面12－6）とSI 232住居跡覆土〕、〔女瓦　SI 229住居跡カマド他とSI 232住居跡覆土〕、〔男瓦　SI 229住居跡覆土とSI 230住居跡覆土〕、〔土師器甕　SI 230住居跡覆土とSI 231住居跡覆土〕、〔男瓦　SI 230住居跡覆土とSI 231住居跡2次貼床土内他（図面18－1）〕、〔男瓦　SI 230住居跡覆土とSI 231住居跡入口部内、1・2次床直他（図面18－2）〕、〔土師質土器坏　SI 230住居跡覆土とSI 231住居跡覆土とSI 232住居跡覆土（図面20－6）〕これらを先の土器群の変遷と照合すると、特に矛盾する点はない[08]。

群	※ 四中土器群分類 遺構	土器の消長	本報告土器群の位置
1	SI 8・11 19・20	G 2 5 窯式	
2	SI 15 ↓ SI 16	G 5 窯式	第1群 第2群
3	SI 1・4・12 SI 14・18 ↓ SI 9	須恵器B坏出現 土師質土器坏伴出	第3群
4	SI 3・7・10 ↓ SI 2・17	須恵器A坏・埦伴出しない 須恵器B高台付埦出現	
	SK 8		
5	SI 5	土師器羽釜出現	
6	SI 13 SK 9	土師質土器皿型土器出現	

第3表　四中土器群との対比

（※西脇1980：註(4)1にもとづき、著者作成。太線は比定される土器群の位置を示し、細線は関連を有する土器群の位置を示す。）

最後に、各土器群と四中分類の土器群とを対比させ、その編年的位置付けを考えてみたい。（第3表）

まづ第1群であるが、須恵器A坏を主体に、須恵器B坏を混じえることやその内容よりみて、ほぼ四中土器群分類の第3群に比定されよう。[8]

次に第2群をみる。須恵器B坏の内容や須恵器A坏の伴出などよりみて四中土器群分類第3群に相当するものと思われる。が、SI231住居跡に僅かに伴出する土師器をみると、同第4群、第5群、並びに第4群と第5群の中間とされるSK8土坑出土土器に各々関連することが伺える。即ち、土師器小形甕は同第4群のものに、土師器小形坏は同第5群のものに、[9]土師器高台付埦はSK8土坑出土のものに各々近似する。加えて、土師質土器坏の内容や若干量を伴出するそのあり方からみて、同第3群及び第4群との関連が指適できる。そこで第2群は、四中土器群分類第3群にほぼ相当し、同第4～5群に関連する土器群とすることができる。[10]

第3群は、須恵器B坏や高台付埦などからみて、四中土器群分類第4群に近似する内容を有する。土師質土器坏の内容や主体的位置を占めるそのあり方は、SK8土坑出土土器群におけるそれに共通する。さらに土師器坏・埦は四中土器群分類第5群のものに共通しており、同群に特有の羽釜の存在を欠くも同群とのやや強い関連が伺える。[11]従い、第3群は、四中土器群分類の第4群から第5群にほぼ相当するものとし得る。

今回の資料中には年代の拠りどころとなるものは出土していない。従って、各土器群の時期については、四中土器群分類における見解を転記してこれにかえたい。即ち、四中土器群分類第3群は10世紀後半～11世紀中葉、第4・5群は11世紀後半としている。これによれば、本報告第1～3群の土器群は、総体として10世紀後半から11世紀代の土器群とすることができよう。

なお、検出遺構の時期も、ほぼこれらの土器群の示すところとされよう。

註(1)　須恵器と土師器の中間の土器群で、須恵器と同じ製作技法を有し、酸化焔焼成である。酸化焔焼成須恵器に似るも、胎土等をみると"土師質"である。ここでは、服部敬史氏の概念規定を使用し、"須恵器でもなく、また土師器とも異なる類型を便宜的に設定しておき、先例にならって「土師質土器」という名称"（服部1982）でとりあつかう。なお、福田健司氏は、これらを須恵器の系統ということで"須恵系土師質土器"（福田1982）としている。

a.服部敬史　1982「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』第1号

b.福田健司 1982「第Ⅳ章 出土遺物の概要」『日野市落川遺跡調査概報Ⅱ』

(2) 小出義治他 1978『歴史時代土器の研究Ⅰ』—東日本に於ける土器編年—

(3) 服部敬史・福田健司 1981「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号

(4) 主なものとして下記がある。当調査会においても西脇俊郎氏を中心にg～iの見解を発表している。

a.高橋一夫 1976「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』第13・14号

b.服部敬史 1975「Ⅵ.3.土師器を出土する住居址のいくつかの問題」『下寺田・要石遺跡』

c.河野喜映 1976「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論 —歴史時代を中心として—」『神奈川考古』第1号

d.福田健司 1978「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻第3号

e.池上 悟 1979「神明上遺跡出土の歴史時代土器に就いて」『日野考古研究』第2号

f.浅野晴樹 1980「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第2号

g.西脇俊郎 1977「Ⅳ出土遺物」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅱ』

h.西脇俊郎・山口晨一 1980「Ⅲ武蔵国府・国分寺跡出土土器の変遷（試案）」『文化財の保護』第12号 —特集武蔵国府と国分寺

i.西脇俊郎 1981「Ⅵ.1.出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ』

(5)a.服部敬史・福田健司 1979「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号

b.服部敬史 1980『八王子市南部地区の遺跡 —東京都八王子市宇津貫町およびその周辺 所在の遺跡分布調査報告』八王子市南部地区遺跡調査会

c.前出 註(3)

d.服部敬史 1981 A『南多摩窯址群 —御殿山地区62号窯址発掘調査報告書』八王子バイパス建水遺跡調査会

e.服部敬史 1981 B「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨』愛知県陶磁資料館

f.服部敬史 1982 A「東京都八王子市大法寺翼遺跡の調査」『神奈川考古』第13号

g.服部敬史 1982 B 前出 註(1)a.

(6) 坂詰秀一 1971『武蔵新久窯跡』

(7) 前出 註(1)a による。

(8) 当調査会における成果の発表（前出 註(4)h・i）や服部敬史氏による見解（前出 註(1)a）などがある。

(9) 前出 註(4)i

(10) これらの諸特徴よりみて、日野市落川遺跡第18A号住居跡出土の"須恵系土師質土器"（前出 註(1)b）とは趣きを異にする。落川例はG5窯式期とされ、土師質土器の出現としている。今回報告する土師質土器坏の類は、武蔵国府大沢ビル地区S117出土資料（山口他 1979）中にみられ、これに共伴する須恵器は、"G14窯式の典型的なもの"（服部 1982 前出 註(5)g）とされるので、少なくともG14窯式期には存在していることが知られる。

山口晨一他 1979『武蔵国府の調査』Ⅶ（大沢ビル建設地の調査）

(11) 図面16－12に代表されるように、土師質土器とした中に酸化焔焼成須恵器の胎土・色調等に近似するものがあり、分類に苦慮した。本稿では、胎土・色調の点と他類にみられる形態等の特徴を有していることから、一応土師質土器として扱った。これらの存在は、酸化焔焼成須恵器と土師質土器の概念規定の問題等に強く関わっており、今後の大きな課題といえる。

(12) 今回報告資料→武蔵国府高木ビル地区S155出土資料（山口晨一他 1979）→ 武蔵国分寺府中公共下水道地区S119住居跡出土資料（前出 註(4)h）と変遷するものと思われる。

法量の変化をたどると次第に小形化する傾向を指摘できる。仔細にみると、今回報告資料においては、口径

11～12.5㎝、底径5～6㎝前後であり、器高4～5㎝前後であり、口径と底径の法量比が1/2～1/2.5、径高指数（器高/口径×100）が35～40にまとまる。次のSI55住居跡になると、口径9.5～11㎝、器高3㎝前後で、口径と底径比1/2前後、径高指数は30～35となり、口径と器高が小さくなっていることが判る。SI119住居跡になると、さらに小形化し、風型土器と呼べる器種が出現する。

山口辰一他　1979　『武蔵国府の調査』Ⅸ（府中高木ビル建設地の調査）

(13) 川上　元　1978「土器系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学』長野県考古学会

(14) 服部敬史氏によれば（服部　1982　前出　註(1)a），低い高台のものから、武蔵国府高木ビル地区SI55資料にみられる様な高い高台のものへと、高台部の発達がとらえられるとしている。これに従えば、本報告のものが四中SI7住居跡のものより後出的とすることができる。

(15) SI228・229・230・232住居跡出土土器群は、出土状況や接合状況よりみて各々ほぼ纏まりのある一群とすることができよう。SI231住居跡においては、新旧の2時期があり、図面16－5（土師器甕）、図面16－10（須恵器A坏）、図面16－11（須恵器B坏）の3点が旧期（南カマド、一次床他）に属するが、その内容に大きな相違はないので、ここでは一応一括して扱う。SK546土坑出土土器群については、図面23－6（土師器甕）が底面直上の破片と上層出土片が接合しており、ほぼ纏まりのある一群とすることができる。

(16) SI230・232住居跡における出土遺物は少なく、カマド付近に集中せず、住居中央にまとまる。接合資料においても同じである。さらに完形資料がなく、多くは小破片資料である。土師器はほとんど出土せず資料的に不備があるものと見られる。ここでは、一応、他器種の組成を重視して、一群としてとり扱う。

(17) 楢崎彰一・斎藤孝正　1981「猿投窯編年の再検討について」『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨』愛知県陶磁資料館

なお、施釉陶器については名古屋大学考古学研究室の斎藤孝正氏・守屋孫史氏に実見していただき、ご教示を得た。

(18) SI229とSI232、SI230とSI231の間に各々4例あり、相互に近接した関係を有していることが伺える。

(19) 四中土器群分類第3群は、さらに細分の可能性が指摘され、SI14・18住居跡出土土器などG5第式に近い器形あるいは法量（大形）をもつ須恵器B坏などから、全体に小形化するSI9住居跡出土土器への変遷が認められるとしている。本報告第1群の須恵器B坏は前者に、第2群のそれは後者に各々近似するものと見られる。

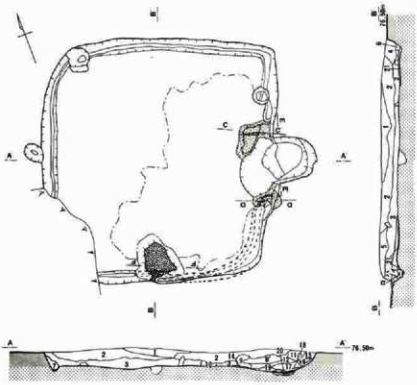
(20) 四中分類の土師器坏Ⅴ～Ⅶ類は、製作技法によりⅤ・Ⅵ類からⅦ類への変遷が指摘されている。Ⅴ類では体部外面を全面統位のヘラケズリ（口縁部は横ナデ、以下同じ）、Ⅵ類では上部を横位、下半に縦位のヘラケズリを施している。Ⅶ類では一部省略されて、体部下端に横位のヘラケズリを施すのみとなる。同様のことは高台付境でも認められ、体部外面をヘラケズリするものからこれを省略するものへ変化するとされる。四中土器群分類第4群には坏Ⅴ類があり、同第5群には坏Ⅶ類と高台付境の後者がある。SK8土坑では坏Ⅶ類と高台付境の前者があり、これを介在させることにより第4群と第5群の関係がスムースになるものとしている。

(21) 資料的に混在しているものなのか、あるいは、こうした土器群が存在するのか、あるいは他の要因によるものか、今後の検証に待ちたい。このことは第3群についてもいえることである。なお、土師器坏、境の変遷については、第3群における事象もあることから、再検討を要するものと思われる。

(22) 四中土器群分類第5群とされたSI5住居跡出土土器群中は、土師質土器を含まず、これを欠く資料とすることができ、これを埋める土師質土器と本稿第3群土器中の土師質土器との関連が今後の課題となろう。

図　　面

図面1　SI 228住居跡実測図



住居跡堆積土

1　黒褐色土(ローム粒少量含む)
2　〃　(　〃　)
3　〃　(ローム粒多く含む)
4　〃　(ローム粒少ない)
5　〃　(黒色味にややヌ(　)
6　暗茶褐色土(締まりやや弱い、固溝)
7　〃　〃　〃
8　黒褐色土(焼土・粘土粒を少し含む)
9　暗茶褐色土(粘土粒多い)
10　〃　〃
11　黒褐色土(焼土・粘土粒多く含む)
12　〃　(焼土粒やや多く含む)
13　暗黄褐色土(ローム・粘土粒多い)
14　黒褐色土(ローム粘土粒少量含む)
15　〃　(細まりあり・カマド構築土)
16　暗赤褐色土(焼土多量に含む)
17　黒褐色土(焼土多い・炭化物含む)
18　暗灰褐色土(焼土・粘土粒多く含む)
19　赤褐色土(焼土多量に含む)
20　暗黄褐色土(ロームブロック)
21　暗茶褐色土(ローム・茶褐色土を多く含み締まりあり、貼床土)

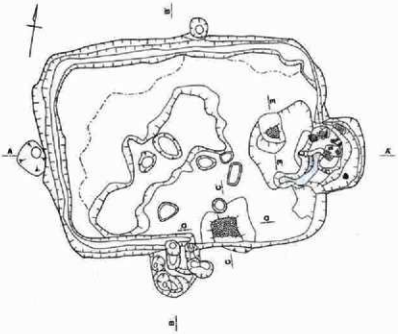
入口部構築土

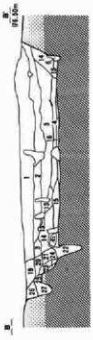
イ　黒褐色土(固く締まる)
ロ　〃　(茶褐色味を帯びる、締まりあり)
ハ　暗黄褐色土(ロームブロック)
ニ　暗茶褐色土(ローム多く含む)
ホ　黒褐色土(ロームやや多く含む)

カマド構築土

a　暗黄褐色土(ローム多く含む)
b　黒褐色土(焼土粒少量含む)
c　暗黄褐色土(粘土多い)
d　暗褐色土(茶褐色土多く含む)
e　黒褐色土
f　暗黄褐色土(ローム多い)
g　黒褐色土(焼土・粘土粒少量含む)
h　暗黄褐色土(粘土多い、焼土粒少量含む)
i　黒褐色土(焼土粒少量含む)
j　〃　(焼土粒少量含む)
k　暗茶褐色土(ローム漸移層崩壊土か)

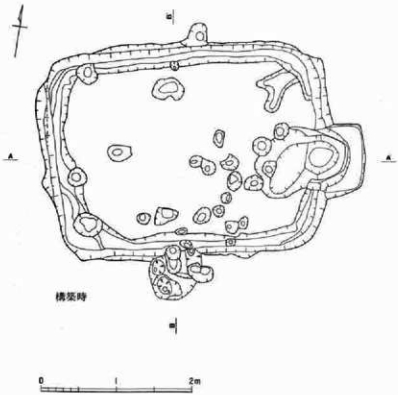
図面2　SI 229住居跡実測図





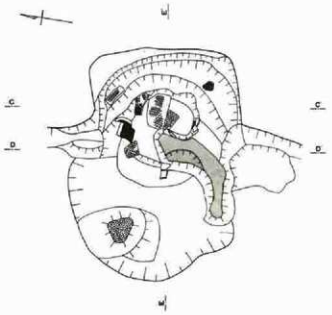
南壁下硬質面
a　黒褐色土(ローム粒少量含む,固く締まる)
b　〃　(ローム粒やや多い,固まりあり)
c　〃　(ローム粒多い,間漏)
d　暗黄褐色土(ピット)

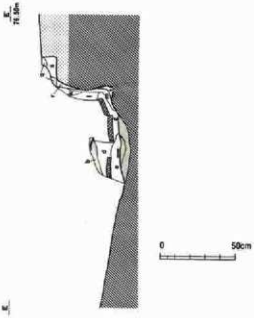
カマド前硬質面
a　黒褐色土(〜住居跡7層,固く締まる)
b　〃　(〜住居跡7層)
c　〃　(〜住居跡8層)
d　〃　(炭化物少量含む)

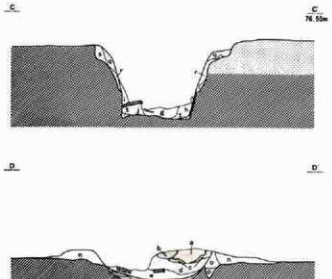


1　黒褐色土(ローム細粒やや多く含む)
2　〃　(ローム粒多く含む)
3　〃　(ローム粒多く含む)
4　〃　(ローム粒少ない)
5　〃　(締まりやや弱い)
6　暗黄褐色土(ローム多量に含む。間漏内)
7　黒褐色土(焼土粒少し含む)
8　〃　(焼土多く含む)
9　黒色土(ローム粒を多く含む)
10　〃
11　〃　(ローム・焼土・粘土粒やや多く含む)
12　〃　(〜10層、焼土粒少ない)
13　〃　(ローム粒多く含む)
14　〃　(ローム少し含む)
15　〃　(ローム少ない)
16　黒褐色土(粘床土)
17　粘　土
18　黄褐色土(ローム)
19　黒褐色土
20　〃　(ローム粒少ない)
21　〃　(ローム粒少ない)
22　〃
23　〃　(締まりあり)
24　暗黄褐色土(ローム多量に含む)
25　〃　(ローム粒少量含む)
26　〃　(〜20層、締まりやや弱い)
27　〃　(締まりやや弱い)

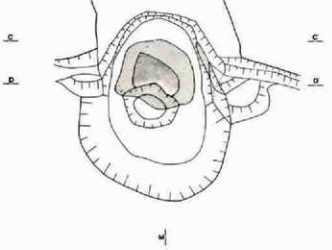
図面3　SI 229住居跡実測図

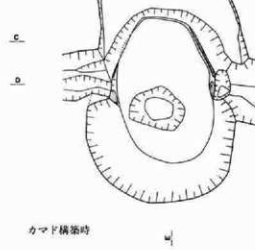






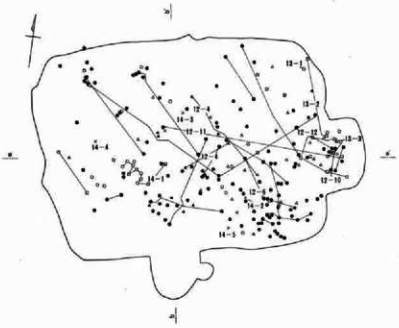
a　赤褐色土(焼土)
b　〃　(焼土多く含む)
c　黒褐色土(焼土粒少量含む)
d　黒色土(ローム・焼土・粘土粒少し含む)
e　暗灰褐色土(ローム・焼土粒・粘土粒やや多く含む)
f　〃
g　黒褐色土(ローム・焼土・粘土粒多く含む)
h　暗茶褐色土(ローム粒多い)
i　黒褐色土(締まりやや弱い)
j　暗茶褐色土(ローム、焼土少ない)
k　黒褐色土(茶褐色土をやや多く含む)
l　〃　(壁体のくずれか)
m　暗茶褐色土(ローム多い、壁体のくずれ)
n　黒褐色土(ローム粒、ロームブロックやや多い、構築土)
o　〃　(ローム粒、粘土粒やや多い、構築土)
p　暗茶褐色土(ローム粒やや多い、構築土)
q　黒色土(粘土粒若干含む、構築土)
r　暗茶褐色土(茶褐色土やや多く、締まりあり、構築土)
s　茶褐色土(やや固く締まる、構築土)
t　暗茶褐色土(壁のくずれか)



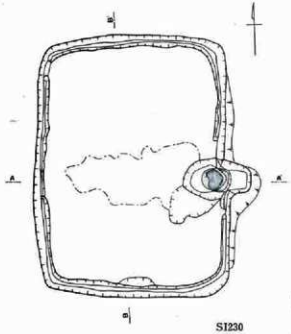


カマド構築時

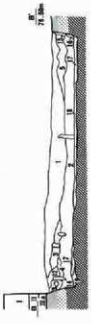
図面4　SI 229・230住居跡実測図

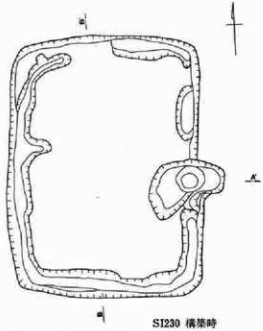


SI229遺物分布図

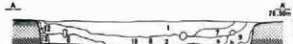


SI230





SI230 構築時



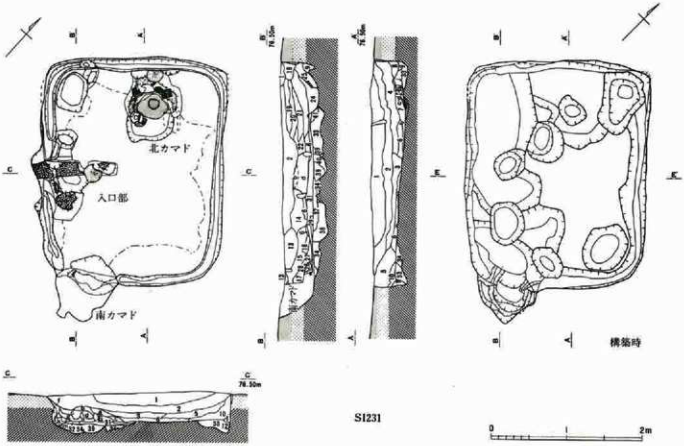
1　黒褐色土(ローム細粒少量含む)
2　黒色土(ローム粒・ブロック多く含む)
3　〃　(2層よりローム多い)
4　暗黄褐色土(ローム粒・ロームブロック多量に含む)
5　黒褐色土
6　暗茶褐色土(ローム粒多く含む)
7　黒褐色土 (ローム粒少ない)
8　〃　〃
9　暗茶褐色土(茶褐色土多く含む)
10　黒褐色土(地土粒を若干含む)
11　暗茶褐色土
12　茶褐色土
13　暗茶褐色土(ローム・茶褐色土多く含む)
14　暗黄褐色土(ロームを多量に含む)
15　黒褐色土
16　暗茶褐色土(ローム粒を多量に含む)
17　暗黄褐色土(粘床土、ローム、ロームブロック多い)
18　黒褐色土(粘床土、ローム、ロームブロック少ない)
19　黒褐色土(粘床土、ローム少量)
20　暗黄褐色土(粘床土、ローム粒多く含む)

図面5　SI 230・231住居跡実測図

a　赤褐色土(焼土)
b　黒褐色土(ローム粒を少量含む、火熱受ける)
c　暗褐色土(ロームを多く含む、火熱受ける)

SI230カマド

SI230遺物分布図



図面6　SI 231住居跡実測図

住居跡堆積土

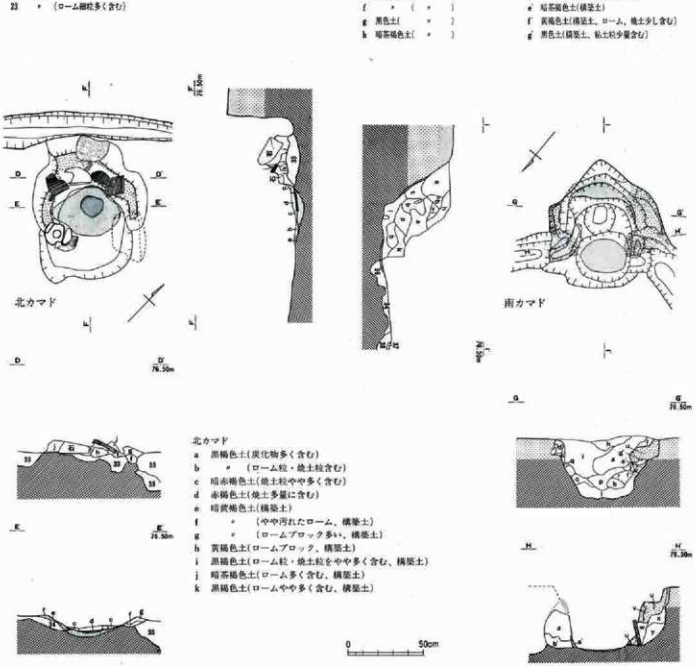
1　黒褐色土
2　〃
3　〃
4　〃　(ローム粒多い)
5　〃　(ローム粒少)
6　〃　(ローム粒・焼土粒少量含む)
7　〃　(焼土粒多く含む)
8　〃
9　黒色土(周溝内、ロームややあり)
10　〃
11　〃　(周溝内、ロームややあり)
12　黒褐色土(周溝内、ローム多い)
13　〃　(ローム多く含む)
14　〃　(ロームややあり含む)
15　〃　(粒土粒少量含む)
16　黒色土(粒土粒多い)
17　〃　(焼土粒少し含む)
18　黒褐色土
19　〃
20　〃　(ローム やや多く含む)
21　暗茶褐色土(ローム、ロームブロック多い)
22　黒褐色土
23　〃　(ローム細粒多く含む)
24　黒色土(ピット、焼土・炭化物少量含む)
25　〃　(ピット、ロームやや多く含む)
26　〃
27　黒褐色土(ローム粒やや多く含む)
28　〃　(粒土粒ややあり)
29　黒色土(2次貼床土)
30　黒褐色土(2次貼床土、ロームややあり含む)
31　黒色土(2次貼床土、ローム細粒少量含む)
32　暗黄褐色土(2次貼床土、ローム多く含む)
33　〃　(1次貼床土、ローム多く含む)
34　〃　(1次貼床土、ローム多く含む)
35　黒褐色土(1次貼床土、ローム多く含む)
36　黒褐色土(1次貼床土)
37　暗茶褐色土(1次貼床土、ローム多く含む)
38　黒褐色土(ピット、炭化物、焼土粒少量含む)
39　〃　(ピット、ロームやや多く含む)
40　〃　(ピット、ロームやや多く含む)
41　〃

入口部構築土

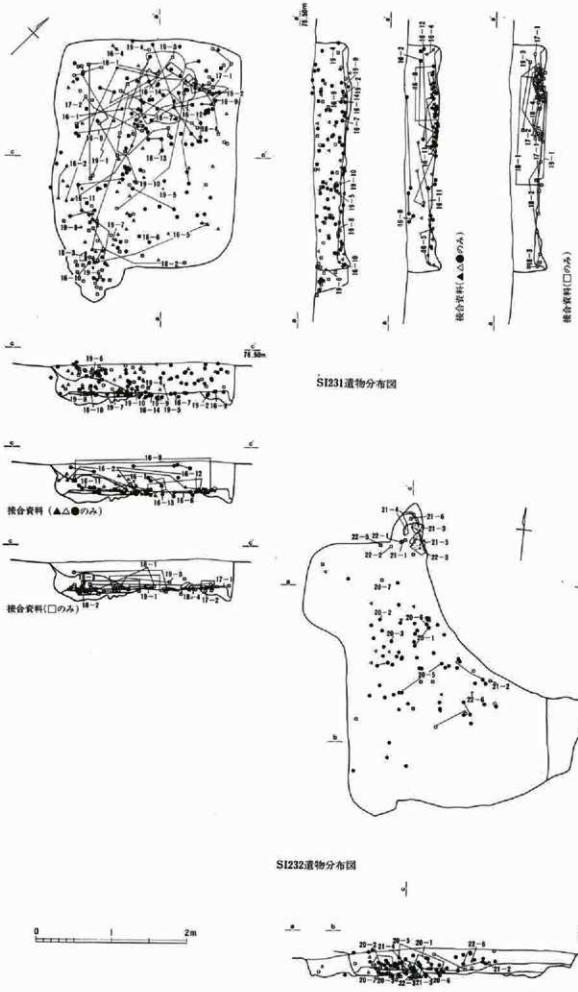
a　黒褐色土(ローム粒多く含み、固まり強い)
b　〃　(ローム少なく、固まり強い)
c　〃　(ローム少なく、固まり強い)
d　〃　(固まり、粘性強い)
e　〃
f　〃　(固く固まる)
g　〃　(ローム少量含む)
h　〃　(ローム少量含む)
i　〃　(ローム少量含む)
j　〃　(ローム細粒やや多く含む)
k　暗茶褐色土(ローム多く含む)
l　黒褐色土(ローム粒粒含む)
m　暗黄褐色土(ローム多く含む)

南カマド

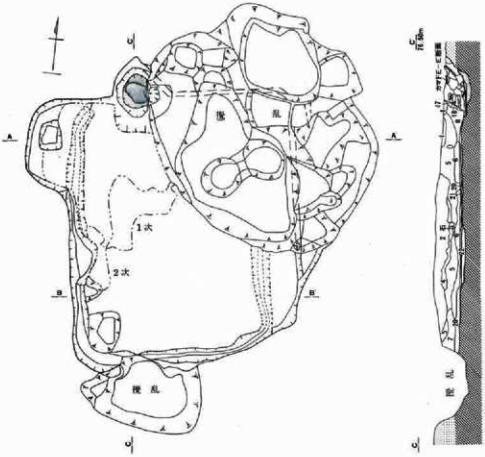
a　黒色土(構築土脆弱土)
b　灰褐色土(構築土脆弱土、粘土多く含む)
c　黒褐色土(構築土脆弱土)
d　黒色土(　〃　)
e　暗茶褐色土(　〃　)
f　〃　(　〃　)
g　黒色土(　〃　)
h　暗茶褐色土(　〃　)
i　黒褐色土(構築土崩壊土)
j　暗茶褐色土(　〃　)
k　黒褐色土(焼土粒含量含む)
l　〃　(焼土・炭化物やや多く含む)
m　暗赤褐色土(焼土・粘土・ローム粒やや多い)
n　〃　(焼土多い)
o　〃　(粘土・焼土やや多く含む)
p　黒褐色土(焼土・粘土やや多い)
q　〃　(焼土やや多い)
r　〃　(焼土・粘土やや多い)
s　〃　(焼土少ない)
t　暗赤褐色土(焼土・粘土多量に含む)
u　灰色土(構築土、粘土、やや硬い)
v　赤灰色土(構築土、粘土が焼け赤変)
w　暗灰褐色土(構築土、粘土少し含む)
x　黒褐色土(構築土、粘土少し含む)
y　黄褐色土(構築土、ローム を多く含む)
z　〃　(保築土、ロームブロック)
a'　暗灰褐色土(構築土、粘土多い)
b'　黒褐色土(構築土、ローム粗粒含む)
c'　黒色土(構築土)
d'　〃　(構築土、粘土多く含む)
e'　暗茶褐色土(構築土)
f'　黄褐色土(構築土、ローム、焼土少し含む)
g'　黒色土(構築土、粘土粒少量含む)



図面7　SI 231・232住居跡実測図



図面8　SI 232住居跡実測図



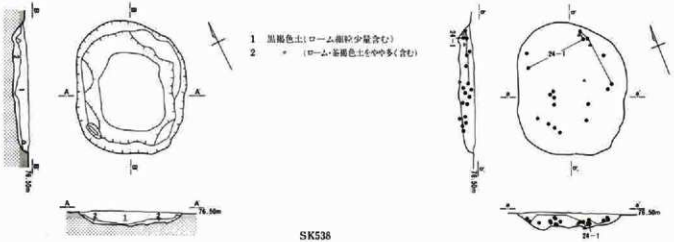
1　黒色土
2　黒褐色土
3　〃　（ローム粒やや多く含む）
4　〃　（焼土粒を多く含む）
5　〃　（ローム粗粒少し含む）
6　〃　（ローム粗粒やや多く含む）
7　暗茶褐色土(ローム・茶褐色土やや多く含む)
8　黒褐色土(粘土粒を少し含む)
9　〃
10　暗茶褐色土(ローム多く入る)
11　黒褐色土
12　暗茶褐色土(ローム・茶褐色土やや多く含む)
13　〃　（周溝、ローム多く含む）
14　〃
15　黒褐色土
16　〃　（ローム・茶褐色土を少し含む）
17　〃　（粘土粒少量含む）
18　暗灰茶褐色土(粘土粒、多く含む)
19　黒褐色土(周溝)
20　〃　（2次貼床土）
21　〃　（1次貼床土、ロームブロック含む）
22　暗褐色土(1次貼床土、ローム少量含む)

カマド
a　黒褐色土（ローム、焼土粒を少量含む）
b　〃　（ローム、粘土粒やや多く含む）
c　暗赤灰褐色土(粘土粒多く、焼土・炭化物少し含む)
d　暗褐色土(焼土粒少量含む)
e　暗赤褐色土(焼土粒多く含む)
f　赤褐色土(焼土)
g　黒褐色土(構築土崩壊土)
h　〃　（構築土崩壊土、ローム粒多く含む）
i　〃　（構築土崩壊土）
j　暗茶褐色土(構築土崩壊土、固く締まる)
k　黒褐色土(構築土崩壊土)
l　暗茶褐色土(構築土崩壊土、ローム細粒やや多い)

カマド

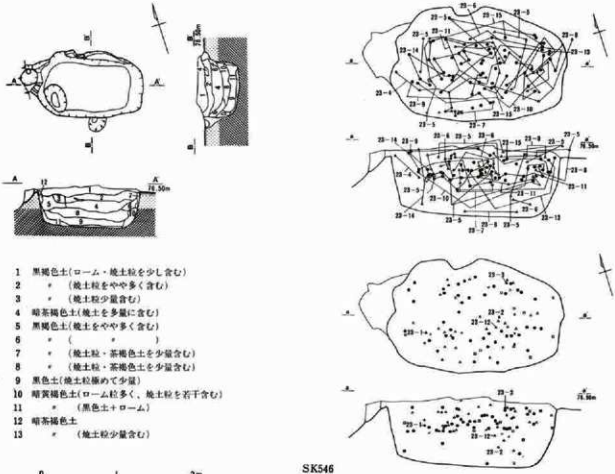
0　50cm

図面9　SK538・539・546土坑実測図



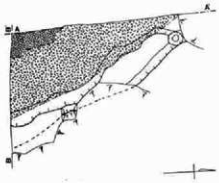
SK538

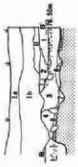
SK539



SK546

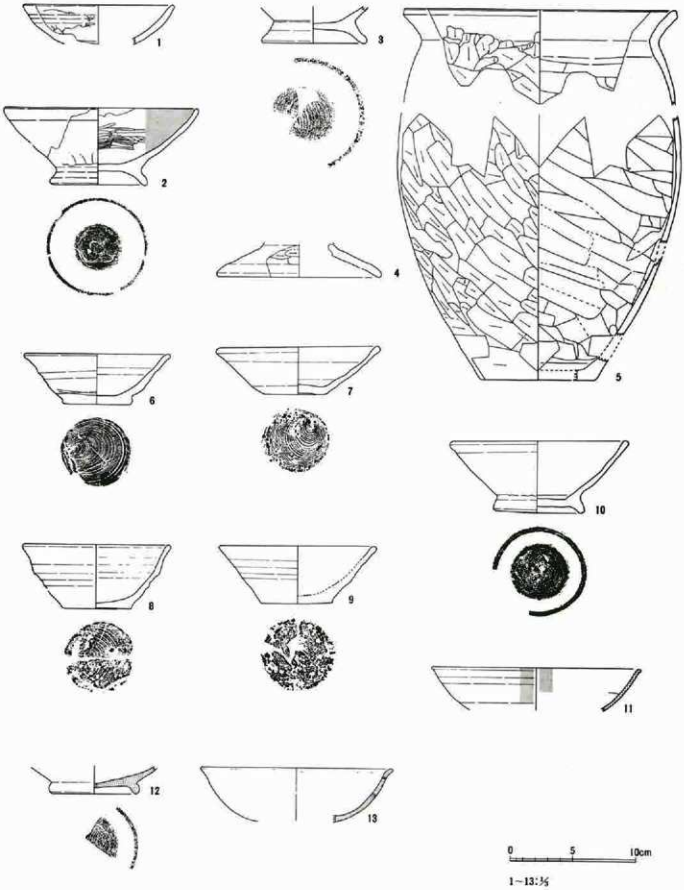
図面10　SX6道路状遺構実測図



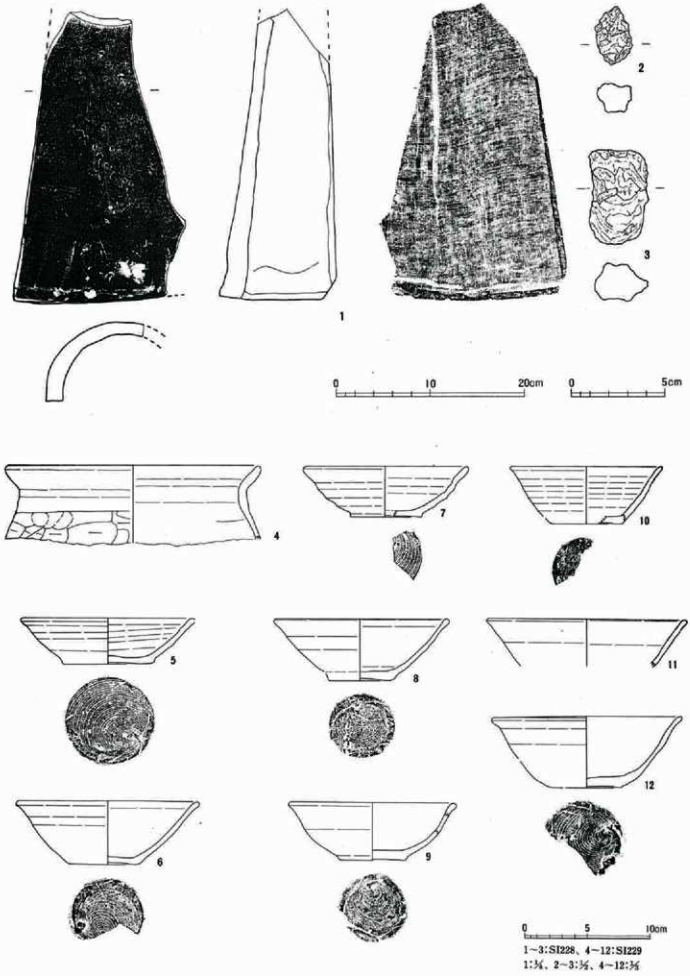


1　黒褐色土(Ⅱ層に似る、黒色味あり、覆土)
2　〃　(褐色土ブロック含む、覆土)
3　〃　(構築土、黒色味強い、固い)
4　〃　(構築土、3層に比べ黒色味、弱さ弱い)
5　〃　(構築土、4層より黒色味ややあり)
6　暗茶褐色土(構築土、3層＋ローム、茶褐色土、固い)
7　〃　(構築土、6層に似る、硬さりやや弱い)
8　〃　(構築土、茶褐色土やや多い)

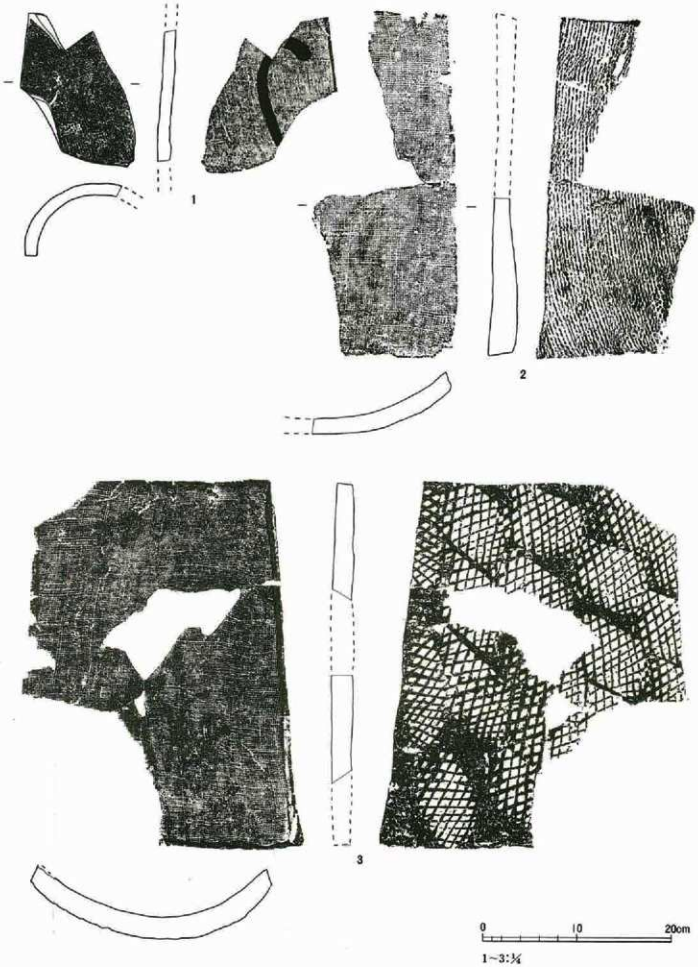
図面11　SI 228住居跡出土遺物



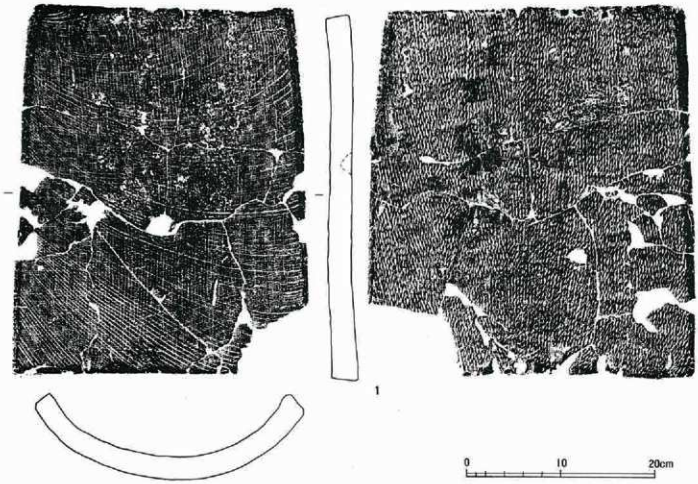
図面12　SI 228・229住居跡出土遺物

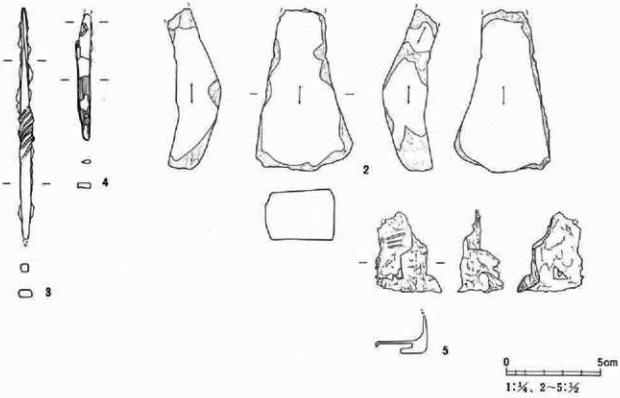


図面13　SI 229住居跡出土遺物

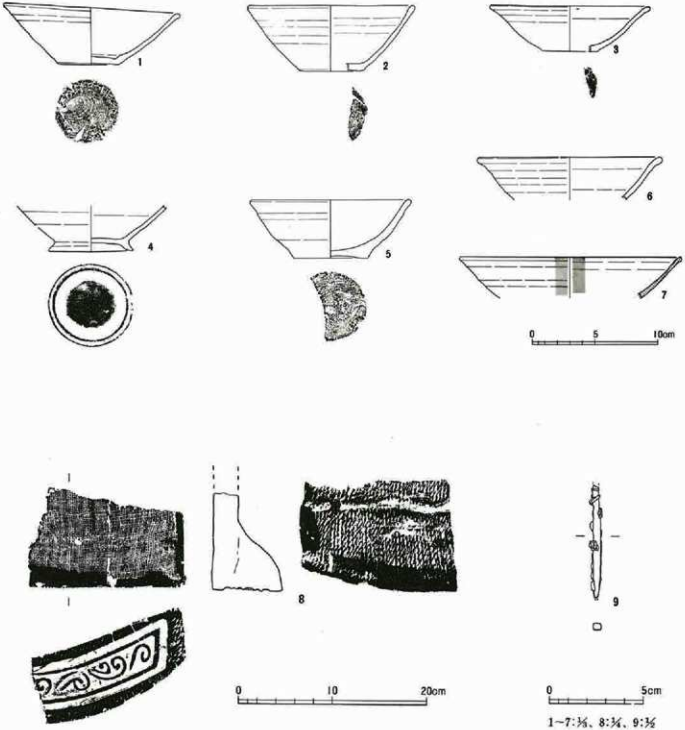


図面14　SI 229住居跡出土遺物



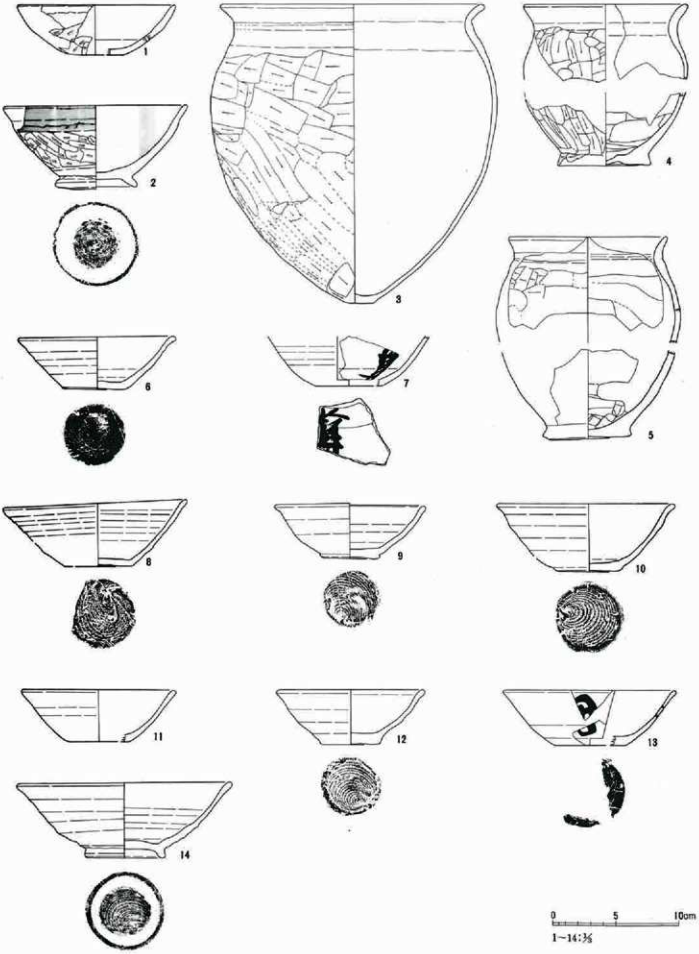


図面15　SI 230住居跡出土遺物

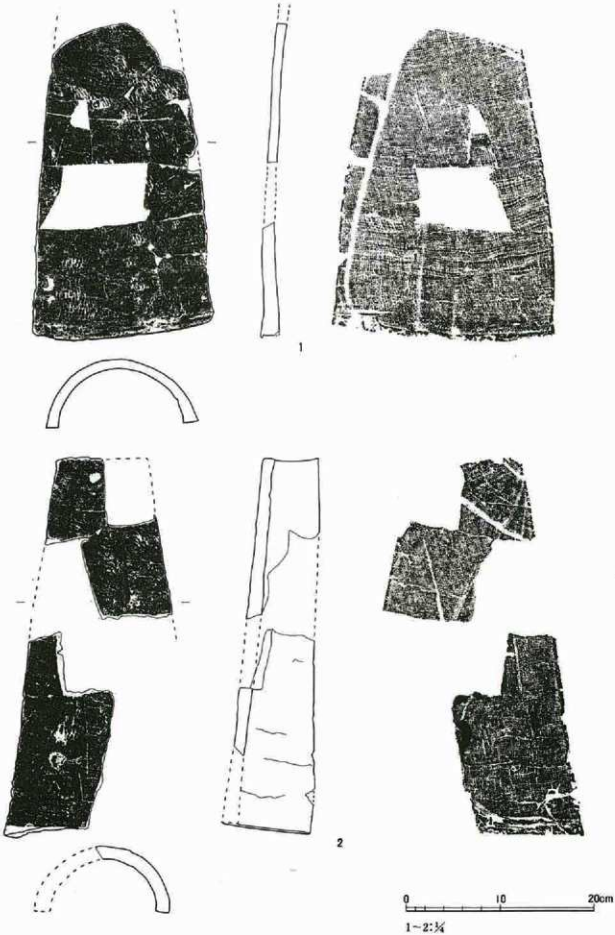


1～7:⅓、8:¼、9:⅓

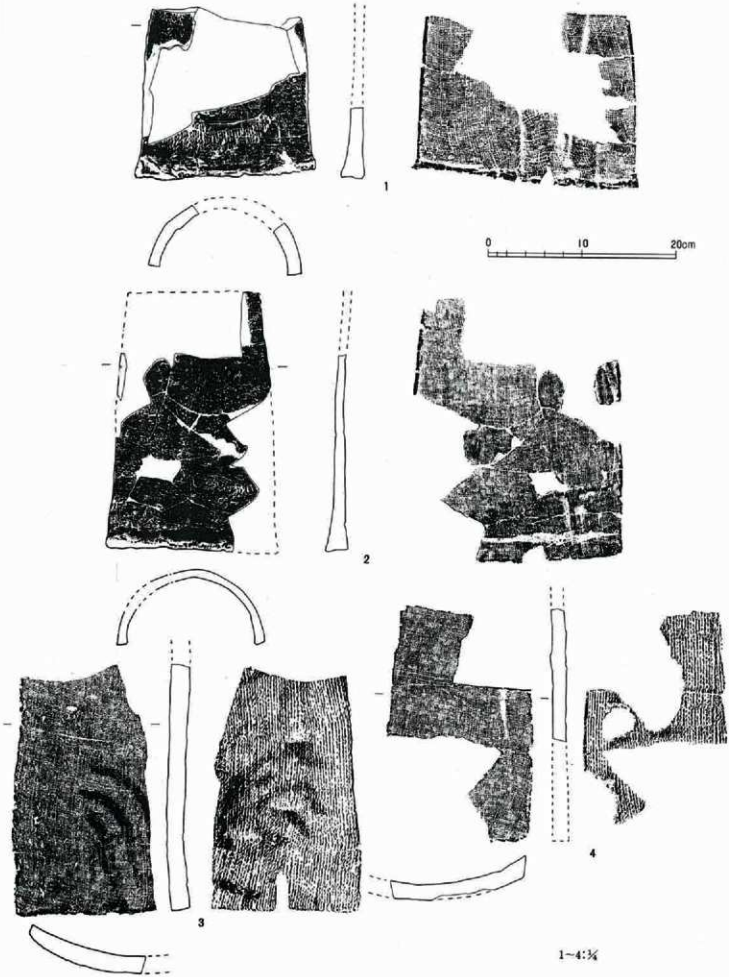
図面16　SI 231住居跡出土遺物



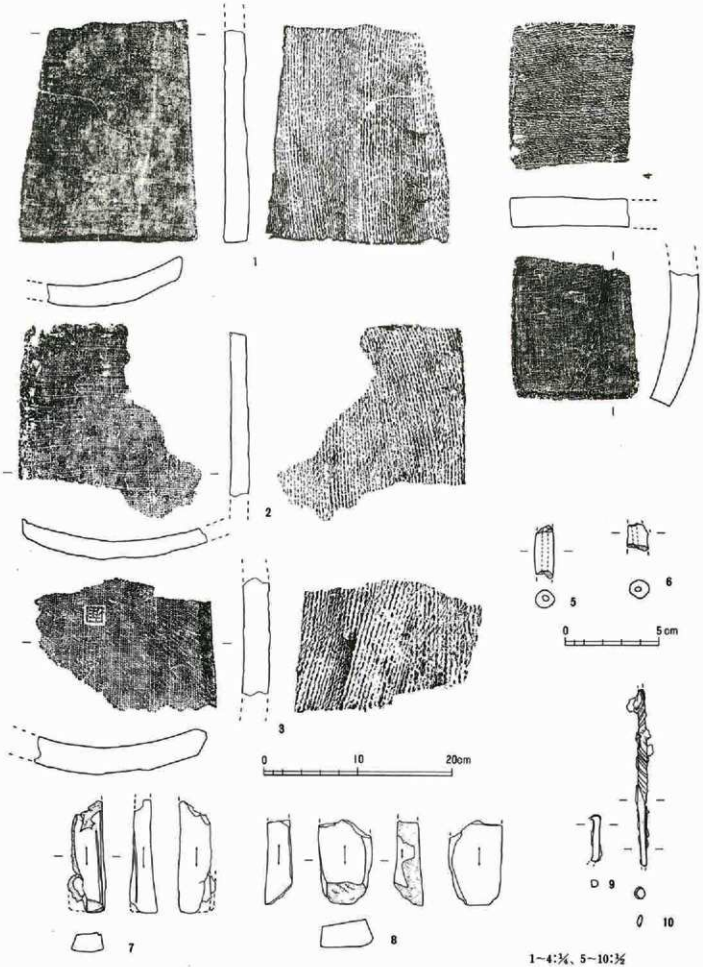
図面17　SI 231住居跡出土遺物



図面18　SI 231住居跡出土遺物

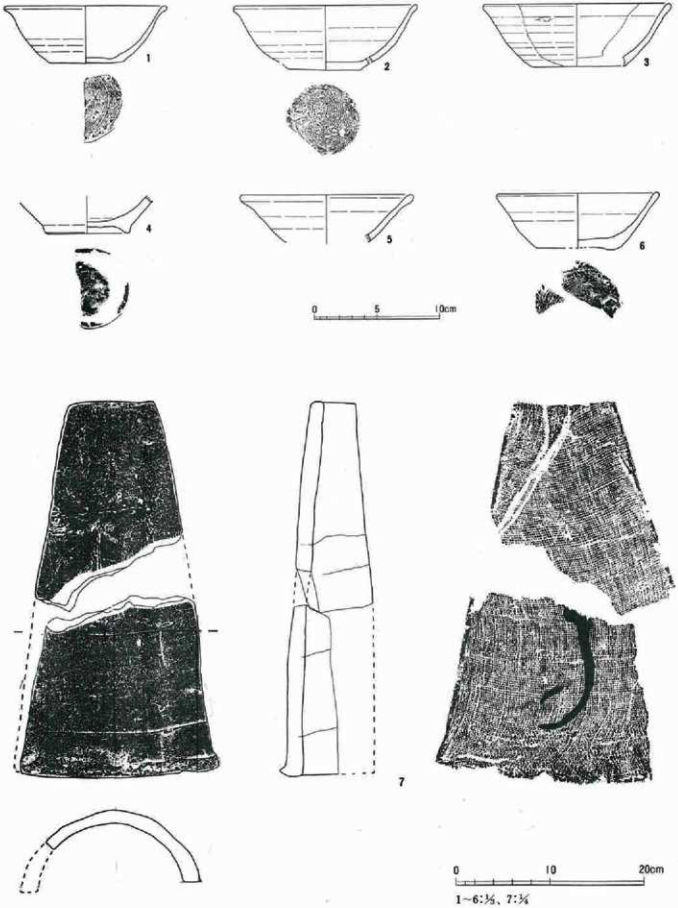


図面19　SI 231住居跡出土遺物



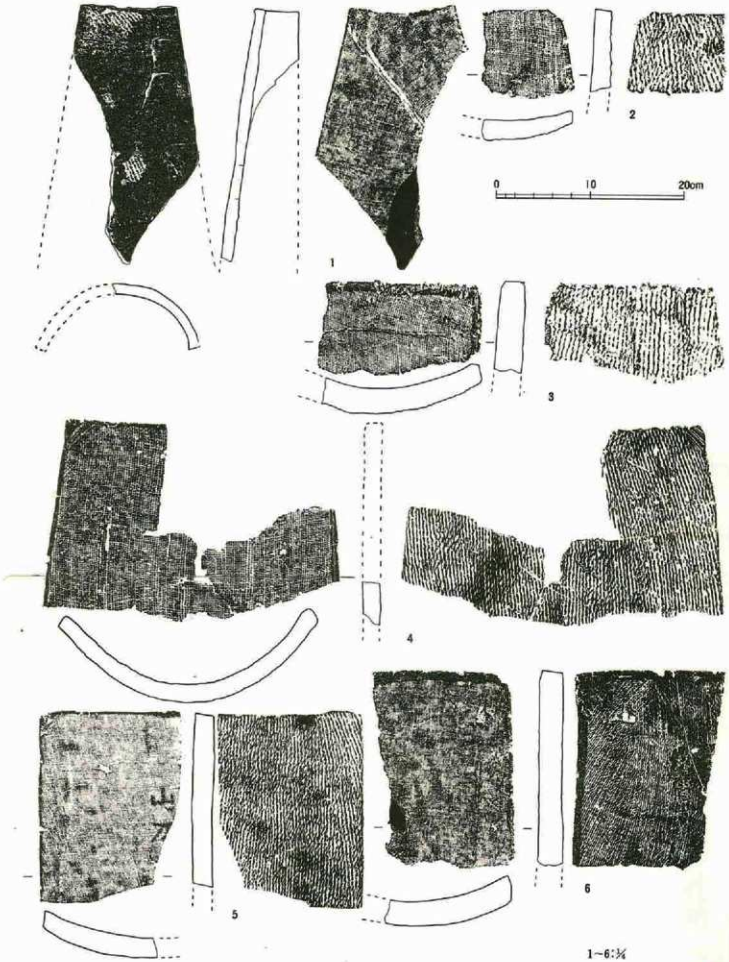
1~4:¼、5~10:⅔

図面20　SI 232住居跡出土遺物



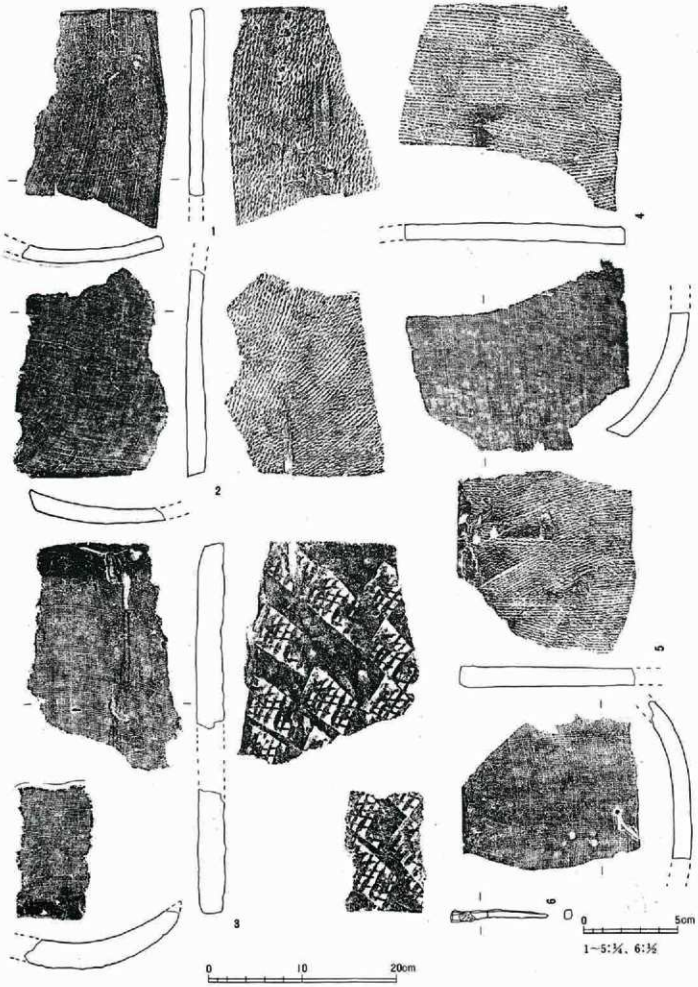
1~6:1/3、7:1/4

図面21　SI 232住居跡出土遺物

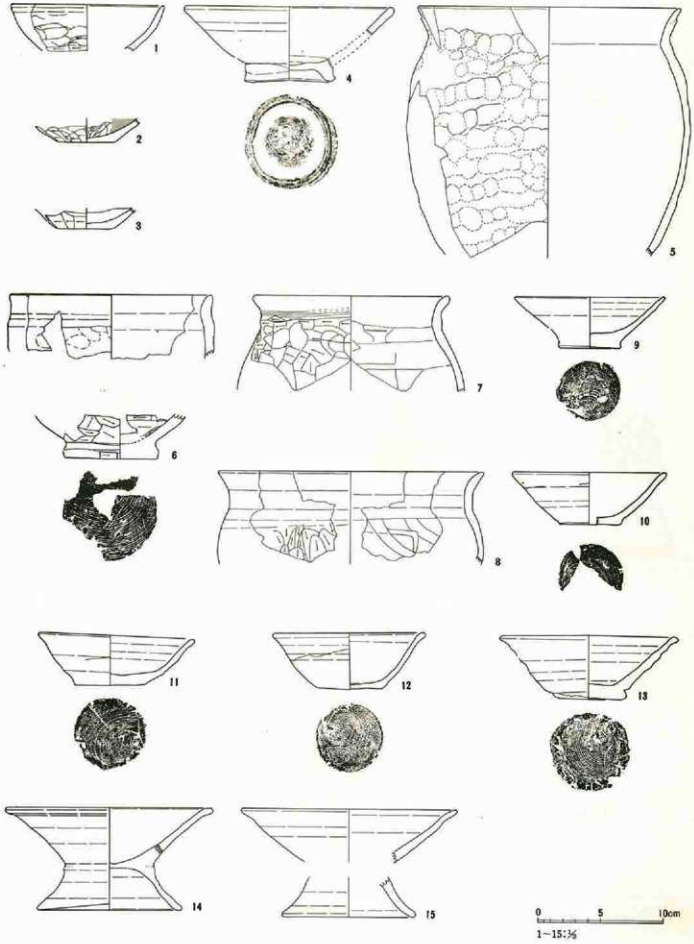


1~6:¼

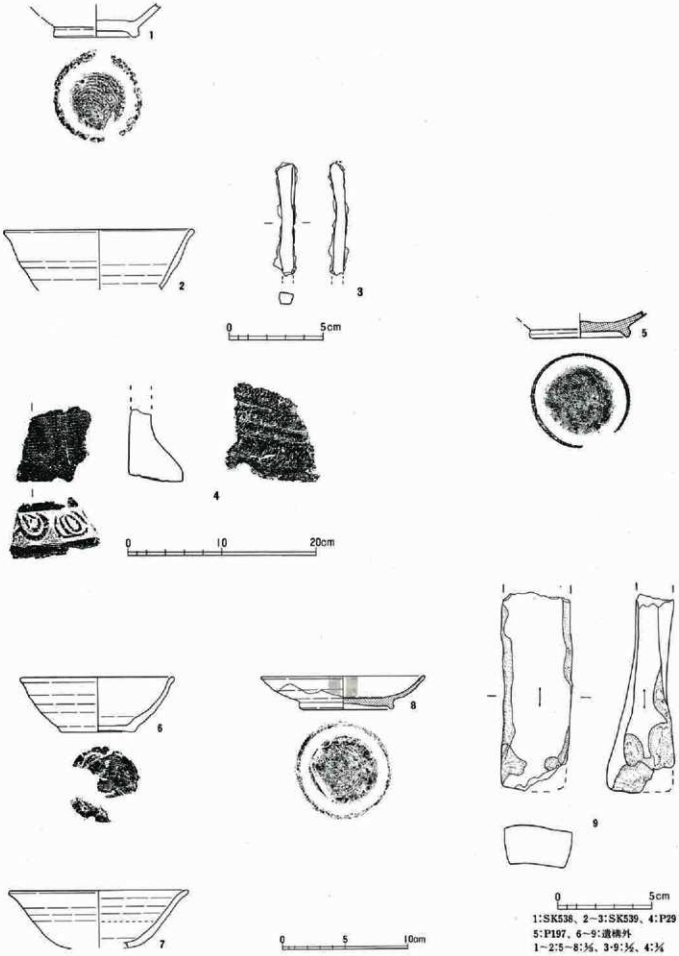
図面22　SI 232住居跡出土遺物



図面23　SK546土坑出土遺物

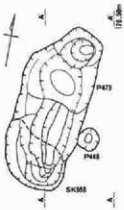


図面24　SK538・539土坑、P29・197、遺構外出土遺物



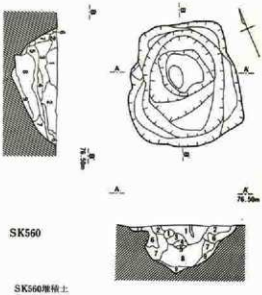
1:SK538、2～3:SK539、4:P29
5:P197、6～9:遺構外
1～2:5～8:⅓、3・9:½、4:¼

図面25　SK558・560・561・562土坑実測図



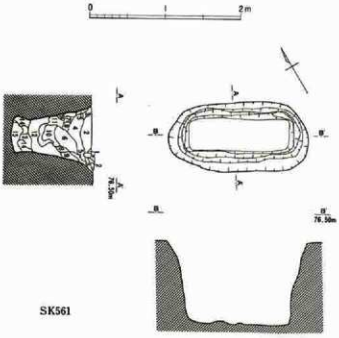
SK558

SK558堆積土
1　暗褐色土
2　黒色土(ローム少ない)
3　〃
4　〃　(ロームブロック少し含む)
5　〃　(ロームやや多く含む)
6　暗黄褐色土(ローム多量)
7　〃　(ローム多量に含む+黒色土少量)
8　暗茶褐色土(ローム やや多い)



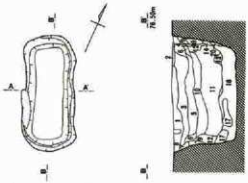
SK560

SK560堆積土
1　暗褐色土
2　〃　(1層よりやや明るい)
3　褐色土
4　暗茶褐色土
5　暗褐色土(ロームブロック少量含む)
6　茶褐色土(壁のくずれか)
7　暗茶褐色土(ローム細粒多く入る+ロームブロック少量含む)
8　暗褐色土(ローム細粒多く入る)
9　暗黄褐色土(ローム多量に含む)



SK561

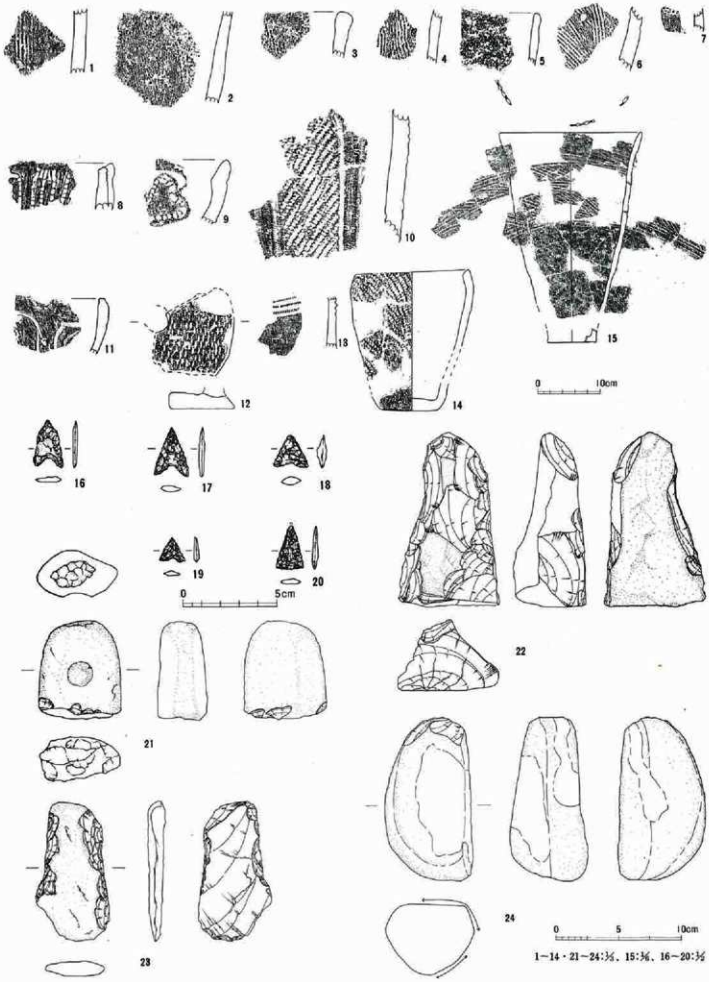
SK561堆積土
1　暗褐色土(Ⅲb層よりやや明るく、Ⅲc層よりやや暗い)
2　〃　(1層より暗い)
3　〃　(2層よりやや明るい)
4　〃　(2層より暗い)
5　褐色土(ローム やや多い)
6　黒色土(スコリア粗粒少量含む、ローム少量粒状に入る)
7　暗褐色土(6層よりローム粒やや多い)
8　黒色土(ロームブロックやや多い)
9　暗茶褐色土(ローム多い)
10　黒褐色土(ローム少ない)
11　暗茶褐色土(ローム やや多い)
12　〃　(ハードローム多量に入る)
13　暗褐色土(ローム やや少ない)
14　暗茶褐色土(ローム やや多い)
15　暗褐色土(ローム少ない)



SK562

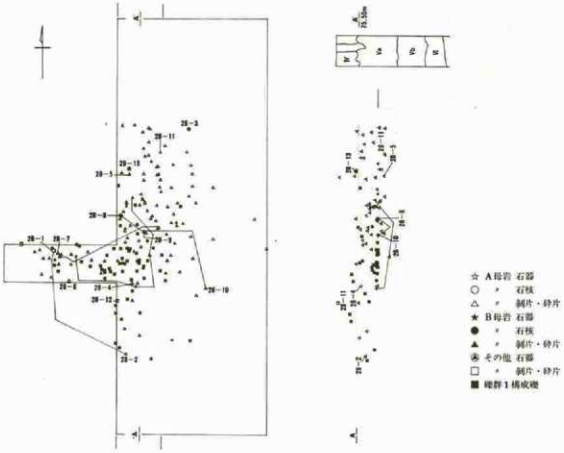
SK562堆積土
1　暗色土(Ⅲc層より若干暗い)
2　暗褐色土
3　〃　(5層に似る、やや明るい)
4　〃　(3層よりやや明るい)
5　〃　(11層にやや近い)
6　〃　(ローム少量含む)
7　〃　(ローム やや多い)
8　暗茶褐色土(ローム やや多い)
9　暗黄褐色土(ローム多量+黒色土少量)
10　黒色土(スコリア粗粒少し含む)
11　〃　(スコリア粗粒少し含む、10層より黒色味強い)
12　暗褐色土(ローム少量含む)
13　黒色土(11層+ロームブロック大)
14　暗褐色土(12層よりローム少なく、11層に近い)
15　黒色土(ハードローム多量に含む)
16　〃　(ローム少ない)
17　暗黄褐色土(ローム やや多い)
18　暗褐色土(ローム少ない)
19　暗茶褐色土(ローム やや多い)
20　暗黄褐色土(ローム多量)

図面26　縄文土器・石器

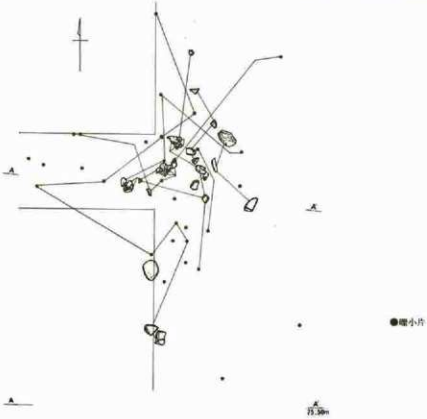


1～14・21～24:1/3、15:1/6、16～20:1/2

図面27　先土器時代ユニット・礫群1実測図



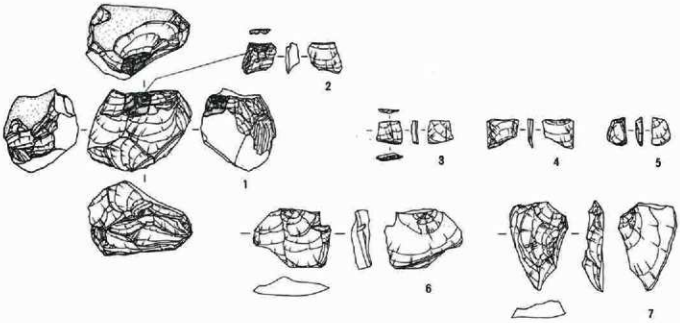
ユニット1 遺物分布図



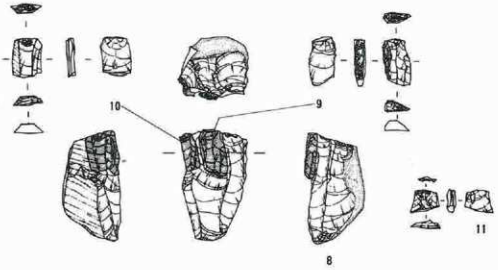
礫群1

0　50cm

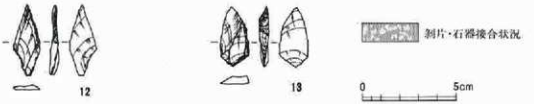
図面28　先土器時代石器



A母岩資料



B母岩資料



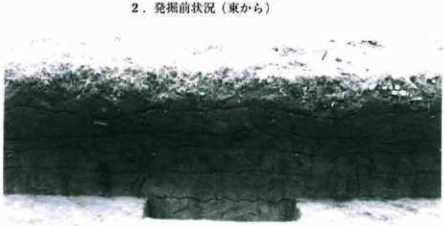
1～12:ユニット1，13:先土器調査区外
(Ⅲ層)出土，1～13:ヲ

図　　版

図版１　調査地区遠景他

１．調査地区遠景（西方市立４小屋上から）

２．発掘前状況（東から）



３．土層断面（GE76区南壁、上よりⅠb、Ⅱ、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc、Ⅳb層）

図版２　調査地区全景

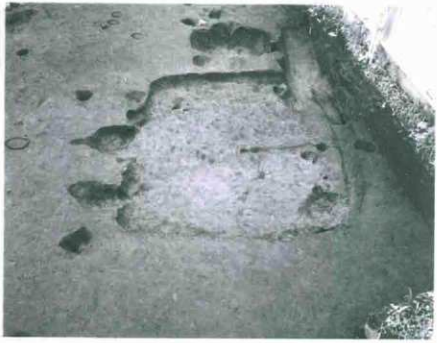
１．調査地区全景（南から）

２．調査地区全景（東から）

３．調査地区全景、中央部（北から）

図版3　SI 228住居跡

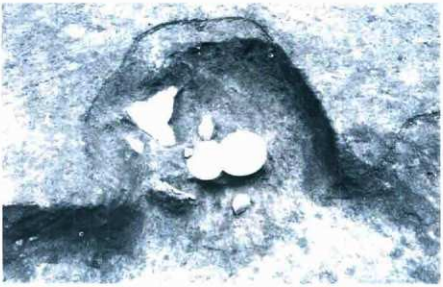
1．全　景（北から）



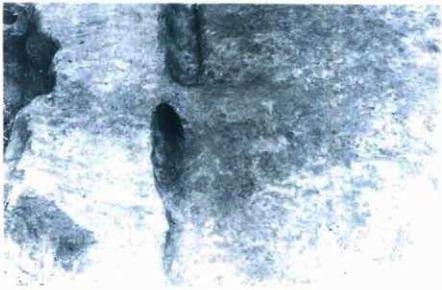
2．構築時全景（北から）

図版4　SI 228住居跡

1．遺物出土状態（東から）



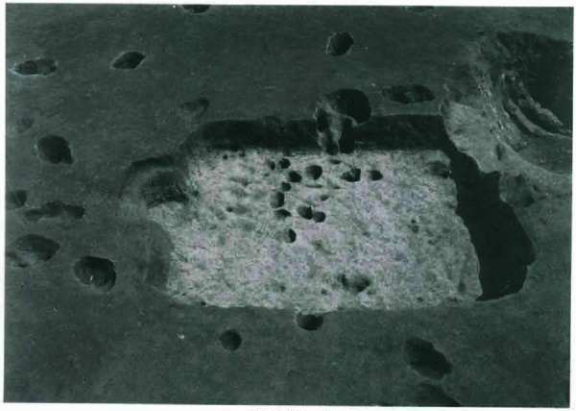
2．カマド全景（西から）



3．入口部全景（東から）

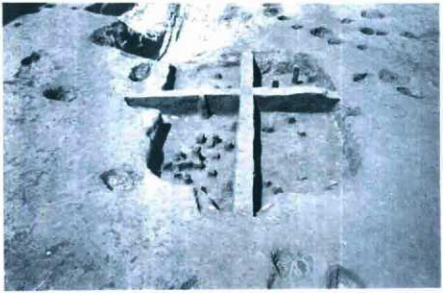
図版5　SI 229住居跡

1．全　　景（南から）

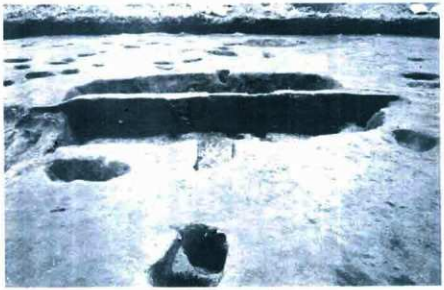


2．構築時全景（北から）

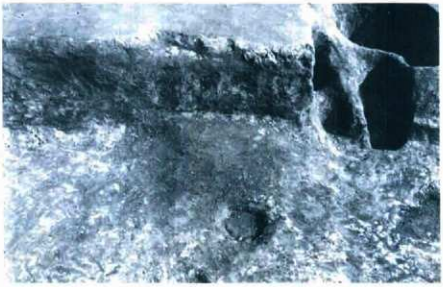
図版6　SI 229住居跡



1．遺物出土状態（東から）



2．東西土層断面（南から）



3．南壁硬質面（北から）

図版7　Si 229住居跡

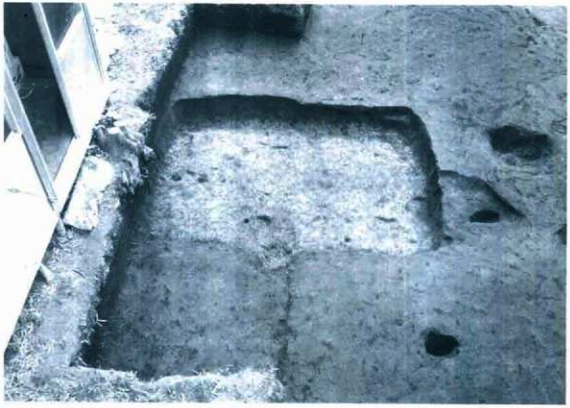
1．カマド全景（西から）

2．カマド全景（西から）

3．カマド構築時全景（西から）

図版8　SI 230住居跡

1．全　景（北から）

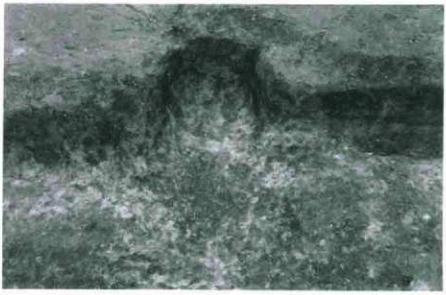


2．構築時全景（東から）

図版9　SI 230住居跡

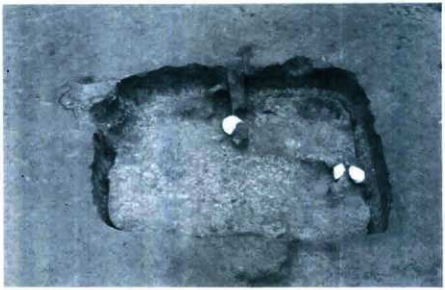
1．遺物出土状態（北から）

2．カマド遺物出土状態(西から)



3．カマド全景（西から）

図版10　SI 231住居跡



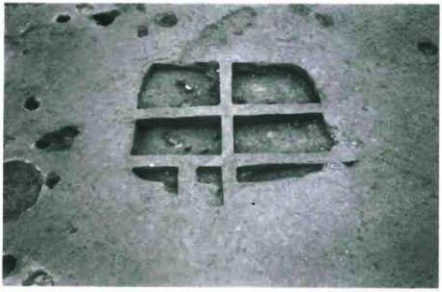
1．全景（南カマド発掘前）（東から）

2．全景（入口部除去後）（東から）

3．全景（入口部・北カマド除去後）（東から）

図版11　SI 231住居跡

1．構築時全景（北から）



2．遺物出土状態（西から）

3．南北土層断面（東から）

図版12　SI 231住居跡

1．北カマド脇遺物出土状態（北から）

2．北カマド全景（南から）

3．南カマド全景（北から）

図版13　SI 231住居跡

1．南カマド断面（北から）

2．入口部全景（東から）

3．入口部断面（北から）

図面14　SI 232住居跡

1．全　　景（東から）

2．構築時全景（南から）

図版15　SI 232住居跡

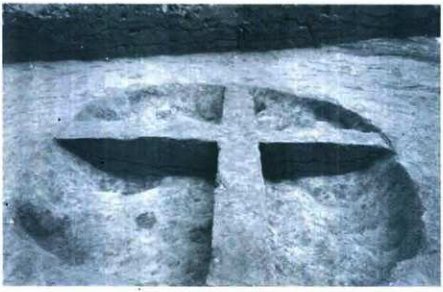
1．遺物出土状態（西から）

2．カマド瓦出土状態（東から）

3．カマド全景（南から）

図版16　SK538・539土坑

1．SK538土坑全景（東から）



2．SK538土坑東西土層断面（南から）

3．SK539土坑全景（東から）

図版17　SK539・546土坑

1．SK539土坑南北土層断面（西から）

2．SK546土坑遺物出土状態（北から）

3．SK546土坑遺物出土状態（東から）

図版18　SK546土坑

1．遺物出土状態（北から）

2．全　　景（東から）

3．南北土層断面（東から）

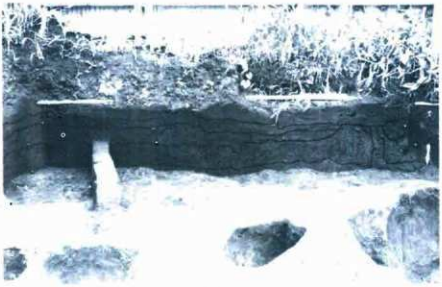
図版19　SX6道路状遺構

1．全　　景（東から）

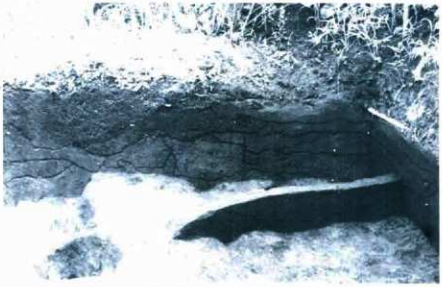
2．構築時全景（東から）

図版20　SX6道路状遺構

1．硬質土内遺物出土状態（東から）



2．南北土層断面（東から）



3．東西土層断面（北から）

図版21　SI 228住居跡出土遺物

11－2

11－8

11－3

11－9

11－6

11－10

11－7

11－12

12－1

12－2

12－3

図版22　SI 229住居跡出土遺物

12－4

12－5

12－6

12－7

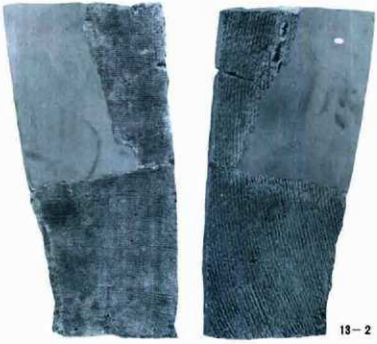
12－8

12－9

12－10

12－12

13－1



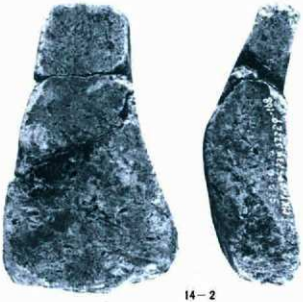
13－2

図版23　SI 229住居跡出土遺物

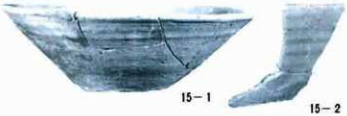
13－3

14－1

図版24　SI 229・230住居跡出土遺物

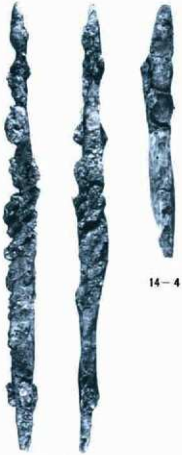


14－2



15－1　15－2

15－3

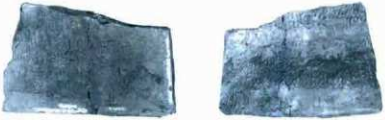


14－4

14－3

15－4

15－5



15－8

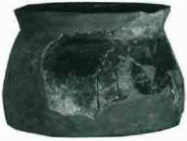
14－5

15－9

図版25　SI 231住居跡出土遺物

16－2

16－3



16－6

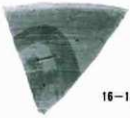
16－4

16－5

16－7

16－8

16－9



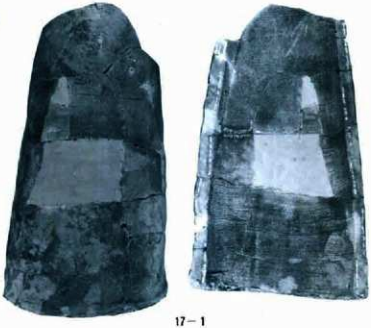
16－13

16－10

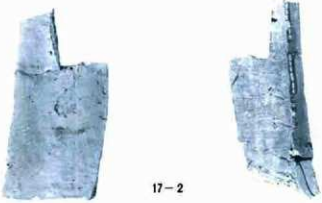
16－12

図版26　SI 231住居跡出土遺物

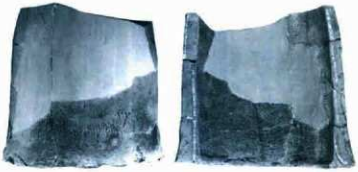
16－14



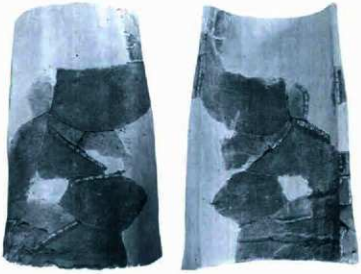
17－1



17－2



18－1



18－2

18－3

図版27　SI 231住居跡出土遺物

18－4

19－1

19－2

19－1　横骨文字部分

19－3

19－4

19－3　押印部分

19－5

19－6

19－7

19－8

19－9

19－10

図版28　SI 232住居跡出土遺物

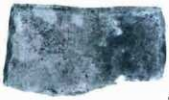
20－1

20－4

20－7

20－6

21－1

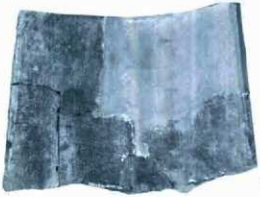


21－3

21－2

21－5

21－5　横骨文字部分



21－4

図版29　SI 232住居跡出土遺物

21－6

22－1

22－3

22－5

22－2

22－5　ヘラ書き文字部分

22－4

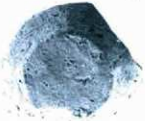
22－6

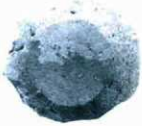
図版30　SK538・539・546土坑、P29・197、遺構外出土遺物

23－2

23－3

23－9





23－10

23－4

23－6　底部片

23－11

23－12

23－13

23－14　高台部分

24－1

24－5

24－3

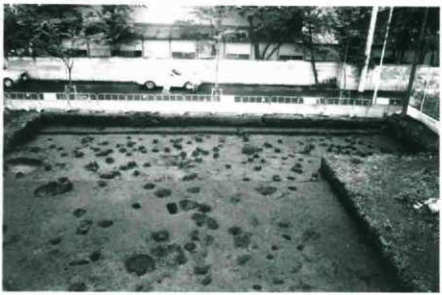
24－4

24－6

24－8

24－9

図版31　縄文時代　遺物出土状態

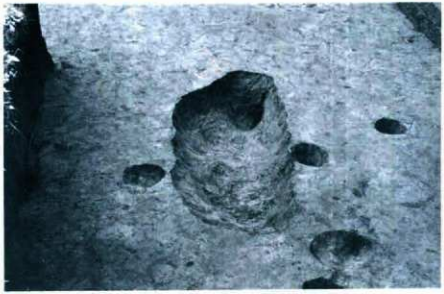


1．調査区東端部（西から）

2．調査区中半部（西から）

3．調査区西半部（東から）

図版32　SK558・560・561・562土坑



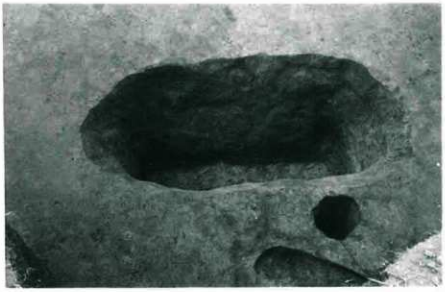
1．SK558土坑、P473全景（南から）

2．SK560土坑全景（南から）

3．SK561・562土坑近景（東から）

図版33　SK561土坑

1．全　景（東から）

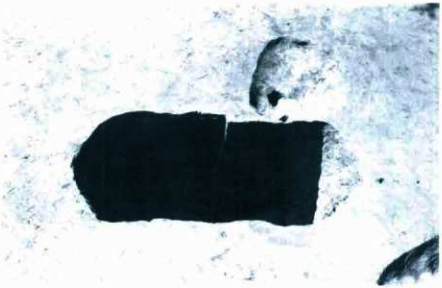


2．全　景（南から）

3．南北土層断面（西から）

図版34　SK562土坑

1．全　景（南から）

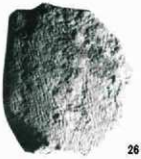


2．全　景（東から）

3．東西土層断面（南から）

図版35　縄文土器・石器

26－1


26－2

26－3

26－4

26－5

26－6

26－8

26－9

26－11

26－10

26－7

26－13

26－12

26－14

26－15

26－16

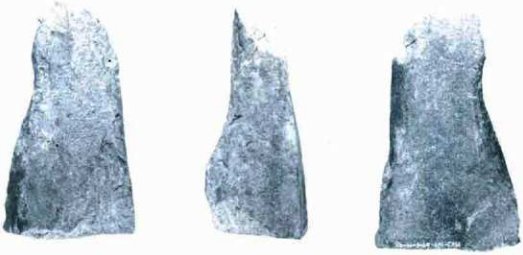
26－17

26－18

図版36　縄文石器

26－21

26－23



26－22

26－24

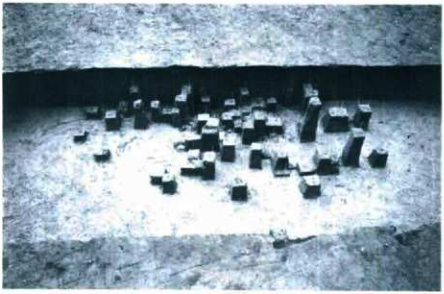
図版37　先土器時代調査区

1．A・B地区全景（調査終了時・北から）

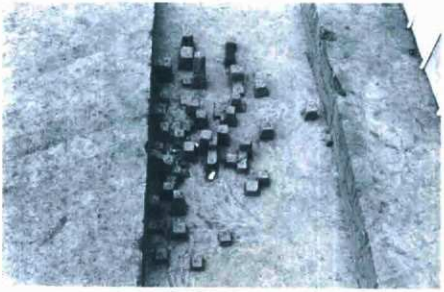
2．B地区全景（調査終了時・北から）

3．B地区南壁土層断面（北から）

図版38　先土器時代Ａ地区ユニット１



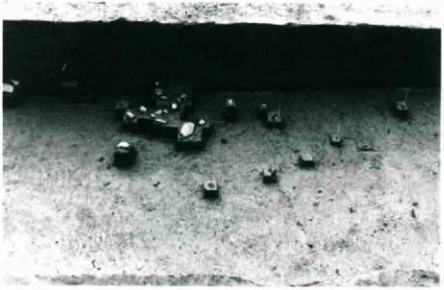
１．全　　景（東から）



２．全　　景（南から）

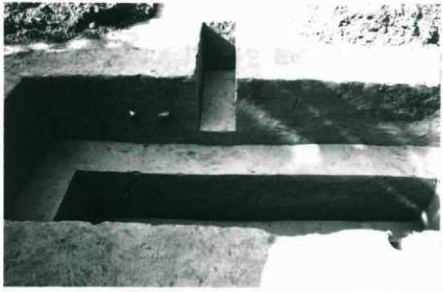
３．拡張区全景（東から）

図版39　先土器時代Ａ地区礫群１



１．全　景（東から）

２．全　景（南から）



３．Ａ地区西壁土層断面（東から、最上層がⅣ層）

図版40　先土器時代石器・礫

28－1

28－2

28－3

28－4

28－5

28－6

28－7

28－8

28－9

28－10

28－11

28－12

28－13

上　ユニット1 構成石器他
下　礫群1 構成礫(接合後)

武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ

佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査

発行日	第一刷　昭和57年9月30日 第二刷　昭和58年4月28日
編　著	武蔵国分寺遺跡調査団 ©（団長　滝口　宏）
発　行	武蔵国分寺遺跡調査会 東京都国分寺市教育委員会 〒185 国分寺市戸倉1－6－1 TEL 0423－25－0111（代表）
印　刷	信陽堂印刷株式会社

令和4年（2022）8月29日　デジタル版作成
個人情報削除